
運命を背負いし高嶺の花

神城祐也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命を背負いし高嶺の花

【Nコード】

N3471G

【作者名】

神城祐也

【あらすじ】

北西大陸にあるサントハイム王国の王女、アリーナ姫は冒険が大好きなおてんば姫。教育係兼目付役の魔法使いブライは、日夜城内脱出を試みるアリーナ姫に手を焼いていたのだが……。 (3話以降、ほぼ完全オリジナルな物語になってしまってます)

消えた王女（前書き）

この物語はSQUARE ENIX様より発売されたゲーム、ドラゴンクエスト4を題材としておりますが、ゲームのストーリーをメインとしつつも、作者のオリジナル要素をいくつか加えていますので、ゲームの内容とはまったく異なる展開になる可能性があることを予めご了承ください。

消えた王女

2章 運命を背負いし高嶺の花

1話、消えた王女

ここは中央大陸より北西にある、サントハイム大陸の首都サントハイム王国。この国はとても平和で、争いごとなど無縁の国であった。

しかし、この国の国王はある重大な出来事に頭を悩ませていた。
・・・それは・・・。

「陛下！！ 姫様が、アリーナ姫様がどこにもいらっしやいません
！！」

「・・・またか・・・」

今回で何回目・・・いやいや何十回目・・・まだまだ何百回目であろうか、サントハイム王はため息を漏らしつつ首を左右に振る。

「・・・城外へ出た様子はあるか？」

報告に來た兵士に、サントハイム王は疲れ果てた顔で問答する。

「城門の兵士の話によると、姫様らしき女性は見えていないと言って
おりました」

「・・・アリーナの部屋の様子はどうだ・・・」

「侍女の話では、壊された壁の修理も完了し、どこも変わった様子
はないと言っております」

「そうか・・・、ならば城内のどこかにおるじゃろう」

サントハイム王は多少安心した表情でつぶやくように言った。

「探した方がよろしいでしょうか？」

兵士は、サントハイム王に指示を仰ぐ。サントハイム王は少し思案したが城外へ出た様子がないようなので、搜索はする必要はないと判断。

兵士に、持ち場へ戻るように指示した。

「では、私は持ち場へ戻ります」

「うむ、アリーナが城の外へ出ぬよう、目を光らせておけ」
「はっ」

兵士はサントハイム王へ敬礼すると玉座の間を後にした。

——サントハイム城・神官室——

ここは、サントハイム城内にある小さな教会。
今ここに、一人の老人が尋ねてきていた。

「失礼するぞい」

老人は、その外見とは裏腹にしっかりした声で挨拶をすると教会内へと入ってきた。

「これはブライ様、今日はどのようなご用件でしょうか？」

入ってきた老人へ声をかけたのは神官服に身を包んだ一人の年配

の男性だった。

「神官長殿、クリフトはおるかの？」

「クリフトですか？ 彼なら今、サランの町へ使いに出しておりますが・・・」

「そうか・・・、おらぬか・・・うーむ」

ブライと呼ばれた老人は、何やら心配そうな面持ちでつぶやく。

「何かあつたのですか？」

「ああ、いや・・・、おお、そうじゃ神官長殿、姫様を見かけませんでしたかな？」

ブライは、そこまで答えるとふいに何かを思い出したように神官長と呼んだ年配の男性に尋ねた。

「アリーナ姫様ですか・・・、そう言えば今日はまだお姿を拝見してはおりませんね、いつもならクリフトを尋ねて来てもおかしくない時間なのですが・・・」

神官長は視線を上の方へ向けつつ答えた。

「そうか、見てはおらぬか・・・ふむ・・・」

そんな何気ない会話を交わしていると突然背後から声がかかった。

「・・・？」

ブライはふと後ろへ振り返ると、そこには一人のまだ若い神官が立っていた。

「ブライ様、どうかなさいましたか？」

「おお、クリフト、お前を探しておったのじゃ」

「えっ・・・？ 私に何か御用ですか？」

「そうじゃ、お前にちと聞きたいことがあつてな・・・」

「そうですか・・・まあ、その話は私の部屋でいたしましょう」

クリフトはここでは何だからと、教会の奥にある自分の部屋へとブライを招き入れた。

クリフトの部屋はこざっぱりとしていて生活感が何もなかった。

「相変わらず、何もないのお・・・お主の部屋は」

「必要最低限の物しか置いてありませんから・・・、ところで話と言うのは？」

「おお、それじゃ、それじゃ、実はな・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「！！！！」

ブライから聞かされたことはクリフトにとって驚愕的なものだった。

「あ、アリーナ姫様が城内にいない！！？」

「バカモノ声が大きい！！」

ブライに一喝され、クリフトはハッと我に振り返り両手で口をふさぐ。

「で、でも、兵士の方の様子だと城門からはとてもではありませんが、外へ出ることなどできそうもありませんよ・・・」

「うむ、それなのじゃが・・・」

ブライはそつとクリフトに耳打ちする。

「！！ 自分の部屋から外へ出た~~~~！！？」

「だから、声が大きいと申しておろうが！！」

ブライは再び、声の大きいクリフトを一喝する。

「これはあくまでもわしの想像じゃから証拠は何もないが、アリーナ姫様が何もせずに自分の部屋でおとなしくしていると思えるか？」

「・・・確かに・・・って、じゃあやつぱり城外へ出られたんだ~~~~！！！」

「じゃから、想像だと申したであろう」

「と、とにかく、アリーナ様の部屋へ行つて見ましようよブライ様」

クリフトは、いてもたってもいられず席を立つと自分の部屋を飛び出し、アリーナの部屋へと駆け出した。

ブライはその様子にため息を吐くと、ゆつくりと席を立ち、クリフトのあとを追いかけた。

——サントハイム城・王女の部屋の前——

「ですから、姫様がどなたも部屋へお入れしてはならないと申されました」

「・・・」

クリフトはアリーナの部屋の前に立っていた侍女に中へ入れてもらつよう何度も頼んだのだが、侍女の返事は変わることはなく、ク

リフトは小さなため息を漏らしていた。

「どうじゃクリフト、入れぬであろっ・・・」

「ブライ様・・・はい」

ため息を吐いていたクリフトにブライはそつと声をかけると、侍女の後ろの扉へと目を向けた。

「はたして、本当にあの扉の向こうにアリーナ様がいらっしやるのか・・・」

「侍女の方の話では、アリーナ様は部屋の中にはいらっしやらないと申しておりましたし、城内のどこかにいらっしやるのでは？」

「・・・ふう」

クリフトのその安易な考えにブライはため息ともいえないため息を吐く。

「お主は、どうしてそう楽観的な考え方なのじゃ、わしが何もせずには姫様が城内にいないなどと申すと思っておるのか！！」

「え、えっ」

「姫様は、今朝、陛下に呼び出され謁見した後、御自分の部屋へと戻られた。陛下との謁見の際にはわしも立ち会ったゆえ、そのときはまだ、姫様は城内におられた。これは間違いない。だが、御自分の部屋へと戻られた後、姿がぱったりと消えてしまったのじゃ」

「えっ」

「わしが部屋へとお戻りになられたことを確認しておる。じゃが、一度、わしが階下にいらっしやる陛下の元へ戻り、次にここへ来たときにはあのメイドが姫様の部屋の前に立っており、姫様は誰も部屋へ入れるなとのメイドに指示したようなのじゃ」

「・・・」

「矛盾しているとは思わぬか？」

ブライはそこまで早口でまくし立てた後、クリフトに尋ねた。
クリフトは首を捻りつつ、今の話を頭の中で整理してみる。

「ブライ様はアリーナ様がお部屋へと戻られたことを確認している。
そして、陛下の元へ戻り、再びここへ来たときにはあの侍女が立っ
ていた。侍女の話ではアリーナ様は部屋にはいらっしやらない・・・」

「そうじゃ、じゃが階下へ下りるには必ず謁見の間を通らねばなら
ん、すなわち陛下のお目に留まるはず、しかし、陛下は今日の朝に
一度会ったきり、姿をお見かけにはなられていない。無論、謁見の
間の兵士達も姫様をお見かけしてはいない」
「つまり・・・」

ブライとクリフトは、互いに顔を見合わせ、アリーナの部屋の前
に立っている侍女に目を向ける。

「彼女がうそをついていると・・・？」

「いや、おそらくうそはついてはおるまい・・・」

「えっ・・・？」

「おそらくは、本当に部屋にはおらぬだろう。ただ、姫様からの
指示を受け、誰も部屋へ入れさせないようにしておるだけじゃ」

「じゃ、じゃあ、やっぱりアリーナ様は・・・」

クリフトは呆然とした表情でつぶやく。

「クリフト、支度をせい」

「えっ」

「城の者達は、まだ姫様が城内におられると信じきっておる。手遅

れにならぬうちに、わしらが姫様を探し出し、城へ連れ戻すのだ！
」

「は、はいっ」

ブライの強い口調に、クリフトは多少圧倒されつつも返事をする
と、すぐに自分の部屋へと戻って行った。

ブライもまた旅支度を整えるため、階下の下りるための階段に向
かう。その途中、ブライはアリーナの部屋へと一度だけ振り返った。

「姫様・・・、どうかご無事でいてください・・・」

ブライは心の底からそう願い、階段を下って行った。

はたして、アリーナはどこへ行ってしまったのか、ブライとクリ
フトの二人はアリーナに追いつくことはできるのか、今ここに前途
多難な冒険の旅が始まる。

消えた王女（後書き）

基本的に私の書く小説って1話目が短いんですよ。

いわゆる、序章扱い……。

とか書いても、これが初投稿だから読んでる皆さんにはわかんないですね。

短いんですよ、とにかく……。

ちなみに、次の2話はえっらい長いです。

なんであんなに長くなったんだろ……、もつと簡潔に書くはずだったんだけど……。

ドラゴンクエスト4をプレイしたことのある人ならご存じでしょうが、このアリーナ姫の物語はゲーム中でも第2章の物語です。

そのため、この小説もあえて第2章としてあります。

というか、第1章の物語も書き終わってはいるんだけどね。手直

したい点がいくつも……（TT）

この手直しが、いったいいつになったら終わることやら……。

（2009年3月23日・手直し修正完了）

山間に潜む悪魔の影（前書き）

この物語はSQUARE ENIX様より発売されたゲーム、ドラゴンクエスト4を題材としておりますが、ゲームのストーリーをメインとしつつも、作者のオリジナル要素をいくつか加えていますので、ゲームの内容とはまったく異なる展開になる可能性があることを予めご了承ください。

山間に潜む悪魔の影

2章 運命を背負いし高嶺の花

2話、山間に潜む悪魔の影

前回までのあらすじ

北西の大陸にあるサントハイム王国。この国の王女アリーナが突如行方をくらませた。

それを察知した、クリフトとブライの二人はアリーナを追いかけることにしたのだが・・・。

「まったく、何ゆえに引き止めなかったのだ、あの守備兵は・・・」
「まあまあ、ブライ様、少なくともアリーナ様の行方はつかめたのですから、よしとしましょう・・・」

サントハイム王国に仕える新米神官のクリフトとアリーナの目付役であるブライの二人は、人知れずサントハイム王城を抜け出したアリーナの行方を追って旅をしていた。

途中、サランの町で聞き込みを行った二人は、サランの町の守備兵から重要な証言を得た。アリーナらしき女性が、北東にあるテンペの村の方へと歩いていくのを見たと言うのだ。

なぜ引き止めなかったのだと守備兵に食って掛かっていたブライをなだめつつ、クリフトはブライをサランの町から連れ出すと、一路アリーナの後を追ってテンペの村へと足を進めていた。

「何を言うつとる、姫様にもしものことがあつたらどうするのだ・・・」

「も、もしものこと・・・？」

「・・・魔物達に襲われるだとか、野盗どもに捕らえられるだとか、そういうことだ・・・」

ブライの言葉にクリフトはまともに顔色を変えた。

「！！ ブライ様、先を急ぎましょう！！」

クリフトは言うが早いか、ブライの手を引き走り出す。

「ま、まあ、待てクリフト。これはあくまでも想像上の話じゃ、本当にそうなるとは限らんじやろう」

「でも、もし本当にそんなことになってたら、大変じゃないですか！！」

クリフトは走りながら振り向きもせず大声でまくし立てる。

しかし、ブライはクリフトとはまったく正反対のことを考えていた。

（・・・魔物に襲われようが、野盗に出くわせようが、姫様のことじゃから苦もなく相手をひねってしまわれるのじやろうな・・・ふう、王妃様はとても淑やかな方じゃったのに、どこをどう間違えたのか・・・）

ブライはそんなことを考えつつ、思わずため息を漏らす。

「ブライ様、何ため息なんかついているんですか！！ 早く姫様をお探ししましょう！！」

「分かった、分かった・・・、分かったから手を離さぬか・・・、だが、今は姫様を探している場合ではない」

「はっ？」

ブライの突然の言葉にクリフトは目が点になる。

「気づかぬのか？」

「・・・？ 何がです？」

「周りをよく見てみるのじゃ」

「・・・」

ブライの言葉に、クリフトは周りの様子を見ってみるが、別に変わった様子はない・・・。

「別に変わった様子はないようですが・・・」

「そなたはのん気じゃのう・・・魔物がある・・・、2、3・・・いや、5匹か6匹はおるな」

「！！ 魔物！！ 6匹も！！」

クリフトは驚愕した様子で、首を左右に振り続ける。

「どこ、どこですか、ブライ様」

「少し先に森が見えるじやろう、そこに潜んでおるようじゃ」

ブライは近くの森を指差しながら、クリフトとは対照的に平然とした顔で言った。

「どのような魔物が、分かりますかブライ様？」

「・・・この距離では、ちと分からぬ・・・、もう少し近づけば分かると思うが・・・」

そう言いながら、ブライは少しづつ森の方へと足を進める・・・。
クリフトもまた、持っていた銅の剣をグッと握り締め、ブライの後を追う。

「！！」

「ブライ様？」

突然ブライは歩みを止め、辺りに目を配らせた。その様子に、クリフトは一瞬ビクツと体を震わせ、何事かとブライに声をかける。

「・・・ちとやっかいな魔物かもしれん」

「やっかいな魔物・・・」

「・・・逃げることは・・・無理じやろうな、後ろにも2匹おるようじゃから」

「えっ！！」

ブライの言葉に、クリフトは顔を青ざめつつゆっくりと後ろへ振り返る。

少しはなれたところに犬の姿をした魔物が2匹、こちらに目を向けてつつ威嚇していた。

「こ、この魔物は・・・？」

「狒犬、暴れ狒犬と呼ばれる魔物じゃ、わしらはどうやら知らぬうちにこやつ等の縄張りに足を踏み入れてしまったようじゃな」

森の方からも5匹の暴れ狒犬が現れ、クリフトやブライと距離をとったまま威嚇する。

今にも狒犬達が襲い掛かってきそうな雰囲気があるにはあった。

「クリフト、お主は後ろの2匹と戦え、前の5匹はわしが何とかしよう」

「え、ブ、ブライ様!？」

「先手必勝、隙を突いて必ず一撃で仕留めるのじゃ。1対1に持ち込めば、魔物との戦闘経験が乏しくとも何とか自力で戦えよう」

「あ、あの・・・」

「ゆくぞ!!」

ブライはクリフトのどもり声を気にせず、あらかじめ右の手の平に蓄えていた魔力を暴れ狒犬の一匹に向かって解き放つ。

ブライの魔力の玉をその身に受けた暴れ狒犬は冷気の帯に包まれ、一瞬にしてその場に凍りつく。

このブライの魔法攻撃が引き金となり、暴れ狒犬達が一斉に牙を剥き、襲い掛かってきた。

「う、うわあ!!」

クリフトは悲鳴を上げつつ、必死に銅の剣を振り回して応戦する。剣の構え方や、技の型など関係ない、クリフトはただ死にたくないがために無我夢中で剣を振り回す。

無論、暴れ狒犬もそのようなことでは怯むはずもなく、クリフトの隙を見つけて飛びかかる!!

「バカ者!! そのような振り方で魔物を倒せるとでも思っているのか!!」

ブライはクリフトの様子を見てそう叫ぶと、本来、目の前にいる4匹の暴れ狒犬達にぶつけるはずだった魔力の玉をクリフトの援護

に回す。

しかし、援護に回した魔力の玉は裏目に出た。
あるうことか、クリフトの振り回していた銅の剣にその魔力の玉
がぶつかったのだ。

だが、その瞬間、銅の剣の刀身が氷のような冷たい輝きを放つ！！

ザシュッ！

クリフトの振り回していた銅の剣が、暴れ狒犬の体にわずかに傷
をつけた。

その瞬間、暴れ狒犬が瞬く間に凍りつく。

「え！？ これは・・・」

クリフトはその様子を見て呆然となる。

（！ あれは、まさか・・・魔法剣！？）

ブライもまたクリフトが見せた攻撃に一瞬動きを止めた。

（ただの神官でしかないはずのクリフトに、魔法戦士の才能があつ
たか・・・）

クリフトは持っていた銅の剣に目を向けるが、その剣自体には何
ら変化はない。

「ガアッ！！」

その隙にもう一匹の暴れ狒犬がクリフトに飛びかかってきた！

「！ しまった！？」

剣の方に目を向けていたクリフトは暴れ狒犬の攻撃に反応できな
くなっていた。

ぐっ、と思わず目を閉じる。

バゴン！！

「！」

突然、目の前で響いた鈍い音にクリフトはその眼を見開いた。

クリフトに飛びかかった暴れ狒犬はすぐ真横の地面で、ピクピクと痙攣している。

「い、一体、何が・・・」

クリフトが暴れ狒犬の様子に気づき、呆然とした表情のまま呟く。
「もう、ブライ！ クリフト！ あなたたちこんなところで何してるのよ！！」

「！！」

さらに突然の女性の声に、クリフトは目を丸くして、その声のした方向へと顔を向けた。

そこには、小ざつぱりとした動きやすい服装で身を固めたクリフトと同じ年くらいの一人の女の子が立っていた。

その女の子は、クリフト、そしてブライの見知った顔であった。

「姫様！！」

ブライがその女の子を見て声を上げる。

「話はあと！！ 残りの魔物をやつつけるわよ！」

「は、はい、アリーナ様！」

サントハイムの王女、アリーナの掛け声にクリフトは短く返事をする、銅の剣を構えなおした。

アリーナは先手必勝と言わんばかりに、暴れ狒犬に飛びかかる。とするが、それをブライに左手で制される。

「ちよつ、ブライ！ 邪魔しないでよ」

アリーナは抗議の声をあげるが、ブライは何も返答することなく右の掌を暴れ狒犬たちに向かって突き出し呪文を唱える。

「水の精よ、我が呼びかけに応じ、敵意持ちし者達に極寒の裁きを・・・ヒヤダルコ！！」

ブライの放った氷の高等魔法【ヒヤダルコ】を受けた暴れ狒犬たちは、一瞬にして4匹ともその場に凍りついた。

「ふう・・・やれやれ、老体にヒヤダルコは疲れるわい・・・」
「・・・」

ブライの放ったその魔法の凄さに、クリフトの目が点になる。

「疲れるなら、使わなきゃいいじゃない」

「・・・姫様に無茶させるわけにはいきませぬ」

「・・・はいはい」

棘のあるその言い方にも動じることなく言い返すブライに、アリーナは肩を竦めて溜息を吐く。

「それより姫様、やっと追いつきましたぞ」

ブライはアリーナの方へ顔を向けながら疲れた口調で呟くように言った。

クリフトもまた、アリーナのそばに駆け寄る。

「・・・二人とも私のことを追いかけてきたわけ？」

「無論です、アリーナ様」

アリーナの問いかけに、クリフトが答える。

「はぁ・・・、私が城にいないこと、よくわかったわね」

「ほっほっほ、亀の甲より年の功ですな・・・、このブライめに隠し事はできませぬぞ姫様」

「・・・」

ブライの言葉にアリーナは口元を尖らせる。

「言っとくけど、城に戻るつもりはないわよ！」

「アリーナ様!？」

「姫様、そのような我儘を申されなくてください」

「私は、もっとこの広い世界を自分の目で見たいの！ 鳥のように自由に・・・」

「・・・姫様、そのようなことをして、城の者たちがどれほど心配するか、考えたことはおありのですか？」

「う、それは・・・」

ブライの強く、そして悲しげな口調にアリーナは言葉に詰まる。

「・・・」

「・・・」

二人の沈黙がしばらく続いたのを見て、クリフトが声をかけた。
「なんじゃクリフト、今、姫様と大切な話をしておるのじゃ、口を

挟むでない！」

「す、すみません・・・」

「・・・ふう、それで何の用なのじゃ？」

「あ、はい、あの、もう日が傾いていて、日が暮れる前にサランの町へたどりつくのは無理そうかと」

「むう」

クリフトの言葉にブライは天を仰ぐ。

クリフトの言うとおり、太陽はまもなく西の地平線に達しそうになっっていた。

「この地図によると、もう少し行ったところに、テンペという名の村があるようなので、今日はそこで一泊して、明日の朝、城に戻るといふのは、どうでしょうか？」

クリフトは懐から一枚の紙を取り出すと、それをブライに見せながら言った。

「ふむ、そうじゃな・・・姫様に野宿などさせるわけにはいかぬしな・・・」

「では、そういたしましたよう」

クリフトは落ち込んでいるアリーナをそつと促すとテンペを目指して歩き出す。

ブライもまた、そんな二人を見て歩き始めた。

しばらく歩くと、ブライとアリーナ、クリフトの歩調に差が出てきた。

老いたブライの歩調が遅いのではなく、落ち込んでいるアリーナとそれを支えるクリフトの方が遅くなったのだ。

「・・・」

ブライの背を見ながら歩いていたクリフトは、ある程度ブライとの距離ができたところで、アリーナに小声で話しかけた。

「アリーナ様」

「・・・」

アリーナはそつとクリフトに顔を向ける。

しかし、クリフトはまっすぐブライの背中を見据えたまま、進む歩調はそのままに言葉を続ける。

「城仕えの一介の神官でしかない私が言ってよいようなことではないのですが・・・」

「・・・」

「明日の朝、私やブライ様が起きる前に・・・村を立つてください」「えっ・・・」

「・・・」

突然の言葉にアリーナは驚いた表情でクリフトの顔を見つめた。

「私だって、アリーナ様のことは心配です・・・、でも、アリーナ様の悲しそうな顔を見ているのは、もっと辛いです」

「クリフト・・・」

「だから、アリーナ様には御自分のしたいことをなさってほしいのです」

そこまで言っつて、クリフトはアリーナに笑顔を見せた。

ただ、その笑顔は心の底からではなく、悲しい気持ちの上に無理に作った笑顔であった。

アリーナにもクリフトの笑顔の裏に隠された気持ちは容易に察することができる。

「・・・私は・・・」

「さ、アリーナ様、急ぎましょう、ブライ様に追いつかなくては」

一方的に自分の気持ちを告げたクリフトはさらにアリーナを促して、先に行くブライを追いかけた。

アリーナと合流したクリフトとブライの3人は、サントハイム城より北東にある山間の村、テンペへと辿り着いた。

「ふう、なんとか日が沈む前までに辿りつけましたね、ブライ様」
村へと入ったクリフトは安堵の溜息を吐く。

「うむ・・・じゃが、ずいぶんと陰気くさい村じゃな・・・」
ブライは村の様子を見ながら呟くように言った。

村は閑散としており、人の姿もまばらだった。

夕暮れ時とはいえ、あまりにも少なすぎるその人影、そして、暗く沈んでいる村の様子にブライはそつと目を細めた。

「あ、ブライ、クリフト、あれ・・・」

アリーナがふと何かに気づき、指を差した。

その方向には、できたばかりと思われる簡素な作りの墓がいくつも点在していた。

「6、7、8・・・この村の規模にしてはずいぶんな数のお墓ですね・・・」

クリフトはそつと墓に近づくと顔をしかめる。

「これは、かなり最近の日付・・・、ちょうど2週間前くらいでしょうか」

「どれ？」

クリフトの呟きにアリーナがそつと駆け寄る。

「あ、ほんとだ・・・」

アリーナは墓を丹念に見ながらうなずく。そんなアリーナを余所にクリフトはさらに次々と墓を見て回る。

そして、やがてクリフトは一つの大きな答えに辿り着いた。

「・・・ここにあるお墓の名前は、みんな女性のものだ・・・しかも、ほぼ2週間おきに作られてる」

「えっ、どういうこと？」

「・・・それは・・・まだ、分かりませんアリーナ様」

「・・・この村で、何かが起きた・・・ということなのかの・・・」

アリーナの問いにクリフトは返答を濁すが、ブライが代わりにそつと答える。

「・・・私、ちょっと村の中を見て回ってくる」

アリーナはそう言っつて、村の中へと歩き出す。

「あ、姫様！」

アリーナの言葉にブライがいち早く反応するが、アリーナは気に止めることもなく村の奥へと進んでいく。

「クリフト！ 何をぼんやりしておるか！ 早く姫様のあとを追うのじゃ！」

「あ、はい！ で、ブライ様は？」

「わしは先に宿を取っておくゆえ、お主は姫様から目をはなすでないぞ！」

「わ、わかりました！！！」

「あ！ あと、くれぐれも村の者に姫様がサントハイムの王女であることを気づかれぬようにな！」

「はい！」

ブライの忠告を素直に聞き入れたクリフトは短く返事をする、アリーナの後を追つて村の奥へと入つて行つた。

クリフトを見送つたブライはそつと天を仰ぐ。

空は、いつの間にか暗雲に包まれ、地平線に見えていた太陽もまた、その暗雲により徐々に光が遮られようとしていた。

「嫌な空じゃな・・・、何事も起こらねばよいが・・・」

誰ともなくポツリと呟くとブライもまた宿を探しに村の中へと進んでいった。

村の奥へと進んで来たアリーナとクリフトの二人は、教会前にできた人だかりに何事かと足を止めていた。

人だかりの真ん中には白い布で回りを覆われた人一人入れるかどうかの大きさの籠が置かれている。

「・・・何かしら？」

アリーナは首をかしげつつ、その籠をみつめた。

しばらくすると、近くの民家から真っ白なドレスを身にまとった一人の若い女性が現れた。

とても綺麗な姿をしているのに、その顔はひどく悲しげであった。「結婚式？ それにしてはずいぶん悲しい顔をしていますね・・・」クリフトがドレスをまとった女性の様子を見ながら呟くように言った。

そのとき、村の奥から若い男性が現れて、ドレスの女性に向かって声を上げた。

女性もまた、その男性に気が付き、今にも泣き出しそうな顔になる。

声を上げた男性は、近くにいた他の男性に押さえつけられ、もがいていた。

そんな様子を見ていたアリーナは思わず声を上げようとするが、隣にいたクリフトに制される。

「ちょ、何するのよクリフト」

「理由もわからずに、村に関係のない私たちが邪魔をするわけにはまいりません」

「でも、何だかすごく辛そうよ、あの人たち・・・」

アリーナが下唇を噛みしめながら言う。

クリフトもまた、アリーナとドレスをまとった女性、声を上げた男性とを交互に見まわす。

「私が少し話を聞いてきます。アリーナ様はここでお待ちください」

「クリフト・・・うん、お願い」

「はい・・・」

クリフトはアリーナに短く返事をする一人、人だかりの中へと消えていった。

アリーナはクリフトを見送った後、しばらく女性と男性を見続けた。

女性は意を決したかのように男性に背を向けると籠へ向かって歩き出した。

そして、籠に乗り込むと数人の村人たちにその籠を抱えられ、教会の中へと消えていった。

しばらく待つと、険しい顔つきでクリフトが戻ってきた。

「アリーナ様、分かりましたよ……。この村で何が起きているのが……」

クリフトが村で起こっている事件を事細かくアリーナに説明した。それはとても信じ難く残酷な内容であった。

ことの発端は、数ヶ月前に遡る。

村の北側にある広場に、魔道士風の魔物が現れたのだ。

村にいた戦士たちは、果敢にもその魔物に戦いを挑んだが、ことごとく返り討ちにされ果てたという。

そして、その魔物はあるうことが、とんでもない要求を突きつけてきたのだ。

それは……。

「生贄!？」

「はい……。村を襲われなくては、2週間に一度若い娘を生贄に差し出せと要求してきたそうです」

「……じゃあ、さっきのは……」

「……はい、今日がまさにその日なのだそうです」

「……」

アリーナはクリフトの説明に絶句する。

「た、助けなきゃ、このまま見殺しになんてできないもの」

そう言っ、アリーナは籠の運ばれて行った教会へと向かうと

するが、再びクリフトに止められる。

「ちよ、クリフト、何で止めるの!？」

「アリーナ様、生贄の儀式までにはまだ時間があります。ひとまず
ブライ様の元へ戻りましょう」

「・・・駄目よ、ブライがこの話を聞いて、私が助けに行くことを
知ったら、絶対に止められるわ」

「・・・そう、でしょうね・・・」

「だったら!」

「なればこそです!」

「・・・」

珍しく強い口調のクリフトにアリーナは言葉に詰まる。

「・・・先も言いましたが、儀式までには間があります。ブライ様
に生贄の件を話す話さないはともかく、今は身体を休めておきまし
ょう」

「・・・! クリフト」

「疲れた身体では、勝てる戦いにも勝てません」

「・・・うん」

「足手まといになるだけかもしれませんが、私もお供します」

「クリフト・・・」

「未熟なれど回復魔法を使えますから、多少の傷を負っても気にせ
ず戦いに臨めましょう」

「うん・・・ありがとう、クリフト」

クリフトに促され、アリーナは宿に在るであろうブライの元へと
向かうことにした。

しばらく村の中を歩き回った、アリーナとクリフトは無事、ブラ
イの待つ宿屋へとたどり着いた。

「姫様、お待ち申しておりましたぞ・・・、クリフトもちゃんと姫
様のそばにおったようじゃな」

「・・・」

「して、姫様、村の様子はどうぞございましたかな？」

「ん？ とくに変ったことはなかったわ・・・、ね、クリフト」

「そうですね、これといったことはありませんでした」

生贄という大事件の話を聞いていたのだが、アリーナがそれを口にしなかったので、クリフトもまた口裏を合わせるようにアリーナの言葉を肯定した。

「さようですか、ならばよいのですが・・・あつ」

納得したようにうなずいたブライだったが、何かを思い出したのか声を上げる。

「姫様、申し訳ありません・・・この村の宿には大部屋が一つあるだけらしいのです。幸い泊り客は我々だけらしいので、わしとクリフトは外で野宿といたします」

「・・・いいわよ別に同じ部屋でも、ベットが一つしかないわけじゃないんでしょ？」

「はあ、まあ、それはそうなのですが・・・、しかし・・・」

「私がいいといったの、それにこの天気だと雨が降りそうだわ、野宿なんかして風邪でもひかれると困るし」

「・・・左様ですか？」

「うん、それより、私疲れたから先に休むわね」

アリーナはそう言つて、宿の中へと入っていく。

クリフトもまたそれに続こうとするが、ブライに遮られた。

「クリフトや・・・、姫様は何もないとおっしゃられていたが、本当に何もなかったのであらうな・・・」

「・・・何もないというのは？」

「村の様子じゃよ！」

「ああ、はい、勿論ですよブライ様」

「・・・ふむ、そうか・・・」

「では、私も疲れたので先に休ませてもらいますね」

そう言つてクリフトもまた宿の中へと入って行った。

一人残ったブライは、腕を組みながらそつと足元を見つめると、

首を左右に振ったのち、宿の中へと入って行った。

数時間後

生贄の儀式の時間が刻一刻と近づく中、アリーナは身支度を整え、村の宿屋の前に立っていた。

そつと空を見上げるが、完全にどす黒い雲に覆われて星一つ見えなかった。

今にも雨が降り出しそうな、そんな雲行きであった。

「あ、すみませんアリーナ様、お待たせいたしました」

「もー、遅いクリフト！ 置いていこうかと思ったわよ」

「はは・・・、すみません・・・少しブライ様の様子を見ていたもので」

「ブライの？」

「はい、深い眠りについていただきましたよ」

「そう・・・、儀式の場所は、北の広場だったわね・・・、急ぐわよ！」

「はい」

アリーナとクリフトの二人は宿屋を後にし、儀式が行われるという村の北にある広場へと向かった。

儀式などと呼んではいるが、とくにたいそうなことが行われるわけではない。

ただ、生贄となる娘を北の広場にある祭壇の上に籠ごと置いて来るだけというものだ。

北の広場へは村の教会を通り抜けるのが一番の近道なのだが、儀式の日は村人以外誰一人通り抜けることができないことが、クリフトの集めた情報により判明している。

そのため、二人は教会脇の森の中を北の広場へ向かって疾走して

いた。

「・・・お願い、間に合って・・・」

アリーナは祈るような気持ちで道なき道を駆け進む。

「！アリーナ様っ、右手の方・・・、ご覧ください！」

「！あ！」

クリフトの声にアリーナは右の方へと顔を向ける。

そこには、今まさに広場に向かっていている村の者たちの姿があった。村人たちの中心には、教会前で見たあの籠がある。

「ふう、間に合ったみたいね・・・」

「ぜえ、ぜえ、ぜえ・・・そ、そうですね・・・」

籠の姿を見たアリーナとクリフトは周りに魔物の気配がないか気を配りつつ、木の陰に身を隠し足を止める。

深呼吸一つで息を整えたアリーナとは対照的にクリフトはすでに疲労困憊といった状態だった。

「・・・クリフト、大丈夫なの？」

「だ、大丈夫・・・です」

「・・・ふう、ホントかなあ・・・」

完全に息が上がってしまっているクリフトの様子に、アリーナは小さな溜息を吐く。

「はあ、はあ、大、丈夫、です、よ・・・はあ、はあ・・・」

「・・・」

「い、行きましょう、アリーナ様」

クリフトはよろよろと広場へ目指して歩き出す。

（・・・これってすでに足手まといよね、大丈夫なのかしら・・・？）

アリーナは苦笑いを浮かべつつ、クリフトの後を追いかけた。

「・・・雨、降ってきちゃいましたね、アリーナ様」
「そうね・・・」

アリーナとクリフトの二人は、現在、広場の祭壇から少し離れた木陰に隠れながら様子をうかがっていた。

ほんの少し前から生暖かい風が吹いていたのだが、ついに雷を伴いながら雨が降り出してしまっていた。

祭壇の上に置かれた籠も雨に濡れ、ずいぶん湿ってしまっている。広場の祭壇は思ったほど高くはなくアリーナやクリフトでも立っていれば、十分祭壇を挟んだ向こう側まで見て取れる高さだった。

「この空の様子では・・・」

「しっ、静かに！」

「！」

クリフトの言葉を遮って、アリーナが小声で言った。

すると、村とは反対側の小道の奥から黒いフードを頭からすっぽりと被った魔道士風の者が現れた。

すっぽりと被られたフードのために顔をうかがい知ることができず、男なのか女なのか、はたまた人間なのか魔物なのかも分からない姿だった。

しかし、生贄の日のこの時間、この場所に現れたということは、まず間違いなく例の魔道士風の魔物なのだろう。

その証拠に、3匹の暴れ狒犬たちが、その者の後ろから現れても動じることはなく、むしろ手懐けているような雰囲気があった。

「・・・」

魔道士が祭壇上にある籠を目指して、ゆっくりと階段を上り始める。

暴れ狒犬たちは、祭壇下で魔道士の様子をじっと見上げる。

木陰で様子を見ていたアリーナとクリフトも戦闘態勢を構え、飛び出す機会をうかがう。

そのとき、突然、アリーナ達とは祭壇を挟んだちょうど反対側の木の陰から一人の男が飛び出してきた！

「！ あの人！！」

その男は、先ほど教会前で連れて行かれる女性を必死に引き止めようとしていた、あの男性であった。

男性は、祭壇へ向かって駆け出すが暴れ狒犬たちによってそれを阻まれる。

「く、邪魔をするな！！ アリア！！」

男性は叫びながら持っていた短剣を振り回し、祭壇へと近づく。アリアというのは女性の名前だろうか？

男性の声に気が付き、アリアと呼ばれた女性もまた、男性の名前を叫ぶ。

「ケイン！ 来ちゃダメ！！ 逃げて！！」

「アリア！？」

祭壇の階段を三段ほど登ったところで足を止めていた魔道士はアリアとケインの二人の様子を見ながら大声で笑う。

そして、階段を上りきったところで足を止め、暴れ狒犬たちに足を阻まれていたケインを見下ろすと被っていたフードを外す。

「！！」

魔道士の顔は、人のような顔立ちではあったが、明らかに人とは違う部分があった。

死人のような土気色の肌、口から突き出た下向きの2本の鋭い牙の先端は顎にまで届いている。

「ククク、滑稽であるぞ人間の男よ・・・」

「何だと！！」

魔道士はゆつくりと籠に近づく。

「やめろ！ それ以上近づくな！！」

ケインの叫び声にも全く動じることなく、魔道士は籠の前までくると中にいたアリアの腕をつかみ、籠の中から引きずり下ろした。

「！ アリア！！」

ケインの様子をみて、再び大声で笑う魔道士の魔物。

「よく見ておくがいい、お前が助けにきた小娘がこの私に喰われる様をな！！」

そう言つて、魔道士は大きく口を開ける。

アリアはその魔道士の姿に身体が固まってしまっていた。

声も上げることもできず、目を閉じることもできない、まさに直立不動の状態だ。

だが・・・

「そんなこと、この私がさせるとでも思ってるの？」

「！」

突然、すぐそばで女性の声がしたかと思うと、魔道士は大きくのけ反り、祭壇の外へと転げ落ちていた。

「ンム」

魔道士は首を左右に振りながらむっくりと起き上がると、祭壇の上をスツと見上げた。

今まさに食べようとしていたアリアの隣に、一人の女性、アリーナが立っていた。

「・・・ククク、これはまた、喰いごたえのありそうな小娘だ」

魔道士はアリーナの姿を見て、嬉々とした声を上げる。

そんな魔道士の様子を見ながらも、アリーナはすぐ後ろで控えていたクリフトに振り返ることなく声をかけた。

「クリフト・・・」

「分かってますよ、あのケインさんって方を助けに行きます」

「うん、お願い・・・」

「アリーナ様も無茶はしないでくださいね」

「大丈夫よ」

アリーナに向かってクリフトは囁くように言うと、銅の剣を鞘から抜いて暴れ狒犬たちと戦っているケインの方へと向かった。

「アリアだっけ？ あなたはうかつに動かないでね」

「・・・」

アリーナの言葉にアリアは無言のままひたすら首を縦に振り続けた。

アリーナはアリアの返事を見て、軽くうなずくと祭壇をゆつくりと下りていく。

そして、一番下まで下りると所持していた武器【聖なるナイフ】を鞘から抜き取り構えた。

「おや、そのような物を持っていたのか」

魔道士はアリーナの取り出した武器を見て、面白そうに呟く。

「あんたには素手で殴りつけてもあんまり効果がなさそうだったから、武器を使うのは好きじゃないんだけど、仕方ないわ」

「ククク、そうかね？」

「言っとくけど、好きじゃないからと言って武器の扱いが下手なわけじゃないわよ！ 覚悟なさい！！」

そう言ってアリーナは魔道士に斬りかかるが、魔道士は慌てることなく後方へと跳び下がりつつ右手に魔力を集める。

アリーナがすぐ目の前まで迫ったところで、魔道士は右の掌をアリーナに向かって突き出した。

「メラ！！」

バツ！！

「きゃあ！！」

魔道士は至近距離から火球魔法【メラ】を放った。

アリーナはまともにその魔法を受け、後方へと吹き飛ばされる。

「うつ、く・・・」

魔法は直撃であったものの、後方へと飛ばされた際に受け身を取

ったので、なんとかダメージは最小限に抑えることができた。

「いたた・・・そっか、敵は魔道士だったのよね」

アリーナは呟くように言うと、仕切り直しとばかりに武器を構えなおした。

一方、暴れ狒犬たちと戦っていたクリフトとケインは、なかなか攻撃が当たらず、苦戦を強いられていた。

「くう、どうして当たらないんだ!!」

ケインは短剣を振り回しながら声を上げる。

ケインは元々、道具屋の息子で当然のことながら魔物との戦いなど皆無。

かつていた村の戦士たちですら、この暴れ狒犬は倒すのに苦労したという相手である。

戦士でもないケインがまともに戦って容易く勝てるような相手ではない。

一方のクリフトも城仕えの一神官でしかない。

当然のことながら戦いの経験など皆無・・・、いや、かろうじてこの村にたどり着く前に戦った暴れ狒犬たちとの一戦分だけケインより上なだけであろう。

数の上でも2対3と暴れ狒犬たちの方が圧倒的有利であった。

しかし、不利な状況でありながらもクリフトはやけに冷静だった。剣を構えたまま、すぐ目の前で威嚇している暴れ狒犬1匹のみをずっと見据えている。

3匹いるはずの暴れ狒犬がクリフトの前に1匹しかいないのは、ケインが短剣を振り回して暴れているので、残りの2匹がケインの方へ気を逸らされているためであった。

クリフトは暴れ狒犬を見据えながら、前にブライより教えられたことを思い出していた。

（隙について一撃で仕留める・・・、隙をつき・・・一撃で・・・）
クリフトはおもむろに目を閉じた。

「ガアッ！」

ジッとクリフトの様子を見ていた暴れ狒犬はクリフトが目を閉じたのを見て飛びかかってきた。

だが次の瞬間、クリフトは目を開け、飛び来る暴れ狒犬の前足をかわしつつ、喉元目がけて剣を突き出した。

ザシュッ！

クリフトの攻撃はものの見事に暴れ狒犬の喉元に命中。

暴れ狒犬はしばらく地面をのた打ち回ったが、そのまま絶命した。

「はあ、はあ、はあ、はあ、た、倒せた・・・」

「！やるなあ、あんた！」

クリフトの戦いぶりを見たケインが感嘆の声をもらす。

だが、そのクリフトの戦いへ目を奪われた一瞬の隙にケインと対峙していた暴れ狒犬の1匹が飛びかかって来た。

「うわあー！！」

ケインはそのまま暴れ狒犬によって押し倒される。

暴れ狒犬は止めを刺さんとばかりに、ケインの喉元へ噛みつきこうとする。

ビッ！

そのとき、噛みつきこうとしていた暴れ狒犬に向かって祭壇の上から小石が飛んできた。

どうやら、ケインを助けるためアリアが周りに落ちていた小石を投げつけたようであった。

小石は見事、暴れ狒犬に命中し、小石をぶつけられた暴れ狒犬の意識がそちらへ逸れる。

暴れ狒犬の意識がアリアの方へ逸れた瞬間、ケインを押さえつける力が弱まった。

この機にケインが反撃に出る！！

「でえい！！」

ザシュッ！！

ケインは思い切り短剣を自身の身体の上にいる暴れ狒犬の脇腹目がけて突き刺した。

暴れ狒犬が苦しそうに呻きながらケインの身体の上から逃げようとするが、それをさせまいとケインも必死に暴れ狒犬に突き立てた短剣と暴れ狒犬の前足を握りしめる。

しばらく暴れ狒犬はケインの身体の上で暴れていたが、しだいにその力も弱くなり、ついにはケインの身体の上でぐったりとうなだれ、真横の地面へと崩れ落ちた。

「はあ、はあ、はあ・・・や、やったぞ・・・」

ケインは安堵の溜息を洩らしながらも動かなくなった暴れ狒犬から短剣を引き抜き、すぐに起き上がると最後の1匹となった暴れ狒犬の方へと視線を移した。

最後の1匹となった暴れ狒犬はクリフトとケインを交互に見ていたが、やがて数歩後ずさると背を向けて、森の奥へと消えていった。

「・・・か、勝った」

ケインは安心して気が抜けたのか、その場にへたり込む。

そんなケインにクリフトはさつと近づくと回復魔法【ホイミ】の呪文を唱える。

「風の精よ、我が魔力に応え、彼の者の傷を癒したまえ・・・ホイミ！」

クリフトの回復魔法【ホイミ】によって、徐々に暴れ狒犬によって受けたケインの傷が癒えていく。

「・・・あんた、回復魔法が使えたのか・・・」

ケインの言葉にクリフトは笑顔を見せる。

「未熟者ですが、私は、サン・・・いえ、旅の神官ですから、これくらいの回復魔法なら問題なく使えます」

クリフトは思わず、サントハイム城の神官だと答えそうになるが、その言葉を飲み込み、旅の神官だと言い直して言葉を続けた。

「そうか・・・」

「ケイン！！」

そのとき、祭壇の上からアリアが駆け降りてきた。

「！アリア！」

ケインとアリアはお互いにギュッと抱きしめあう。

そんな様子を見て、クリフトは困った顔をしながらも視線を外し、回復魔法に専念した。

「アリア・・・」

クリフトの表情に気がついたケインはアリアの身体を離し、そつと声をかける。

「！」

ケインの視線の合図によって、クリフトの存在に気がついたアリアは顔を真っ赤にして俯いた。

「なあ、神官のあんた」

「はい？」

ケインは回復魔法を使い続けるクリフトに声をかけた。

「おれのことともういいから、早く、あの子のこと助けに行きなよ」ケインがクリフトから魔道士と戦っているアリーナの方へと視線

を移しながら言う。

「おれは、村の道具屋のもんで、ここに来る前に、店の売り物の薬草を大量に持って来たから……」

そう言いながらケインは薬草を取り出して見せた。

「そうですか、わかりました」

クリフトはケインのその先見の明に思わず笑顔を見せると、立ち上がりアリーナの方へと駆け出した。

ケインとアリアは再びわずかな間抱き合つと、アリーナ、クリフトの二人と魔道士の戦いを見守った。

暴れ狢犬との戦いに終止符を打ったクリフトは、魔道士と対峙するアリーナのすぐそばにやってきていた。

「アリーナ様」

「クリフト、そっちは終わったの？」

「ええ、なんとかまりました」

アリーナは魔道士から視線を外すことなくクリフトに声をかける。

「頼りないと思つてたのに、なかなかやるじゃない、見直したわよ」

「はは……、ありがとうございます」

アリーナの言葉にクリフトは苦笑いを浮かべつつ、魔道士に向かって剣を構える。

「あの魔道士、大したことないって思つてたんだけど、なかなかどうして、かなりの曲者よ」

「！」

武術の心得があるアリーナをもつてして、曲者と言わしめる魔道士にクリフトはその身を固くする。

「クリフト……、こうなったら形振りかまつてられないわ、左右から挟みうちで攻撃しましょ」

「アリーナ様……、はい！」

すみやかに作戦を立て、魔道士を中心にアリーナとクリフトは左右に展開、それぞれ武器を構える。

「ククク、雑魚どもは飯にありつけなかったようだな・・・」

魔道士は、アリーナとクリフト、そしてケインとアリアをそれぞれに交互に見回しながら低い声で呟く。

「男の肉などうまくはないが・・・、せっかくだ、私がすべて喰ってくれようぞ」

魔道士は迫りくるアリーナとクリフトの二人に向かって両の掌を向ける。

「ギラ!!」

ズオッ!!

「!!」

「!!」

アリーナとクリフトは魔道士の放った炎の魔法【ギラ】をまともに受けて吹き飛ばされる!

「うっ、もう、またなの・・・」

アリーナは愚痴をこぼしつつもしっかりと受け身を取りダメージを抑えるが、クリフトは受け身を取ることができず、地面に叩きつけられていた。

「ぐう・・・」

「クリフト! 大丈夫!？」

そんなクリフトを見て、アリーナは思わず声を上げる。

「だ、大丈夫・・・です」

クリフトは身を起こしながら、自身に回復魔法【ホイミ】を使う。その様子を見たアリーナは安堵のため息をもらした。

「ククク、回復を・・・? それを私がさせると思っのか?」

魔道士がクリフトに向かって右の掌を突き出す。

「!!」

魔道士の掌の前にはすでに魔力の玉が出現していた。

それを見たクリフトは、その場に硬直する。

「やめなさい！！」

アリーナもその様子に気づき、魔道士に向かって飛びかかるが、まるでそれを待っていたかのように魔道士は上半身をひねり、右の掌をアリーナに向ける。

「！！」

魔道士のその動きにアリーナは、自身が畏にかかったことに気がつくが、身を固める間もなく魔道士の魔法が放たれる。

「メラ！」

バシッ！！

「きゃあ！！」

アリーナは悲鳴をあげ、再び、至近距離で魔法を受けて後方へ吹き飛ばされる。

今度は受け身を取ることができず、全身を地面に叩きつけてしまった。

「うつ、くつ・・・」

「アリーナ姫様！！」

アリーナは痛みを抑えつつ、必死に立ち上がろうとするが、思うように身体を動かせなかった。

その様子を見て、クリフトが大声で叫ぶ！！

「ククク・・・ハハハハ、アッハハハハハハ」

魔道士はアリーナ、そしてクリフトの二人の様子を見ながら大声を上げて笑う。

そんな魔道士の笑い声に呼応するかのように稲光は強く光り、雨風がさらに増していった。

「さて・・・」

ひとしきり笑ったところで、魔道士は起き上がろうともがくアリーナへとゆっくりと近づく。

「ま、待て!!」

そんな魔道士をクリフトが呼び止める。

クリフトは回復魔法を中断して、剣を杖代わりにして立っていた。

「・・・」

魔道士は口元に笑みを浮かべたまま、ゆっくりとクリフトの方へ振り返る。

「ククク、先に死にたいのか小僧・・・」

「アリーナ様を・・・、お守りするのが・・・、私の役目・・・」

クリフトは傷をおして気力のみで立ち上がったため、もはやそれが限界だった。

動くこともままならず、ただ立っているだけ、それだけであつた。

魔道士は右の掌をクリフトに向ける。

「これで終わりぞ、小僧・・・」

魔道士の掌の前に魔力の玉が出現する。

「ダメ！ クリフト・・・!!」

アリーナは身を起こしつつ呻くように呟く。

「ぐっ」

クリフトは魔道士を見据えたまま下唇を噛みしめ、身体を固くする。

「メラ！」

魔道士はクリフト目がけて魔法を放った！

魔道士の掌から放たれた魔力の玉は、クリフトに向かって一直線に飛んでいく。

「クリフト!!」

アリーナが叫ぶ!!

そのとき!!

「マホカントー!!」

突然、アリーナの真後ろから声が響いた!!

それと同時に、クリフトの目の前に魔力の壁が出現!!

その壁に阻まれた魔力の玉は、そのまま魔道士に向かって跳ね返った!!

「何!？」

唐突な出来事に魔道士は身を固めることもできず、自身の放った魔法の直撃を受けた。

バシッ!

「グウ!？」

魔道士は後方へ吹き飛び、地面を転がった。

「・・・今は」

クリフトは声のした方向へと顔を向ける。

そこには、アリーナそしてクリフトのよく見知った顔の人物が立っていた。

「ブライ!!」

「ブライ様!!」

アリーナとクリフトがほぼ同時にその名を叫ぶ。

「・・・姫様にも、クリフトにも・・・困ったものじゃ・・・」

そう呟きながらアリーナの隣まで歩いて来るとブライはスッとアリーナに手を差し出した。

アリーナはブライの手を借り起き上がる。

「クリフト、お主、今のうちに回復魔法を使っておけ」

「! はい!!」

ブライの声にクリフトは素直にうなずくと自身に向かって中断していた回復魔法【ホイミ】をかけ直す。

「姫様は、これをお使いください」

「あ、ありがとう、ブライ・・・」

ブライの差し出した薬草を受け取るとアリーナもそれを使って身体を癒す。

「さて・・・」

ブライはアリーナとクリフトが身体を癒したことを確認すると魔道士の方へと顔を向けた。

「・・・」

魔道士もまた、回復魔法【ホイミ】が使えるらしく、先ほど受けた傷を癒していた。

「ふう・・・やれやれ、このような小さな山村に一体何の用があるというのかのう・・・」

魔道士を見ながら、ブライはため息交じりの声で呟いた。

「ブライ、あの魔道士は・・・」

アリーナがブライにこの村で起きている出来事を説明しようとするが、それをブライに制される。

「生贄・・・などというくだらないことのためにこの地に居座ると思えませぬがのう・・・」

「!？」

ブライの言葉にアリーナは目をみはる。

その様子にブライはニヤリと口元に笑みを浮かべる。

「姫様、わしに隠し事など出来ぬと申したではないですか」

「・・・」

ブライの言葉にアリーナは絶句した。

「で、でも、あの魔道士の魔物は確かに、アリアの、あの女性のことを食べようとしていたわ」

アリーナは成り行きをじっと見守っている、ケインとアリアの方へ顔を向けながら声を絞り出すように言った。

「・・・姫様、あれはおそらく、魔物ではありませんぬ」

「えっ？」

「・・・」

ブライは魔道士を見据えると低い声ではっきりと言う。

それを聞いていた魔道士はブライに向かって右の掌を突き出す。
魔道士のその掌に魔力の玉が出現！！

ブライもまた魔道士に向かって右の掌を突き出し呪文を唱える。

「水の精よ、我が呼びかけに応じ、彼の者に氷雪の戒めを・・・」

「メラ！！」

「ヒヤド！！」

魔道士の放った火球魔法【メラ】に対し、ブライもまたほぼ同時に氷の魔法【ヒヤド】を発動。

互いの魔力の玉がぶつかり合い消し飛んだ。

「相殺だど！？」

魔道士にはこのようなことになるとは思わなかったらしく、怒りを含んだ声で叫ぶ。

「・・・やはり・・・、そなた、魔族じゃな・・・その姿、確か、カメレオンマン・・・」

「えっ！？」

「！？ 魔族！？」

ブライの言葉にアリーナとクリフトが驚嘆する。

カメレオンマンと呼ばれた魔族の魔道士はブライに向かって目を吊り上げ見据える。

「ククク・・・、ハハハハ、アッハハハハハハ」

そして、何が可笑しかったのか大声をあげて笑い始めた。

「！？」

その様子を見て、アリーナとクリフトは身を固くする。

「・・・せっかく、喰い殺してやろうと思っていたのだが・・・や

めた、お前たち全員、我が魔力を持って消滅させてやろう」

カメレオンマンはそう言って、クリフトに向かって左の人差し指を向けた。

「!？」

「まずは、その魔法反射壁が邪魔だ・・・」

バシユッ!!

カメレオンマンの向けた人差し指の先から衝撃波のようなものが飛び出し、クリフトの目の前にあった不可視の魔法反射壁「マホカンタ」が弾け飛んだ!!

これは俗に凍てつく波動と呼ばれる魔族にしか扱えぬ技で、どんな防御魔法や補助魔法であってもその効果を消滅させる能力を持っていた。

「ちょ、ブライ、何よ今の、クリフトに何が起きたの!？」

アリーナがブライに向かって叫ぶが、ブライは首を振りながら答える。

「分かりませぬ・・・、しかし、魔族には我ら人間には扱うことの出来ぬ特技や魔法がいくつもあると聞き及んでおります」

「う・・・、ちょ、えゝ、ずるい!!」

「そのようなことを申されても困ります。もともと我ら人間より魔族の方が遥かに魔術に長けておりますれば、それも致し方ないことなのです」

「むゝ」

ブライの的確な説明にも、アリーナはやっぱり納得できないという顔で口を尖らせる。

「本来であれば、魔族であると分かった時点で姫様にはお逃げになつて頂きたいのですが・・・」

「嫌よ」

「はぁ・・・で、ありましょぅな・・・」

ブライはアリーナのその間髪入れぬ返答に溜息を吐きながら呟く。
「では姫様、申し訳ありませんが、このブライめに一つ策がありま
すれば、少々時間を稼いでいただいませぬか？」

「ん・・・わかったわ、困になればいいのね」

「申し訳ございませぬ、姫様にこのようなことを頼むのは大変心苦
しいのですが・・・」

「いいわよ別に・・・それに、私、あいつのことぶん殴ってやらな
いと気が済まないし！！」

「・・・姫様・・・お願いですから無茶だけはしないでください・・・」
「も」、分かってるわよ！！」

ブライの心配げな声にアリーナは振り切るようにカメレオンマン
目がけて走りだす。

（・・・魔族相手に生半可な術など通用しまい・・・なれど、わし
のヒヤドで奴の魔力を相殺できたところを見ると、それほど強い魔
族でもない。やはりここは・・・）

ブライは、アリーナとクリフト、そしてカメレオンマンに視線を
それぞれ移しつつ、握りしめた右手に精神を集中した。

「でえええいつ！！！」

掛け声一つ、アリーナはカメレオンマンに斬りかかる。

しかし、カメレオンマンは後方へと跳び下がしつつ、アリーナに
向かって右の掌を突き出した。

「ククク、懲りぬ小娘だ」

「そうはさせない！！」

カメレオンマンが魔法を使おうと右の掌を突き出したとき、真横
からクリフトが斬りかかった。

「チィッ！！」

舌打ち一つ、カメレオンマンはさらに後ろへ跳び下がる。

「メラー!!」

跳び下がった直後に魔法を発動させるが、アリーナとの距離は跳び下がった分さらに延びてしまい、その攻撃がアリーナに当たることはなかった。

ならばと邪魔をしてきたクリフトに魔法を放つため、左の掌をクリフトに向かって突き出した。

「ギラ!!」

カメレオンマンが炎の魔法【ギラ】を解き放つ。

「くっ!!」

クリフトは持っていた銅の剣を盾に身を固める。

炎の魔法【ギラ】により、再び後方へと吹き飛ばされることを覚悟したクリフトだったが、カメレオンマンの放った魔力の玉がクリフトの持っていた剣に当たった瞬間、剣から炎が噴き出した!!

「!?!」

「何だと!?!」

炎の魔力が込められた剣……。それはクリフトが再び魔法戦士としての力を発揮した証であった。

だが、当の本人には何が起きたのか分からず、持っていた剣を見つめ茫然としている。

何が起こったのか分からなかったのは、カメレオンマンも同じであった。

動きを止め、クリフトの剣に目を奪われる。

その隙をアリーナは見逃さなかった。

一気に詰め寄り、持っていたナイフを閃かせる!!

ザシュッ!!

「ッー！」

カメレオンマンは小さな悲鳴を上げ、斬られた脇腹を右手で押さえる。

アリーナは一瞬、追撃をかけようか迷うが迂闊な攻めは危険と判断。

一旦、クリフトのすぐ隣へと跳び下がった。

「お見事です、アリーナ様」

アリーナの戦いぶりにクリフトは賛辞の声をかける。

「ありがと、クリフト」

アリーナは短いながらも、カメレオンマンより目を離すことなく礼を言った。

アリーナの手によって脇腹を斬られたカメレオンマンは、アリーナを睨みつけながらも傷口を押えていた右手に魔力を集中させる。

「ホイミ・・・」

カメレオンマンは回復魔法【ホイミ】を使用した。斬られた脇腹の傷は瞬く間に完治する。

「嫌な奴ね・・・」

カメレオンマンのその様子を見ていたアリーナは、苦虫を噛み潰したような顔をしながら、低い声で呟いた。

一方、策ありと話していたブライは、精神集中の末、前方へ突き出した右の掌の前に魔力の玉を出現させていた。

冷気を帯びたその魔力の玉にはブライの持てる、全魔力が込められていた。

ブライはカメレオンマンからアリーナとクリフトが距離をおいたその時を見計らい、魔力の玉をカメレオンマンに向かって解き放つ！

「！」

ブライの放った魔力の玉に気がついたカメレオンマンはすぐさま撃ち落とすべく魔法を発動する。

「メラー！」

カメレオンマンは速やかに火球魔法【メラ】を魔力の玉目がけて解き放つ！！

バシッ！！

カメレオンマンの火球魔法【メラ】はブライの放った魔力の玉に直撃し、炸裂するが・・・それだけだった。

ブライの放った魔力の玉は何の変化も見せず、カメレオンマンに向かつて突き進む。

「バ、バカな・・・」

それを見たカメレオンマンは呆然と立ち尽くした。

ブライは魔法を発動させるべく、呪文を詠唱する。

「大地を流れし雲の精、我らに命を与えし水の精・・・、我が呼びかけに応え、我らに仇なすものに極寒の裁きと氷雪の戒めを・・・」
ブライの呪文に呼応するかのように魔力の玉は青白く光を放つ。

「マヒヤドー！」

魔力の玉が、カメレオンマンにぶつかるのとほぼ同時に、ブライが魔法の名を叫んだ！！

ブライが考えていた起死回生の策、それは、ブライが最も得意とする氷系の魔法の中でも、最上位に位置する吹雪の魔法【マヒヤド】を発動させることであつた。

カメレオンマンの立っていた地面から、大人の腕ほどの大きさはあるうかという無数の氷の刃が現れ、カメレオンマンを勢いよく貫いていく！！

「ガハッ！ こ、こんなバカな・・・」

カメレオンマンはあまりに強力なこの攻撃魔法の前に、体中を穴だらけにされ両膝を地面につける。

「今だわ！！」

その姿を見て、アリーナは止めを刺さんとばかりにナイフを構え飛びかかるうとする！！

「姫様！ 近づいてはなりませぬ！！」

アリーナの動きを見たブライは大声で呼び止める！！

「！！」

ブライの叫び声に思わず、アリーナは足を止めた。

その瞬間、上空より無数の氷の刃がカメレオンマンに降り注いだ

！！

「・・・」

体中を氷の刃で串刺しにされたカメレオンマンは悲鳴を上げる間もなく絶命した。

上空より降り注いだ氷の刃、それは、先ほどの吹雪の魔法【マヒヤド】によって地面より現れた、あの氷の刃であった。

カメレオンマンを貫いた氷の刃は、上空で反転、一気に降り注いで来たのである。

こうなることが分かっていたからこそ、ブライはアリーナを呼び止めたのだ。

あの時、呼び止められなければ、アリーナもカメレオンマンと同じ運命を辿っていたであろうことは言うまでもない。

「・・・何よあれ、心臓に悪いわ」

アリーナは氷の刃で串刺しにされたカメレオンマンを見ながら呟

くように言った。

「でも、勝ったのよね？ 私たち」

アリーナはそう言って、クリフトやブライへと顔を向ける。

「はい、アリーナ様」

「ふう・・・」

クリフトはアリーナの嬉しそうな顔を見て笑顔で返事をする。

ブライもまた、安堵のため息を吐きつつ無言でうなずいて見せた。

「よし、勝ったわ！！ 村を苦しめてた魔物達をやっつけたわ！！」

アリーナは両腕を元気よく上げて、声高らかに勝利宣言を上げた。

空を見上げると、いつの間にか暗雲は去り、東の空が赤く染まり始めていた。

「いつの間にか朝だったのね・・・」

アリーナが暁に染まる東の空を見上げる。

ふと、何かに気がついたかのように、アリーナはブライに向かって声をかけた。

「何ですか？ 姫様？」

「ブライは、生贄の話をどこで知ったの？」

「ああ、そのことですか、それなら宿の主人が丁寧に教えてくださいましたぞ」

「・・・それってつまり、ほとんど最初っから知ってたんじゃない」

「そうなりますな・・・」

「だったら、どうしてもっと早くに助けにきてくれなかったのよ！！」

しれっとした口調のブライにアリーナがくっつかかる勢いで声を上げた。

「そう言われなくても、わしは寝ておりましたし、何より、姫様のせいでもございましょう」

「私のせいって何よ!？」

「姫様でございましょう? 寝ているわしに睡眠薬を一服盛ったのは・・・」

「睡眠薬?」

「おかげで今も多少、眠気が残っておりますぞ・・・」

「睡眠薬って何よ、私は知らないわよ!？」

「姫様以外にそのようないたずらをする者がどこにいるというのです!」

「私は知らないってば!! クリフト! 睡眠薬なんて知らないわよね?」

「・・・! え!？」

アリーナとブライのやり取りをなぜか暗い面持ちで聞いていたクリフトだが、突然、話題を振られ思わず言葉を飲み込んだ。

「クゝリゝフトゝ・・・聞いてなかったの?」

「えっ・・・、いや・・・、聞いてはいたんですけど・・・、あの・・・、ああ、うん、睡眠薬なんて・・・、知りませんよ・・・」

「クリフト・・・?」

なぜかしどろもどろな口調のクリフトにアリーナは首をかしげる。

「・・・」

「・・・」

「クリフト、まさかお主・・・」

ブライは暗い顔をしているクリフトを見て、疑念に満ちた低い声で呟くように声をかける。

「す、す、す、すみません!! ブライ様!!」

クリフトは突然、ブライの前で土下座をする。

「クリフトお、まさか、お主に薬を盛られるとは思わなんだぞ!!」

「す、すみません・・・」

「・・・」

怒り狂うブライに対してひたすら謝り続けるクリフトの様子にアリーナは呆然としていた。

（ま、まさかクリフトがやってたなんて・・・）

二人の様子にアリーナは思わず笑みをこぼす。

（でも、いったいいつ睡眠薬を飲ませたのかしら？）

アリーナは首をかしげながら、昨晚の様子を思い浮かべた・・・。
（宿屋で出された食事の中に混ぜた・・・？ いえ違うわね、私やクリフトは食事も取らずに寝ていたわ・・・あの段階ではブライが一番最後まで起きてたはず・・・じゃあ、いったい・・・）

そこまで思い起こしたところで、アリーナはふとクリフトとの会話の中におかしな点があったことを思い出した。

それは、この広場へと向かう直前の宿屋の前でのクリフトとの会話であった。

「あ、すみませんアリーナ様、お待たせいたしました」

「もー、遅いクリフト！ 置いていこうかと思ったわよ」

「はは・・・、すみません・・・少しブライ様の様子を見ていたもので」

「ブライの？」

「はい、深い眠りについていただきましたよ」

「そう・・・、儀式の場所は、北の広場だったわね・・・、急ぐわよ！」

「はい」

「はい、深い眠りについていただきましたよ」

「深い眠りについていただきましたよ」

「深い眠りについていただきました」

「・・・あゝ!!!」

アリーナが突然、大声を上げた。

「!？」

説教をしていたブライやそれを聞いていたクリフトも何事かと、アリーナの方へと顔を向ける。

「・・・全然、気付かなかった・・・」

「・・・何がですか、姫様」

呆然とした口調で呟くアリーナに、ブライが怪訝そうな顔で声をかける。

「ふう、まあいいわ、それよりブライ！ 睡眠薬のことだけど、あれは私がクリフトに頼んだの!!」

「はっ!？」

突然の私がやりました宣言にブライの目が点になる。

「いや、さつき姫様は睡眠薬なんて知らないって、おっしゃられたではないですか・・・」

「そんなこと言ったかしら？」

「いや、言いましたよ・・・」

「言っていないわよ!! ブライ、そもそも、考えてもみなさいよ、クリフトがブライに睡眠薬を飲ませるなんてそんな大それたこと思いつくわけないでしょ!!」

「・・・」

アリーナの無茶苦茶な言い分にブライは頭を痛めた。

「ア、アリーナ様、私のことなら庇っ・・・」

「クリフト!! あんたは黙ってなさい!!」

「・・・はい・・・」

アリーナの強い口調にクリフトは顔を引きつらせたまま、うなずきながら一言返事することしかできなかった。

そんなくだらないやりとりをしていたアリーナ達のもとへ、カメレオンマンとの戦闘の成り行きを見守っていたアリアとケインの二人がやってきた。

「あの・・・」

「？ あっ・・・」

アリアとケインの二人に気がついたアリーナは笑顔で二人を迎えた。

「危ない所を助けていただいて、ありがとうございました」

アリアはアリーナ、クリフト、ブライのそれぞれに頭を下げお礼を述べた。

「気にしないで、私も久々に大暴れできて楽しかったし」

「・・・はあ・・・」

アリーナの楽しかったという言葉聞いて、ブライはため息を吐きながらがつくりと肩を落とし頭を下げてうなだれた。

その様子を見て、クリフトもまた苦笑いを浮かべている。

「・・・あ、あの、つかぬことを伺いますが、あなた様はもしや、サントハイムの・・・」

アリーナはそつとアリアの口元に右手を置いた。

アリアはアリーナの行動に思わず言葉を飲み込む。

「何も言わないで、私は旅人よ、お姫様なんかじゃないわ」
「・・・でも」

「そういうことにして、ね？」

「じゃあ、やっぱり・・・」

アリアの呟きにアリーナはそつとうなずいてみせる。
「・・・」

それを見た、アリアとケインは緊張した面持ちで丁寧に頭を下げる。

「あ、ところでアリア、一つお願いしたいことがあるんだけど、いいかな？」

「はい、なんでしょう？」

「服を着替えたいのよね・・・、もうびしょ濡れで、この格好でいるのはちよつとたまらないから」

「はい！ 私の家なんかでよければ喜んで」

アリーナの言葉にアリアは笑顔で答える。

「よし、じゃ、村に戻るっか」

かくして、アリーナと合流したクリフトとブライはテンペの村で起きていた大事件を無事解決。

テンペの村に平和を取り戻したのだった。

「あ、クリフト、私アリアのところで着替えるけど、ちっちゃい頃一緒にお風呂入ってたことがあるからって、覗いちゃダメよ」

「覗きませんよ！！ 何言ってるんですか、失礼な！！ しかも、そんな子供のころの話なんて持ち出さないでください！！」

山間に潜む悪魔の影（後書き）

いやあ、長かった・・・。
久々に・・・。

だいぶ物語としては作りこんだつもりなのですが、いかがだったでしょうか？

シリアスな場面でのクリフト君は優しいお兄さんらしく、アリーナちゃんは可愛い妹っぽく書いてみましたし、冒険（戦闘）中は逆にアリーナちゃんを頼れるお姉さんらしく、クリフト君を頑張り屋の弟っぽく書いてみましたが気付いて頂かれたでしょうか？

しかし、今回の物語も主人公のアリーナちゃんはほとんど活躍していませんね・・・。

RPGの物語であるというのに、やっつけた敵も実は暴れ狒犬1匹だけという事実・・・。

おいしいところは、ほとんどブライ様が持つてつてしまいました。

おかしいなあ・・・。

もっと活躍するはずだったんだけどなあ・・・。

次の3話はもっと短く書きたいとは思ってますが、どうなることやら・・・。

筆者（私）が行き当たりばったりなもので、書いては修正、書いては修正を繰り返して気がついたらまた長くなってるというオチが待ってそう・・・（TTT）

砂漠の闇市（前書き）

この物語はSQUARE ENIX様より発売されたゲーム、ドラゴンクエスト4を題材としておりますが、ゲームのストーリーをメインとしつつも、作者のオリジナル要素をいくつか加えていますので、ゲームの内容とはまったく異なる展開になる可能性があることを予めご了承ください。

砂漠の闇市

2章 運命を背負いし高嶺の花

3話、砂漠の闇市

前回までのあらすじ

無事、サントハイムの王女アリーナと合流した新米神官のクリフトと目付役の魔法使いブライは途中、ある一つの村に立ち寄った。

その村では魔族が絡む大事件が起きていた。

事件を知ったアリーナは、クリフト、ブライとともにその魔族に戦いを挑み、辛くも勝利をつかみ取ることができた。

サントハイム王国領にあるテンペの村で起きた大事件を解決したアリーナとクリフトの2人は現在、テンペの村より北東にあるフレノールという名の町を目指して旅をしていた。

「よろしかったのですか、アリーナ様……。ブライ様をおいてきてしまっても……」

「仕方ないじゃない……。この前の大雨で風邪ひいちゃって寝込んでしまったんだから……」

大雨が降る中起きたテンペ村での大事件……。カメレオンマンとの戦闘……。に終止符を打ったアリーナ達だったが、その雨の影響えいきょうを受けたブライは風邪をひき、熱を出して寝込んでしまっていた。

このままそばにいては、風邪がうつってしまうかもしれないという事で、先に村を後にすることにしたのだが……。

「……それでも、あんな嘘ついちゃって、よかったんでしょうか

「？」

「何よ・・・」

「ブライ様には大人しく城に戻ると伝えているのに、私たちが今進んでる方向は真逆ですよね・・・」

「ああでも言わないと、風邪をおしてでもついて来るとか言いそうじゃない」

「まあ、確かにそうかもしれないですね」

アリーナの的を射た言葉にクリフトも思わずうなずく。

「とりあえず、ああ言っとけば安心してゆっくり村で休んでくれそうだし、ブライが本当のことに気付くまでに城に戻れば問題ないでしょ」

「まあ・・・そうですね、気付く前に戻ればいいんですけど・・・」

「クゥリフト、悪いことは考えてるときりがないわよ、気にせず行きましょ」

アリーナは明るい顔でクリフトの腕を引く。

そんな様子にクリフトは苦笑いをしながらもうなずいて、アリーナとともに冒険する道を選ぶことにした。

「それにしても・・・、ブライ様もお年なのですかね？」

「ん？」

「私たちよりも雨風にさらされていた時間は少なかったはずなのに、ブライ様だけが風邪をひいてしまわれたのですから・・・」

「そうね、流石のブライも年には勝てないのかもね」

クリフトが頬を掻きながら呟くように言った。

そんなクリフトを見ながらアリーナは笑顔で返事をする。

「あ、そうだクリフト」

「？　なんですか？」

「この間の戦いの後」

「覗いてませんよ」

アリーナの言おうとしたことが分かったらしく、クリフトが間髪

入れずに答える。

「・・・何で言おうとしたこと分かったの？」

「伊達にアリーナ様の幼馴染みなんてしてませんよ」

「クリフト、つまんな〜い」

冷静なクリフトの受け答えにアリーナが口を尖らせる。

「つまんないなんて言われましてもねえ・・・」

「こういうときは、嘘でも、覗きましたって言わないと」

「・・・覗きましたって、それセクハラしましたって言うてるようなもんじゃないですか」

「クリフト真面目だから、絶対、着替えを覗いてないことくらい分かってるわよ」

「・・・」

「だけど、こうでもしないと会話盛り上がらないじゃない」

「そんな盛り上げ方嫌ですよ、私」

「も〜、クリフト、つまんな〜い」

「・・・はああ・・・」

アリーナの無茶苦茶な言葉の振り方にクリフトはため息をもらした。

「なんかさ、魔物も全然出てこないしさ・・・、つまんな〜い」

アリーナがぶーぶーとクリフトに向かって文句を垂れる。

「いいじゃないですか、平和で・・・」

「そんなのつまんないもん、せつかくの冒険なのにい」

「はああ・・・、またそんな子供みたいなこと・・・」

そんなアリーナの言葉にクリフトは再び大きなため息をもらした。

つまらないとぼやき続けるアリーナは面白そうなものはないかとぐるりと周りを見渡す。

ふと、そんなアリーナの視線がちょっと先にあるたくさんの木々を見つけた。

「あ、クリフト〜、あの森の中に入ってみましょ」

「えっ、ちょ、待つてください、なんで森の中にわざわざ入る必要があるんです？ 道なりに行けば、町に着くでしょうに」

クリフトがフレノール方面の道を指差しながら言う。

「だってつまらないじゃない、クリフトが嫌だって言うなら私一人で行くからいいわよ別に」

「えっ・・・、あゝもう、分かりましたよ、行ってみましょう」

「そうこなくっちゃ」

アリーナは笑顔で森に向かって突き進む。

その後ろでは、クリフトががつくりと肩を落としていた。

クリフトは今更ながらにブライをテンペの村へ置いてきてしまったことを後悔していた。

なぜなら、自分の発言にはアリーナの行動を制限できるだけの力がないことに気が付いたからだだった。

もちろん、アリーナに対して危険が及びそうな場合は、無理にでもその行動を止めることはできるかもしれないが、普段のこの気まぐれな行動はクリフトに止められようはずもない。

どんなに幼馴染みだ何だと言っても、姫と従者の関係が覆ることはないからだ。

対して、ブライも従者という立場ではあるが、アリーナの関係係兼目付役という立場でもある。

当然ながらブライならば、アリーナの行動には口を挟むこともできる。

もっとも、口を挟むことができるからと言って、アリーナがそれを素直に受け入れる方がまれなのだが・・・。

「・・・はああ・・・」

クリフトは本日3回目のため息を吐きながら、アリーナの後を追いかけた。

「結構広そうね、この森」

森の中へと足を踏み入れた、アリーナは背の高い木がいくつも生えてることを見て声を上げた。

たくさんの木々に囲まれてはいるが、ところどころで日の光がもれており道に迷う心配はなさそうだった。

そんな中、しばらく森の中を歩くとアリーナは近くに面白そうなものを発見。嬉々とした声を上げてクリフトを呼ぶ。

「クリフト、あれ見てよ!!」

「？」

アリーナの指差すその先にあるもの、それはぱっくりと口を開いた洞窟の入口であった。

「あ!!」

それを見たクリフトは見てはいけないものを見たような、素っ頓狂な声を上げる。

「ねえ、クリフトお」

「・・・」

アリーナが猫なで声を使いながら、クリフトに声をかける。

そんなアリーナを見てクリフトは数歩後ずさる。

「あの洞窟なんだけど」

「だ、駄目ですよ、アリーナ様」

「えゝ、どうして、いいじゃない、入る」

「駄目ですってば!」

なおも食い下がるアリーナに対して、クリフトはそれを拒み続けた。

「・・・いいわよ、それなら私一人で行くから」

そんなクリフトの態度に痺れを切らせたアリーナは、クリフトに背を向けて一人で洞窟を目指して歩き出した。

「! お待ちくださいアリーナ様!!」

それを見たクリフトは強い口調でアリーナの腕を掴んだ。

「！ 何よク・・・」

アリーナは文句を言おうとクリフトの方へ振り返ったが、その言葉は最後まで続かなかった。

クリフトの目を見た瞬間、言葉に詰まってしまったのだ。

睨んでいるわけではない。だが、クリフトの瞳の奥に見えた強い意志にアリーナは何も言えなくなっていた。

「アリーナ様、私は絶対に洞窟に入るなと言っていているわけではありません」

「・・・どうということ？」

クリフトの言うことが理解できないアリーナは首をかしげる。

アリーナが首をかしげるのも当然だろう、はたから見ていてもクリフトが洞窟に入るなと言ってるようにしか見えないのだが・・・。

「私が言ってるのは『今洞窟に入るな』ということですよ」

「今？」

「そうです、私たちは今、フレノールという町に向かって旅をしているだけです」

「うん・・・」

「洞窟を探検する準備なんてまったくしていません」

「あ・・・」

「つまり、私が言いたいのは、町に行って洞窟に入るための準備をしましょう、ということですよ」

そこまで聞いて、アリーナはようやく納得できたのか、クリフトに笑顔を見せる。

「洞窟は逃げたりしませんよ」

「うん」

クリフトの言うことに素直にうなずくとアリーナは洞窟へ入る前に一旦、フレノールの町を目指すことにした。

（はああ、ホントは絶対に入りたくないんだけど、ああでも言わないとこっちの言うことなんて聞いてくれないからなあもう・・・）

先行くアリーナの背中を見ながらクリフトが心の中で呟く。
それは、アリーナを危険な目に遭わせたくないというよりも、自分が危険な目に遭いたくないという本音であった。

しばらく歩いて二人は森の中を脱出、フレノールの町に向かって歩いていったのだが、なぜか一向に町が見えてこず難渋していた。
「クリフト・・・、ずいぶん歩いた気がするけど、町はまだなの？」
「・・・おかしいですね、もう町についててもいいはずなんです」
アリーナの問いかけにクリフトも困惑した表情で呟く。

実は、アリーナ達は森の中へと足を踏み入れたせいで、自分達の居場所の把握ができなくなってしまっていたのだ。

森にさえ入らなければ、すぐ目と鼻の先にフレノールの町があったはずなのだが・・・。

「あ、あそこに誰がいる！ ちょっと聞いてみましょう」

近くの川辺で何かをしている一人の男性を見つけたアリーナはクリフトを伴い、その男性に声をかけた。

「ん？」

男性はアリーナの声に気が付き、そっと顔を上げた。

男性はどうやら、剣の手入れをしているようであった。

男性の持っていた剣は何かの血で汚れ、それを川の水で洗い流しているようだ。

「ちょっと道を聞きたいんだけどいいかしら？」

「どうぞ」

男性はそう言うと、再び視線を持っていた剣へと向け、手入れを始める。

「フレノールって町に行きたいんだけど、どう行けばいいのかしら

「？」

その問いに男性は訝しげな顔で再びアリーナの方へ顔を向けた。

「あんたら、フレノールから来たんじゃないのか？」

「えっ、どういうこと？」

「どういうことも何も、あんたらが来た方向にフレノールの町があるじゃないか」

「・・・」

男性に言われて、アリーナは思わず来た道を振り返る。

「・・・アリーナ様、どうやら私たちは町を通り過ぎてしまったようです」

クリフトがアリーナの方へと顔を向けつつ呟くように言った。

「町を通り過ぎたって、気づかないはずはないと思うんだが・・・」
クリフトの呟きに男性が声をかける。

そんな男性に対して、クリフトがここまで来た経緯いきさつを説明した。

「ははは、それは難儀だったなあ」

クリフトの説明を聞いた男性は、声を上げて笑うとクリフトに労いの言葉をかけた。

そんな二人の様子を黙って聞いていたアリーナは口元をぐつと尖らせると、思いつきクリフトの足のつま先を靴のかかとで踏みつけた。

「っ！！！？」

靴の上からとはいえ、痛いものは痛いらしく、クリフトは声にならない悲鳴をあげて地面を転がる。

男性はそんなクリフトを見て、再び声を上げて笑った。

「もゝ、そんなに笑わないでよね」

「ははは、これは失礼」

ガサッ！

クリフトの愚痴に談笑していた男性はふと近くの茂みから音がし

たのを聞き、素早く視線を音のした方へ動かした。

「血の匂いに釣られて来たか・・・」

「？ 何？」

その呟きに、アリーナが男性の視線の先へと顔を向ける。

アリーナが顔を向けたその先には、子供の背丈ほどはあるうかという草が生い茂っていた。

そのうちの一部の草がガサガサと横に揺れている。

「・・・おそらくは、^{とさかへび}鶏冠蛇・・・」

「とさかへび？」

しばらく揺れている草を見ると、そこから3匹の大蛇が現れた。

大蛇の頭には大きな赤い鶏冠が付いている。

それは男性の予想通りの魔物、とさかへびであった。

「！！」

つま先を踏まれて悶えていたクリフトも魔物の存在に気が付き、痛みを堪えて立ち上がる。

「久々の魔物、腕が鳴るわ」

言うが早いか、アリーナは素早く戦闘態勢を整えるととさかへびの一匹に向かって跳びかかる。

「はあああ！！」

気合いの掛け声とともにアリーナがとさかへびの顔目掛けて回し蹴りを繰り出した。

バコッ！！

鈍い音とともにとさかへびが地面へ崩れ落ちる。

「ほう、やるものだな」

そんなアリーナの活躍に男性が賛辞の声を投げる。

「当然よ！ って、あなたそっちに魔物が一匹行ってるわよ！」

「ん？」

アリーナの活躍に気を取られていた男性にとさかへびの一匹が迫っていた。

しかし、男性は少しも動じる様子を見せず、迫りくるとさかへびを見据えている。

「水の精よ、彼の者に冰雪の戒めを・・・ヒヤド！」

男性は手早く呪文を唱えると迫るとさかへびに氷の魔法【ヒヤド】を発動した。

魔力の玉をぶつけられたとさかへびは瞬く間に凍りつく。

「ふっ、鶏冠蛇とさかへびなど・・・、容易い」

口元に笑みを浮かべながら男性が低い声で言う。

「あなた魔道士なの？ そんな風には見えないけど・・・」

「魔道士か・・・そのようなものだが、正確には魔法戦士・・・であるな」

アリーナの疑問に男性は淡々とした口調で言った。

「もちろん、剣の腕とて伊達ではないよ」

そう言いながら、残る一匹のとさかへび目がけて洗ったばかりの剣を振るう。

ザシュッ！

男性の振るった剣は一刀のもとにとさかへびの頭を斬り飛ばした！

頭を失ったとさかへびの胴体はしばらくピクピクと震わせていたが、やがてそれも動かなくなった。

「うわぁ、凄い腕前ですね」

男性の見事な剣さばきにクリフトが感嘆の声をもらす。

「凄い腕前か・・・いや、まだまだだな・・・」

クリフトの言葉とは裏腹に男性は自身の左腕に目を落としながら呟いた。

男性の左腕からはわずかに血が流れていた。

とさかへびに斬りつけた際、とさかへびから反撃を受けていたのだ。

ほんの一瞬の出来事であったが、とさかへびは男性の剣撃より早く、男性のその左腕に向かって噛みつこうと大きな口を開けていた。しかし、噛みつく前に男性の剣によってその頭を斬り飛ばされたわけだが、その際に男性の左腕にとさかへびの牙がかすめていたのだ。

それによって、男性の左腕に小さな傷を付けたわけである。

男性の腕の傷を見たクリフトはそつと近寄ると回復魔法【ホイミ】の呪文を唱える。

「風の精よ、我が魔力に応え、彼の者の傷を癒したまえ・・・ホイミ！」

クリフトの回復魔法【ホイミ】によって、男性の腕の傷は瞬く間に完治する。

「すまないな・・・えっと」

「クリフトです」

礼を述べようとした際に男性は言葉に詰まる。

それは、まだお互いに名乗りあつてすらいらないことに気がついたからだった。

そんな男性の心を見透かしたのかのようにクリフトは名乗って見せる。

「・・・俺の名はユータ、そっちの彼女は？」

「私はアリーナよ」

男性・・・ユータは、アリーナの名前を聞いてそつと首をかしげた。

「アリーナ・・・サントハイムのお姫様もそんな名前だったような？」

「・・・」

「・・・」

ユータの呟きにアリーナは見事なポーカフェイスでかわして見せるが、クリフトはわずかに驚いた表情をしつつ口を閉ざしていた。そんな二人の顔を見比べたユータは、思わず苦笑する。

「まあ・・・、気のせい・・・と、いうことにしておこうか」

クリフトの反応を見れば、アリーナがサントハイムの王女であることはほぼ一目瞭然いちもくりょうぜんであつたが、ユータはあえて何も聞かないことにした。

「と、ところで、ユータさんはこんなところで何をされていたんですか？」

クリフトはアリーナの話題から別の話題へ何とか話を切り替えようとユータに話しかけた。

クリフトの表情から話題をすり替えようとしていることは明らかであつたが、アリーナのことは特に触れないことにしたので、ユータもクリフトの仕掛けた話題すり替えに乗ることにした。

「んー、あんたらが来る前に、数匹のコドラっていう魔物に襲われてな、斬り伏せたんだが血のりがべつとりと剣についてしまったんで、その血のりをその川で洗い流してたんだよ」

ユータが状況を説明しながら、近くの川を指差して言った。

「・・・なるほど」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

クリフトはユータの説明に納得するが、話題のすり替えに失敗したことに気がついた。

三人の間に微妙な空気が流れる・・・。

「あ・・・、えーと、それで、ユータさんはどこにいかれるところだつたんですか？」

この空気を何とかしようと、再びクリフトがユータに向かって話しかける。

「俺か？ 俺は、南の小さな砂漠で開かれてるバザーに行くつもり

「なんだが」

「へえ、バザーですか」

「バザー！ 行く行く、私も行くー！！」

ユータの話の中に面白そうな内容を見つけたアリーナは突然声を上げた。

「えっ、ちょ、アリーナ様」

「ねえクリフト、私たちもバザーに行ってみよ」

「はあ、まあ、それはいいですけど・・・」

クリフトは困った顔をしつつユータの方へ顔を向けた。

ユータはクリフトの考えてることに察しがついたのか、笑顔で同行を許可した。

「すみません、ユータさん」

「いいよ、あんたらと一緒にの方が楽しそうだしな」

だが、そんな言葉とは裏腹にユータが困った顔をして空を見上げる。

クリフトとアリーナもユータにつられて空を見上げた。

「だが・・・間に合うかな？」

空を見上げながらユータがぼそつと呟く。

空は夕日で赤く染まり、また、星もちらほらと見えつつあった。

「どうかしたの？」

ユータの呟きを聞き逃さなかったらしく、アリーナが聞き返した。

「ちよつと用事があつて、明朝までにバザーに行かなくてはならな
いんだが・・・、あんたらの足では難しいかなと思つてね」

「あら、私ならまだぜんぜん平気よ」

「そうかね？」

「クリフトも平気よね？」

「え？ ええ、まあ、そうですね」

クリフトはすでに歩き疲れて体力の限界も近かったが、未だ元気なアリーナの手前、疲れましたとは言えず、曖昧な返事をする
しかできなかった。

「ふむ、では行こうか」

二人の様子を見ながら言うとユータは剣を鞘に納めて歩きだした。アリーナとクリフトもまたそれに続いた。

しばらく歩いて、太陽と入れ替わるように現れた月が天頂に達しそうになった頃、三人はバザーが開かれている砂漠の前にやってきていた。

まだ少し距離はあるが、小砂漠であったため、砂漠に入る前からすでにバザーの位置は目に入っている。

「クリフト・・・つまんない」

「・・・え？」

ひたすら歩くだけの冒険に飽きてきたらしく、アリーナがクリフトに向かって愚痴をこぼした。

実は、ユータとの出会いの場に出くわしたとさかへびとの戦闘以降、ただの一匹の魔物とも会おうことなくここまで辿り着いていたのだ。

「どうして魔物、出てこないわけ？」

「・・・さあ？」

「私が一人で城・・・じゃなくて、家を抜け出して冒険に出た時には、さんざん魔物とあって戦闘になったのに・・・」

「はあ、そんなに戦闘してたんですか？」

「そうよ、なのにここにきて全然出てこないのはどうしてかしら？」

アリーナは退屈そうな顔で首をかしげる。

そんなアリーナの様子にユータが怪訝そうな顔をする。

「魔物と会わないなんて、当たり前じゃないか・・・」

「なんでよ？」

ユータの言葉にアリーナが疑問の声を投げる。

だが、その疑問の答えを伝えようとしたユータを遮るようにクリフトが声を上げた。

「こ、これは、天運ですよ、神様が味方してくださっているんです！ さあ、バザーはもうすぐです、行きましょう、アリーナ様！」
ほとんど一方的に早口でまくし立てたクリフトはアリーナの背中を押しながら歩き出す。

「ちよ、何よクリフト、わ、分かったから、自分で歩くから押さないですよ」

「さあ、行きましょう、とにかく行きましょう、ユータさんも早く」

「・・・ははは」

背中を押しながらずんずんと歩くクリフトを見て、ユータはおかしそうに声を上げて笑うと後に続いた。

魔物と出会わない理由、それはクリフトが予めテンペの村で大量に購入していた『聖水』が原因だった。

聖水には使う（自身に振りかける）と魔物を遠ざける効果があるのだ。

実は、クリフトはとこどころでその聖水をアリーナに気付かれないように使い続けていたのだ。

だから魔物と遭遇しなかったのである。

とさかへびの件は、ユータの剣についていた血の匂いにつられて出てきたので聖水とは無関係。

ユータはクリフトが使っていた聖水に気が付いていたので、そのことをアリーナに伝えようとしたのだが、クリフトによって無理矢理遮られてしまった。

魔物と戦いたがっていたアリーナがそのことを知ったら、クリフトは・・・どんな目に遭うかは想像に難^{かた}くない。

クリフトの様子から、何かを察したユータは笑うだけにとどめて、真実は伝えずにしておくことにした。

―― 砂漠のバザー ――

さらに砂漠を歩き続けた三人は、結局クリフトの策略（聖水使用）の前に、一匹の魔物にすら出会うことなくバザーの会場へと辿り着いた。

「ちょっと！ 結局、魔物一匹も出なかったじゃない、どういふことよこれ！」

バザーの会場前に着いたアリーナは一人明後日の方向に向かって愚痴をこぼす。

その原因はクリフトにあるのだが、アリーナのその剣幕にクリフトは何も声をかけることができなかった。

「まあ、運が良かった・・・いや、アリーナにとっては運が悪かったんだろうさ」

「む」

口を閉ざすクリフトに助け船を出すかのようにユータが答える。

その答えにアリーナは口を尖らせたが、魔物と出会わなかったことはもはやどうにもならないので、諦めてバザーの方へと興味を移すことにした。

アリーナの様子を見て、ホッと胸をなでおろしたクリフトは一言も発することなくユータに向かって合掌していた。

まさにありがとうと言わんばかりに・・・。

ユータはそんなクリフトに声を立てることなく苦笑いを浮かべた。

バザーは真ん中に広がる大きなオアシスを取り囲むように行われており、夜中だというのに未だ人の活気は衰えてはいなかった。

「いや、それにしてもすごい活気ね、真夜中も真夜中、もう日

が変わる時間だって言うのに」

バザーのその活気にアリーナが目丸くしながら呟いた。
城からほとんど出たことのないアリーナにとってみれば、この光景は非常に新鮮に映ったことであろう。

それはクリフトも同じであつた。

「ホントですよ、私はサランの町に何度か行ったことがありますけど、それでも夜になるとだいぶ静かになりますから」

アリーナもクリフトも感嘆といえる感想をもらす。

ドン！

「おっと、ごめんよ」

「あ、すみません」

後ろからやってきた見知らぬ男性とクリフトが肩をぶつけていた。
お互いにとくに言い争うこともなく謝る。

男性はそのまま人ごみの中へと消えて行きそうになるが、様子を見ていたアリーナとユータの二人はその男性の背中を見て、ほぼ同時に動いていた。

ガシッ！

背後から駆け寄つたアリーナがその男性の左腕をねじ上げる。

「っ！！！？」

腕の痛みに悲鳴を上げそうになるが、喉元に突きつけられたユータの剣に気が付き言葉を飲み込んだ。

「盗んだ財布を返しなさい！」

「スツた財布を出せ！」

アリーナとユータがほぼ同時に叫ぶ！

「！？」

アリーナとユータの行動を呆然と見つめていたクリフトは我に返

ると、財布が入っているはずのポケットに手を入れた。

「！　ない・・・」

ここにきて、ようやくクリフトは自分の財布が盗まれていたことに気がついた。

男性は恐怖と痛みに歪めた顔で盗んだ財布を取り出すとアリーナに渡した。

財布を取り返したアリーナはねじ上げていた腕を放すと男性からそっと離れる。

「・・・行け・・・」

喉元に突きつけた剣を下すことなく、ユータが男性に向かって小声で呟く。

「・・・」

男性は悔しそうな顔をしながらも数歩後ずさると人ごみの中に走り去った。

ユータは男性の姿が消えたのを確認すると剣を鞘へと収めた。

この騒ぎに何人かの野次馬が遠巻きに様子を見ていたが、ユータが剣を収めたのを見て興味が失せたのか、各々に散っていった。

「もー、クリフト、気をつけなさいよね」

財布をクリフトに渡しながら、アリーナが呟くように言った。

「すみません・・・」

アリーナの言葉に、クリフトは申し訳なさそうな顔で呟く。

「まあ、仕方ないさ、こういうところは初めてなんだろう？」

「はい・・・」

「人が多いってことは、それだけ犯罪も多いってことだから・・・。こういった見知らぬ者が多数に集まって開かれるバザーなんかはとくに気をつけないな」

ユータは気落ちしているクリフトを励ますように言う。

「はい」

「じゃ、気を取り直して、見て回りましょ」

クリフトが多少元氣を取り戻したところで、アリーナはクリフトのその腕を掴むとバザーを見て回ることにした。

砂漠のバザー・オアシス

しばらくいろいろな店を見て回ったアリーナ達はオアシスの畔で腰を下ろしていた。

「いや、いろんな店を見て回りましたが、バザーで売られてる品物は随分安いんですね」

クリフトが今まで見たことのないような安価な値札がつけられていた品々を思い出しながら言った。

「・・・それは夜だから、だろうな・・・」

「・・・？ 夜だから？」

クリフトの呟きを聞いていたユータが誰ともなく言った。

その呟きを聞き逃さなかったアリーナは首をかしげて聞き返した。

「バザーの裏の顔と言つべきかな？」

「裏の顔？」

「非合法の商品まで並ぶ、いわゆる《闇市》と言つやつだ」

「ひごうほう？」

ユータの説明に未だ納得できないのか、アリーナが左右に首をかしげる。

クリフトの方はその説明で納得がいったらしく、うなずいている。「正規ルート以外の商品・・・すなわち、盗品が売られているってことさ」

「えっ!？」

ここまで説明されてようやくアリーナは納得できたのか、驚きの声を上げた。

「盗品なら元手はかからないし、何より自分の手元にはいつまでも置いておきたい……。そういう心理が働くからこそ、とても儲かるとは思えないような安価な値段で売りに出されるのさ」

「……」

ユータの説明にアリーナは気落ちしながらもぐつと下唇を噛みしめた。

アリーナが気落ちするのも当然であろう。

自分の国の領内で、盗品を扱うバザーが開催されていると教えられたのだから……。

「もちろん、盗品だけとは限らないがな」

そんなアリーナの気持ちを知ってか知らずか、ユータは言葉を続ける。

「たとえば、曰く付きの品物、持ち主が戦いの中で命を落としたそのときに使われていた武器が売られている……。とかな、ちなみにクリフトがさっき買った鉄の槍はまさにそれだよ」

「っ!？」

ユータの説明を聞いていたクリフトは先ほど通常定価の70%OFFで買った鉄の槍を見やった。

「で、でも、どうして盗品でないと分かったんですか？」

「ん？ それを売ってた店の主人と話してな、俺もだいたい旅をしてきたんで、相手の目を見て話をすれば嘘をついてるかどうかの判別はそこそこできるつもりだ」

「……」

「もちろん、100%盗品ではないとは言えないがな、8割方盗品ではないだろう」

「そ、そうですか……」

クリフトは安心とも心配とも受け取れるような、複雑な顔で呟いた。

「大丈夫、呪われてはいないだろうさ……。聖水を使って砥ぎ直されているようだし」

ユータはクリフトから鉄の槍を受け取るとしげしげとそれを見つめながら言う。

「本来なら、どこぞの教会の正規神官あたりに祝福をかけてもらってから売りに出されるものなんだが、たまぐに盗品に紛れて、こういう品も売られてたりするんだよな」

「祝福……。？ ああ、解呪の魔法ですね」

「そう、うちの故郷の村じゃ、解呪のことを神の祝福なんて呼んでるから、つい祝福って言ったけど、要はそういうこと」

ユータの言葉に引つ掛かりを感じたクリフトだったが、すぐにそれが解呪の魔法【シャナク】であると気がつく^いと納得した。

「んで、この槍は呪われてはいないようだし、使っても問題はないよ」

そう言いながら、ユータは持っていた鉄の槍をクリフトに返した。ユータの言葉に多少安心したのか、クリフトは鉄の槍を受け取る^いとその先端に付けられた三又の刃に目を落とした。

「盗品か……。」

アリーナは相変わらず気落ちした悲しい顔で呟いていた。

「……。アリーナ、あんまり落ち込むなよ」

「落ち込むわよ！ 私の買った道具のいくつかもきつと盗品なんですよ」

アリーナが先ほどの店回りで購入した、回復アイテム『薬草』や『毒消し草』などが入った袋を覗きこみながら言う。

「まあなあ……。武器や防具はともかく、流石に道具は曰く付き^いの品物というわけにはいかないだろうな」

「……。」

「でも、薬草も毒消し草も大した値じゃないから、盗品とは思えないけどな……。」

「そうなの？」

「ああ、これくらいのバザーなら薬草半値で10個20個まとめ売りなんてよくあるぞ」

「そっか、そうなんだ・・・」

アリーナはようやく安心したのか、ホッと胸をなで下ろした。

「そう言えば、さつき値札の金額が書かれていない品が並べられていた店がありましたけど、あれは何だったんでしょっか？」

槍を見つめていたクリフトはふと何かを思い出したように声を上げた。

「あれは、競売商品だな」

「競売商品？」

「店側が提示した最低売却金額に対して、購入者側が競い合うように購入金額をつり上げていく商品のことさ」

「なんか面白そうね」

競売に興味がわいたのか、アリーナがユータの説明に喰いついてくる。

「面白そうか・・・、まあ、見ている分には面白いかもな」

「？」

「？」

面白いと言っている割には暗い顔をするユータにアリーナとクリフトは怪訝そうな顔をした。

「さつきも言ったが、夜のバザーは非合法の闇市・・・。場合によっては、物だけでなく人が競売にかけられる可能性もある」

「！！」

「！！」

ユータの言葉にアリーナとクリフトは驚いた表情で顔を見合わせる。人が競売にかけられる可能性・・・、それはすなわち、人身売買が行われる可能性があるということであった。

「そんな、人が売りに出されるなんて・・・」

クリフトが呆然とした顔で呟く。

「可能性があるだけさ、本当にそうなるとは限らん」

「・・・」

アリーナもまた、沈んだ瞳でオアシスを見つめた。

「その様子では、競売場には行かない方がよかるう、見たくないものまで見る可能性は捨てきれないからな」

ユータはそこまで言って、おもむろに立ち上がった。

アリーナとクリフトがユータに向かって顔を上げる。

「さて、俺は用事があるんで、ちよつと行って来るわ」

「え、行くつてどこに？」

歩き出そうとするユータにアリーナが声をかける。

「人身売買」

「えっ！！！？」

ユータの一言にアリーナが素っ頓狂な声を上げた。

それを見たユータはおかしそうに笑う。

「ははは、冗談だ・・・。ま、売買というわけではないが、俺のやるうとしていることは似たようなものかもしれないがな」

「！！！？」

ユータの最後の言葉に引つ掛かりを感じたアリーナはクリフトとともにユータの後について行くことにした。

ユータは苦笑しながらも、疑いの眼差しで見つめるアリーナ、そして首をかしげているクリフトの二人を連れて、バザー会場のはずれへと足を進めた。

ユータ達三人は会場の喧騒けんそうから多少離れた人気のない小屋前へとやって来た。

小屋の中にはバザーに来ていた商人たちの馬車が、所狭しと並べられていた。

とくに自分達三人以外に人がいるような気配はないのだが、ユータは小屋の左外側の端に目を向けたまま腕を組んだ。

スッ

しばらく動かずにいると、突然ユータの見ていた小屋の端の影から黒いローブを身につけた初老の男が現れた。

見た目には魔道士のようにも見えたが、ローブの脇からずいぶん立派そうな剣が顔を出している。

その男は、ユータの姿を見てニヤリと口元に笑みを浮かべると、自身の出てきた小屋の端へと目配せする。

すると、その小屋の端の影からさるぐつわを咬ませられた上に両腕を縄で縛られた一人の女の子と、その女の子の腕を掴むガラの悪そうな男が現れた。

「!」

ようやく状況を把握できたのか、アリーナはユータが何をしようとしていたのかに気がついた。

「約束の品は？」

ローブの男が声を投げる。

ユータは持っていた道具袋から黄金色に光る腕輪を取り出して見せた。

「おお」

その腕輪を見たガラの悪そうな男は感嘆ともいえる声を漏らす。

「・・・」

「・・・」

アリーナとクリフトの二人もまた、その腕輪の輝きに唾を飲み込んだ。

「まずは、その子を離してもらおう」

腕輪を手にとったユータがローブの男に声を投げる。

「・・・よかるう」

ローブの男がそう言つと、ガラスの悪い男が女の子の腕を離して背中を軽く押しやった。

「走れ!!」

ユータは女の子に向かって叫ぶとほぼ同時に持っていた腕輪をローブの男に向かって放り投げる。

大きく弧を描くように飛んでいく腕輪。

女の子もまた、ユータ達の方へ向つて駆け出すのだが・・・。

「~~~~~!!?」

先ほど女の子の腕を掴んでいた男が後ろから駆け寄り、女の子の身体を掴みあげた。

「ちよつと!! 何してんのよ!!」

その様子にアリーナが声を上げる。

「せつかくの金蔓を簡単に手放せるかつてんだよ!!」

男は女の子を肩に担ぎ上げるとそのまま逃げようとするが、アリーナがそれを制するかのよう飛びだした。

バキッ!!

一気に詰めよるとアリーナは男の背中に向かってドロップキックを繰り出した。

「っ!!!!?」

男は肩に担いでいた女の子を地面に落とすと俯き姿勢のまま地面に突っ伏した。

幸いにも砂漠地帯で地面が砂地であったため、女の子に怪我はなさそうだがちよつと無茶をしてしまったことに気がついたアリーナは女の子に向かって合掌して謝った。

「・・・」

アリーナの様子に女の子はわずかであったが笑顔を見せる。

「さあ、クリフトの、あっちの男の人のところに行つて」

アリーナがクリフトの方へ行くように女の子に声をかけた。

「・・・」

女の子は小さくうなずくとクリフトの方へと駆け出した。

「ちい！ この小娘が！！」

男は自身に攻撃を仕掛けたのがアリーナであると知ると、捕らえようと掴みかかった。

だが、アリーナはそれに怯むことなく素早く男の懷に飛び込むとその下腹部に向かって正拳突きを繰り出した。

バゴンッ！！

「っ！！！！？」

男は声にならない悲鳴を上げると今度は仰向けのまま地面へと倒れこんだ。

「・・・」

アリーナが地面に倒れた男の様子を見る。

男は、半目を開けたまま気を失っていた。

「まったく、卑怯な真似をするから悪いのよ」

アリーナは気を失っている男に対して一言物申すと、クリフト達の元に駆け寄った。

「お待たせ、大丈夫だった？」

アリーナは女の子のそばに駆け寄ると優しく声をかける。

クリフトからさるぐつわと縄を解いてもらった女の子はアリーナに向かってそつと頭を下げた。

「大丈夫そうね、よかった」

女の子の様子にアリーナは安堵する。

「あれ？ ユータは？」

ユータの姿が見えないことに気がついたアリーナは、クリフトにそつと声をかける。

クリフトは何も言わずに、明後日の方へ向かって指差した。

そこには、先ほどの黒いローブを身につけた初老の男と剣を交えているユータの姿があった。

「ちょっと、何やってるのよー！」

二人の戦いにアリーナが声を上げて駆け寄ろうとするが、クリフトに制される。

「ちょ．．．」

「行つてはなりません」

「．．．」

クリフトの低く．．．そして、強い声にアリーナは言葉を飲み込んだ。

「．．．」

アリーナはクリフトからユータの方へと視線を移した。

ユータと初老の男の戦いは外から見ても非常に危険極まりないものであった。

剣と剣をぶつけあいながらも、その片手間に魔法を放ちあうという、他者が入り込めるような状況などかけらもない。

クリフトがアリーナを無理矢理にでも止めたがるわけである。

このような状況の中に飛び込もうとするのは、死に行くに等しいのだから．．．。

しばらく二人の様子を見守ったが、結局決着は着かなかった。相手の魔力の前に押されたユータが大きく跳び下がると、初老の

男は素早く転移の魔法【ルーラ】を使い、消え去ってしまったからだった。

「惜しかったわね」

戻って来たユータにアリーナが皮肉めいた口調で言った。

ユータはアリーナのその言葉に苦笑しつつも首を振って答えた。
「？」

「残念だが、まったく歯が立たなかったっての方が正しいな」
「まったく??」

ユータの答えにアリーナとクリフトはお互いに顔を見合わせる。

「ああ・・・、流石はラグサス、かの一翼を担うと言われるだけのことはある」

「ラグサス？」

「一翼？」

ユータの呟きにアリーナとクリフトが首をかしげる。

「あゝ、ラグサスってのはさっきの初老のおっさんの名前な・・・、一翼については・・・まあ、忘れる」

「忘れるって何よ」

「とにかく忘れる、覚えていてもいいことなんかない」

「・・・まあいいわ、とりあえずラグサスって人のことは横に置いとくとして」

「置いてくなく、捨てる」

「・・・」

ユータの隙のないツツコミにアリーナは額に青筋を立てるが、腹立てても仕方ないので話題を変える。

「もう、とにかく、この女の子をおうちに連れて行かないと」

「・・・」

アリーナはそう言いながら、女の子の方へと顔を向けた。

女の子は不安そうにアリーナを見上げる。

「・・・なあ、アリーナやクリフトは気づいてるか？ その子のこ

と」

「気づいてるって、何が？」

「顔をよく見てみる・・・」

「顔？」

ユータに言われたとおり、アリーナとクリフトの二人は女の子の顔を覗き込む。

女の子は恥ずかしそうに俯いた。

「別に変なところはないみたいだけど・・・」

アリーナが首をかしげる。

「あつ！」

クリフトは何かに気がついたようで声を上げた。

女の子はそれに反応して、そつと両手で耳を隠した。

「君は、エルフだったのか」

「エルフ！？」

クリフトの驚いた呟きを聞いたアリーナもまた、驚嘆した。きょうたん

女の子はそつと隠していた耳を出して見せる。

その耳は確かに人間のものとは違う形をしていた。

「どうして、エルフの女の子がこんなところに！？」

アリーナの疑問ももつともなことだった。

エルフは人前に姿を見せることは滅多にない珍しい種族である。

人の多い場所を好まないはずのエルフが目の前にいるのだから驚くのも当然であろう。

「・・・エルフの流す涙は、宝石になると言われているな」

「えっ？」

「・・・」

ユータの説明にアリーナは耳を疑う。

エルフの女の子は不安そうに、そつと身を竦めた。

「もちろん、ただの噂だろうさ、俺の故郷にも実はエルフの女性が一人いるけど、その人の涙が宝石になったとこなんて見たことないしな」

ユータが遠い目をしながら言った。

遠く離れた故郷の村を思い出すがごとく、その瞳はとても優しく
った。

そんなユータの瞳を見たアリーナも優しい気持ちになる。

「ん、じゃあ、ユータはどうしてこの女の子と関わることになっ
たの？ ユータの話しぶりじゃ、エルフの涙になんて興味なさそう
だけど」

「あ、そのことか、実はな」

ユータはアリーナ達にエルフの女の子との出会いの経緯を説明し
た。

ユータがエルフの女の子と初めて会ったのは、サントハイム領の
最南西にある古びた塔《さえずりの塔》の入口そばであった。

ユータは武者修行の傍ら、たまたま訪れたその古塔のそばに倒れ
ていたエルフの女の子を保護したのだ。

エルフの女の子の話によると古塔の最上階にある花畑で、何者か
に襲われたのだという。

必死の思いで逃げたのだが、古塔から出て近くの茂みに身を潜め
たまま気を失ったらしい。

エルフの女の子の髪の色が薄緑色で身につけていた服もまた緑が
かっていたことが幸いしたらしく、最上階で襲った者達に気づかれ
ずに済んだようだ。

エルフの女の子を襲った連中が人間であったことが、エルフの女
の子と出会った後で判明した。

ユータはその連中と古塔に向かう途中で出会っていたのだ。

その人間達にユータは女の子の行方について根掘り葉掘り聞かれ
たが、その時にはまだこのエルフの女の子に会う前であったので知
る由もなかったが・・・。

保護したエルフの女の子の話を聞いていたユータは、とりあえず問題の襲われたという最上階に行ってみることにしたのだが、二階への階段が見つからなかったという。

古塔の一階に一つ気になる部屋があったのだが、その部屋の扉には鍵がかけられており、入ることができなかったらしい。

仕方なく扉の鍵を求めてこのバザーへと立ち寄ったのだが、先のラグサス達にエルフの女の子が捕まってしまう、それを今何とかして現在に至るというわけだった。

「で、その扉の鍵って見つかったの？」

エルフの女の子との出会いの経緯を聞いていたアリーナがおもむろにユータに向かって声をかけた。

「いや、見つからん……。この子と会う前にバザーの道具屋にそれらしい鍵があったのを見たんだが、ここへ再び来た時にはもうなかったよ」

「そっか……」

ユータの答えにアリーナは残念そうに頭を下げた。

「あ、あの」

アリーナやユータの話を聞いていたエルフの女の子がそつと声をかけてきた。

アリーナ達三人の視線がエルフの女の子に集まり、思わず、そのエルフの女の子は身を竦めた。

「……あ、あの、み、皆さん、優しいんですね」

「？」

「私のお姉様は、人間は怖い人たちばかりだからって言うてましたけど、皆さんはすごく優しいです」

「……」

エルフの女の子の言葉にアリーナはとてもくすぐったいようなそんな気持ちになる。

「えっと、わ、私、リースって言います、皆さんの名前を聞いてもいいですか？」

エルフの女の子・・・リースの頼みを快く了承したアリーナは簡単な自己紹介をする。

「私の名前はアリーナ、サントハイムの・・・じゃなくて、えっと・・・」

自己紹介をしていたアリーナだったが、サントハイムの王女であるとは言えず言葉に詰まってしまった。

そんな様子にユータが苦笑する。

「もう言っちゃいなよ、サントハイムのお姫様ですって」

「ちよっ!？」

ユータの呟きにアリーナが両手を前に出して首を振る。

「どうせ、ここにいるのはうちらだけなんだし、ばらしても問題はないだろ？俺も会った時からおおよそ見当はついてたから驚きはないよ」

「・・・」

ユータの言葉にアリーナは小さな溜息を吐きつつ肩を落とした。

「ん、いや、のびてるのがいたか・・・」

ふと近くに男が倒れていることに気がついたユータはそっと近づく。

ユータは先ほどアリーナが倒して気絶させた男に近寄ると様子を見た。

「気絶してるから大丈夫そうだな、この分だと朝まで目が覚める心配はなさそうだ」

ユータは男の様子を確認すると再びアリーナ達の元へと戻った。

「・・・えっと、ああもう、この際言っちゃうけど、私はアリーナ、サントハイムの王女よ」

アリーナは致し方ないとばかりにリースに向かって正直に自分の

身分を明かした。

クリフトもそれに続き、自己紹介をする。

「私はクリフトです、まだまだ未熟者ですが、サントハイム城で神官を務めています」

「・・・アリーナさん、クリフトさん・・・」

リースは二人の名前を確認するかのように呟く。

「・・・そして、ユータさん・・・」

最後にリースはユータの名を呟いた。

ユータにはリースのか細い呟きを聞き逃さなかったらしく、リースに向かって微笑んでみせる。

「よかった、皆さんのような優しい人達に出会えて・・・」

「リース・・・」

リースの呟きにアリーナが悲しそうな表情を見せた。

「ねえリース、その古塔のてっぺんに行けば、リースの言ってたお姉さんに会えるの？」

「はい、きっと会えると思います。お姉様とは、よくその塔の一番上にある花畑で『さえずりの蜜』っていうエルフ族の秘薬を集めていましたから」

「うん、分かった、私が絶対リースをお姉さんの元に連れて行つてあげるからね」

「ア、アリーナさん」

アリーナの力強い言葉にリースは驚いた顔をしながら呟いた。

アリーナの瞳には何かが何でもリースを助けたいという強い使命感が宿っていた。

「だが、肝心の鍵がないぞ」

リースを助けるとやる気になっているアリーナの出鼻を挫くかの如くユータが呟くが、アリーナは大丈夫大丈夫と笑顔を見せる。

「どうやらアリーナには扉を開けるための何か方法があるようだ・・・」

ユータはアリーナのその様子に口を閉ざした。

「よし、じゃ、さっそくその塔に向かって出発よ!!」

アリーナは元気よく右腕を上げるが、クリフトがその言葉を聞いて呆然となる。

「ちょ、アリーナ様、今から行くんですか？」

「当たり前じゃない」

「・・・眠たいんですけど」

クリフトの呟きももつともなことだった。

昨日の朝から歩き続けて、日が変わり、今やまもなく朝焼けで東の空が赤くなりそうな時間である。

「んもう、だらしないわね」

クリフトのぼやきにアリーナが声を上げる。

「まあ、私も多少眠たいけど、でも、エルフであるリースを人の大勢いるところに連れてくような真似はしたくないわ」

「・・・」

話の引き合いに出されたリースは申し訳なさそうにそつと肩を竦めた。

「とりあえず、このバザーからは離れましょ、野宿をするしないはそれから決めてもいいでしょ」

「・・・はい」

リースを思いやるアリーナの言葉に納得したクリフトは素直にうなずいた。

こうして、保護したエルフの女の子リースとともにアリーナ達はサントハイム領最南西にある古塔《さえずりの塔》を目指して旅だったのだった。

「・・・アリーナ様・・・、もう眠いです・・・」

「ちよっと、クリフト、立ったまま寝ないでよ!!」

「
Z
Z
Z
Z
Z
Z
Z
.
.
.
」

砂漠の闇市（後書き）

やっと3話が書き上がりました。

また長くなりました・・・、さすが行き当たりばったり・・・。

2話の時よりは多少短いけれどもね。

今回の物語はいかがだったでしょうか？

楽しんでいただけましたか？

今回はクリフト君の活躍によって魔物が封印されてしまいました。
なんてこったい・・・。

ブライ様は2話での大活躍により登場不可となりました。
哀れ・・・というか、それは筆者のせいですね。

今回はほぼ完全オリジナルな流れになってます。

ゲーム上でも砂漠のバザーはありますけど、闇市なんかはないですね。

また、オリジナルキャラとしてユータ、ラグサスの2名も登場させてみました。

ユータ君は最終話までアリーナちゃん達と冒険をともにしていく予定です。

ラグサスさんはたぶん今回だけで出ないかな？

ゲームをやったことのある人は分かっていると思いますが、エルフの少女リースはオリジナルキャラではありません。

ゲーム2章のある場所出てきます。ちなみに5章、6章では天空城にいます。

ゲームの方ではアリーナちゃんの章はそろそろ終盤なんですけど、
こちらの小説は・・・どうなるでしょうか？
エンドールの武術大会まで話を繋げられるかなあ？

登頂！ さえずりの塔（前書き）

この物語はSQUARE ENIX様より発売されたゲーム、ドラゴンクエスト4を題材としておりますが、ゲームのストーリーをメインとしつつも、作者のオリジナル要素をいくつか加えていますので、ゲームの内容とはまったく異なる展開になる可能性があることを予めご了承ください。

登頂！ さえずりの塔

2章 運命を背負いし高嶺の花

4話、登頂！ さえずりの塔

前回までのあらすじ

サントハイムの王女アリーナと新米神官のクリフトはフレノールという町に行く途中で、武者修行の旅をする青年剣士ユータと出会った。

ユータから砂漠で行われているバザーのことを知ったアリーナはフレノール行きをやめ、ユータに同行する形でバザー会場へと行ってみるようになった。

砂漠のバザー（闇市）にたどり着いたアリーナ達はそこでエルフの少女リースを保護する。

なんとかリースのことを助けてあげたいと思ったアリーナは、リースの姉がいると思われる、さえずりの塔を目指すことにした。

—— さえずりの塔・入口前 ——

「この塔の最上階にお姉さんがいるかもしれないのね、リース？」

「はい……」

度重なる魔物の妨害や、執拗にリースのことを狙う人間達の追撃を切り抜けたアリーナ達は、ようやくサントハイム領の最南西にある古びた塔《さえずりの塔》へとやってきていた。

「や、やっぱり……登るんですか……？」

塔を見上げながら、クリフトが青ざめた面持ちで呟く。

「当たり前じゃない、一番上の階にあるっていうのに登らないでどうすんのよ」

「・・・」

アリーナの言葉にクリフトはがっくりと肩を落とした。

「大丈夫よクリフト、ちゃんとキメラの翼を買ってきてあるから、登るだけで済むわよ」

「！　そうなんですか？」

アリーナの事前準備の良さにクリフトは多少安心したように呟いた。

のちにアリーナが買った、この『キメラの翼』がとんだハプニングを引き起こすのだが、この時点では誰も知る由もなかった。

「じゃ、行くわよみんな！！」

アリーナは元気よく声を上げると塔の内部へと足を踏み入れた。

さえずりの塔・1階

ユータの案内でアリーナ達は一つの大きな扉の前にやってきていた。

ユータから予め聞いてはいたのだが、一応一通り上階へ行くための階段を探索してみたが、やはり見当たらなかった。

残る探索場所は、この扉の向こう側だけだったのだが・・・。

「ユータさんの言うとおり・・・、鍵がかかっているようですよ、アリーナ様」

大扉には鍵がかかっており、アリーナ達は立ち往生していた。鍵穴があるところを見ると、やはり鍵が必要であることは明らか

であつた。

「案の定、大した造りの扉じゃないわ……。これなら簡単よ!!」
扉を触っていたアリーナは突然そう言ったかと思うと扉の前に立ち、気合いを入れる。

「はああああ!!」

気合いの掛け声とともに回し蹴りを扉に向かって繰り出した。

バゴンッ!!

けたたましい音とともに大扉が蹴り碎かれ、扉の破片が散乱する。

「……」

「……」

「……」

アリーナのとつたその行動に、クリフト、ユータ、リースの3人は揃って口を開けたまま呆然となる。

「さ、開いたわよ!」

平然と言うとアリーナはずんずんと奥へ進んでいく。

「鍵がなくても平気って、そういうことかよ……。無茶苦茶だな、あの女……」

アリーナの様子にユータは呆然とした表情のまま呟いた。

—— さえずりの塔・2階 ——

アリーナの機転……。正確には強行突破……。で、階段を探し当たった4人は階段をのぼり、塔の2階へとやってきていた。

「さうて、次の階段はどこにあるのかしら?」

そう言いながらアリーナはあたりをぐるりと見回した。

周りには、やたらと瓦礫がれきの破片が落ちており荒れ放題となってい

た。

「・・・なんかずいぶん荒れてますね、この部屋」
リースが不安げな顔で言う。

「そうね、リース、足もとに気をつけてね」

「はい、ありがとうございます」

自分のことを心配してくれるアリーナの心遣いがとても嬉しかったのか、リースははにかみながらお礼を言った。

そんな中、クリフトがしきりに首を捻っていた。

「どうしたんだ、クリフト」

その様子にユータが声をかける。

「あ、なんか、この部屋だけやけに天井が高くないですか？」

「ん？」

クリフトに言われて、ユータも天井を見上げる。

「言われてみると確かに高いな・・・、吹き抜けにでもなってるのか？」

「・・・吹き抜け・・・ですか・・・はははっ」

ユータの言葉にクリフトは乾いた笑い声を上げる。

「クリフトさん、大丈夫ですか？ さつきから顔色がよくないですよ」

リースがクリフトの様子を見て、心配そうに見つめる。

「あ、心配しないでいいわよリース、クリフトの顔が悪いのは高所恐怖症が原因だから」

「こうしょきょうふうしょう？」

「高い所が怖いってことだよ」

クリフトの顔色について、アリーナが説明するが、リースがさらに首をかしげたのでユータが補足を加える。

「クリフトさんは、高い所がダメなんですか？」

「そうよ、子供の頃、私と城の屋根の上で遊んでたら、足滑らせて屋根から落ちそうになっちゃって、それ以来高い所がダメになったのよ」

「そうなんですか・・・」

アリーナの昔話を聞いて、リースは心底かわいそうといった瞳でクリフトを見つめる。

そんなまっすぐな瞳で見つめられたクリフトはたまらなくなり、アリーナに抗議する。

「ア、アリーナ様、そ、そんな子供のころの話なんて、いいじゃないですか、しなくても・・・」

「だってそれが原因じゃない」

「そ、それはそうなんですけど」

クリフトはあまりに恥ずかしくなったのか、顔を真っ赤にして俯いた。

「その様子だと、クリフトは次の階が山場なのかもしれない・・・」

「なんでよ？」

クリフトの様子を見ながら言ったユータの言葉にアリーナが疑問を投げかける。

「ん、いや、たぶん・・・」

ユータは曖昧な返事をしつつ、再び天井を見上げる。

アリーナもそんなユータの行動に釣られて天井を見上げたのだった。

—— さえずりの塔・3階 ——

クリフトの弱点・・・高所恐怖症・・・について話し込んでいたアリーナ達だったが、そのままでは埒があかないので一旦話を切り上げ階段を搜索、無事3階へと辿り着いた。

3階へとやって来たのだが、今度は部屋一面の大穴の前で立ち往生していた。

「何よ、この部屋・・・床が壁際にしかないじゃないの・・・」
「やつぱりな・・・」

アリーナのぼやきにユータがまるでこの状況が分かってたかのよう
に呟いた。

「何がやつぱりなんですか？」

ユータの呟きにリースが疑問の声を投げかける。

「・・・その穴から下を覗けば分かると思うぞ・・・」

「下？」

「どれ」

ユータに言われて、アリーナとリースの2人は床に開いた大穴を
覗き込む。

「・・・」

そんな2人の行動にクリフトは完全に言葉を失った。

高所恐怖症のクリフトにとってアリーナとリースの行動はありえ
ないまでに信じられないものだったからだ。

「あゝ、そっかそういうことか・・・」

アリーナはユータの言葉に納得するものが穴から見えたようだ。

大穴の下は、先ほどクリフトの弱点話で盛り上がっていた、あの
部屋であった。

「前の階のあの部屋に散乱していた瓦礫^{がれき}は、この階の床が抜け落ち
たものだったのね」

「そういうことだ、だからこそ、あの部屋で見た天井は高く感じら
れたんだよ」

「なるほど、でもクリフトにとって山場^{さんば}つてのはどういう意味な
わけ？」

「それは、次の階への階段の位置がその壁際の道のりの先だつてこ
とがわかったからさ」

「えっ？」

「見えたんだよ、2階のあの部屋から4階への階段の位置が」

「マジで!？」

「ああ・・・、この穴から見た下の部屋の位置取りからすると、まず間違いなく階段はこの先だ」

そう言いながらユータは壁に片手を当てて、ゆっくりと進み始める。

「よし、私たちも行くわよ」

アリーナ、リースの2人もそれに続くが、クリフトの足は完全に止まってしまっていた。

「クリフト、ほら来なさいよ!」

アリーナが声をかけるが、それでもクリフトは動くことができない。

「んもう、しょうがないわね」

そんなクリフトを見て、アリーナは一旦戻ることにしたのだが・・・。

そこへ魔物達が現れた!!

「きゃあっ」

突然の魔物の襲来にリースが思わず悲鳴を上げる。

「ちよっ、こんなときに現れるなんて節操ないわね」

アリーナは愚痴をこぼしながらも、しっかり臨戦態勢を整える。

ユータもまた、リースの悲鳴を聞いて後方へと振り返った。

「ドラゴンバタフライか・・・」

ユータは魔物の姿を一目見て、その名前を言い当てた。

ドラゴンバタフライは蝶と小型の竜の姿を組み合わせたような魔物で、比較的体力の高い難敵だった。

また、それ以上にこの足場の悪い地形がアリーナ達を不利な状況に追い込んでいた。

ドラゴンバタフライには蝶のような羽があり、空を飛ぶことがで

きるため、地形の良し悪しなどお構いなしで攻撃してくるのに対して、空を飛ぶことのできないアリーナ達には攻撃を仕掛けるにも細心の注意を払わねばならないことが不利な状況に拍車をかけていた。ヘタに動いて足を滑らせれば、真つ逆さまに階下に転落、運が悪ければそれで死ぬことにもなりかねないのだ。

「まいったわね、と、とにかくここは戻りましょう、こんなところじゃ、戦いにくくて仕方ないわ」

アリーナは後退するように言うと、リースもうなずきながらクリフトの方へと下がろうとするが、数匹いたドラゴンバタフライのうちの一匹がまるでアリーナ達の動きが分かっていたかのようにその行く手を遮って来た。

「え」

ドラゴンバタフライの行動にリースが思わず声を上げる。

だが、その動きはドラゴンバタフライにとって自殺行為であった。

ザッ！！

ドラゴンバタフライが背中から鉄の槍で串刺しにされ、力尽きる。

ドラゴンバタフライに攻撃を仕掛けたのは、吹き抜けとなってしまった床の前で立ち往生していたクリフトであった。

クリフトは己の高所恐怖症と闘いながら、アリーナを助けるために勇気を振り絞って壁際の道を進んできたのだ。

「クリフト・・・」

クリフトのその行動にアリーナは笑顔を見せる。

「ア、アリーナ様、お怪我はありませんか？」

「大丈夫よ、クリフト・・・。リースも怪我してないわよね？」

「はい！ クリフトさん、ありがとうございます」

「そ、それはよかった・・・」

相変わらず顔色は良くないが、クリフトは何とか笑顔を作る。

「で、では、先に、進みましょう・・・」

「え、でも、まだ魔物が・・・」

クリフトの言葉にリースが周りを見回しながら呟くが、なぜかたくさんいたはずのドラゴンバタフライ達が姿を消してしまっていた。

「あれ??」

「??」

リースが思わず首をかしげる。

アリーナもまた、不思議そうにあたりを見回した。

「匂い・・・、ですよ、アリーナ様」

「? 匂い?」

クリフトのその言葉にアリーナとリースは、鼻に意識を集中した。微かにではあるが、今までに嗅いだ事のない不思議な気分になる香りがする。

「おそらく、ユータさんが、こちらのフォローのために匂い袋を使ったださったんだと思います」

「匂い袋?」

「はい、匂い袋には、魔物を引き付ける効果があると聞いたことがありますので、この匂いはそのものかと」

「なるほど、てことは、今ユータはピンチってことね」

アリーナ達は顔を見合せるとユータを助けるべく先を急いだ。

「だ——もう、キリがねえ!!」

アリーナ達を援護するべく匂い袋をまき散らし、足場が広くなっていた角際に魔物達を引き寄せたユータは、迫りくるドラゴンバタフライを氷の魔法【ヒヤド】で退治していた。

ドラゴンバタフライは体力が高いので氷の魔法【ヒヤド】程度を一度与えただけでは倒すことはできないが、身体の一部を凍りつかせることのできる氷の重みを利用して階下へと落下させることは容

易であつた。

しかし、ドラゴンバタフライを階下へと落下させるたびに新しい別のドラゴンバタフライがその階下より現れるので、まったくもつてキリがなかったのだ。

「く、下の階にバタフライ達の巣でもあるのかよ・・・」

ユータは頭を抱えつつ、氷の魔法【ヒヤド】以外の魔法を使うべきか思案した。

「バタフライ達を一網打尽にするなら、大爆発の魔法【イオラ】が手っ取り早いが・・・、そんな魔法を使ってこの塔に変な影響^{えいきょう}があるとまずいしなあ・・・」

大爆発の魔法【イオラ】はその名の通り、魔力の着弾点を中心に爆発を起こして多数の魔物達に一度にダメージを与えることができる魔法である。

しかし、この爆発【イオラ】系の魔法は魔物だけでなく、周辺の建物や地形にまで影響を与えやすいので、迂闊^{うかつ}な使用は大変危険なのだ。

「あゝもう、どうしよ・・・」

迫ってくるドラゴンバタフライを氷の魔法【ヒヤド】で撃ち落としながら突破する術^{すべ}を思案する。

「ユーター!!」

ユータが敵中突破する術^{すべ}に考えあぐねていると、アリーナ達がようやく駆け付けた。

アリーナ達もユータに近寄ると、迫りくるドラゴンバタフライ達を迎え撃つ。

「この戦い持久戦過ぎるんだ、このままじゃ数で押し負ける、アリーナ、クリフト、リース、俺が囷になるから先に行け!!」

ユータがアリーナ達に先に行くように言うのだが、ドラゴンバタフライの数が多すぎて、先行することも困難であった。

「もうちよっと、数減らさないと無理！」

ユータの言葉にアリーナがドラゴンバタフライ達の様子を見ながら言った。

「・・・あ、あの」

アリーナに守られるように、影に隠れていたリースがアリーナ達に声をかけた。

「わ、私、魔法、使えるので、お手伝いします」

「！魔法か、だけど、この塔に影響えいきょうがある魔法だとまずいぞ」

リースが魔法を使えることを知ったユータだが、塔への影響えいきょうの可能性をリースに示唆しそくする。

「わ、分かってます、たぶん、影響えいきょうは出ない、はずです」

リースの言葉にアリーナ達は顔を見合わせるとうなずきあった。

「お願いリース」

アリーナがリースに魔法を使うよう頼んだ。

リースもそれを見て一つうなずくと両手を天にかざし、呪文を唱えた。

「天地を統べる我らが龍よ、我が魔力をその源とし、我らが敵に主しゅの裁きを・・・」

リースの呪文に応じるかのように、十数体いたドラゴンバタフライ達の中心あたりに魔力の玉が出現する。

その魔力の玉は、レモン色に激しく輝いていた。

「皆さん、伏せてください！！」

リースの言葉に全員が身をかがめた。

「ライデイン！！」

その叫び声に呼応するかのように、魔力の玉が弾け飛び、ドラゴ

ンバタフライ達に向かって放電した！

リースが使った魔法、それは神々の力を借りなければ行使することできない、落雷の魔法【ライデイン】であった。

ちなみに人間にはこの魔法は扱うことができないとされている。

落雷の魔法【ライデイン】を受けたドラゴンバタフライ達は一匹残らず黒こげになって階下へと落ちて行った。

「うわゝ、すごい・・・」

アリーナが呆然とした表情で呟く。

「今のうちだぞ！」

リースの使った強力な魔法に、アリーナとクリフトは呆然としていたが、ユータがすみやかに先へと進むべく声をかけた。

「！」

「！」

ユータの声に我に返ったアリーナとクリフトはリースとともに先を急いだ。

ユータもまた、階下から現れる新しいドラゴンバタフライに氷の魔法【ヒヤド】で牽制しつつ、アリーナ達を追いかけた。

—— さえずりの塔・4階 ——

リースの放った魔法・・・落雷の魔法【ライデイン】・・・で、何とかドラゴンバタフライの群れを突破したアリーナ達は階段を上り4階へとやって来ていた。

4階はこじんまりとした部屋があるだけだった。

とくに障害らしいものもなく、階段の位置も見取れる。

しかし、この4階にいたのはアリーナ達四人だけではなかった。

上階へと進むための階段のそばに、三人の男が立っていたのだ。

「あつ!?!」

三人の男の中にアリーナ達の見知った顔の者もいた。

「ちい、ラグサスか・・・」

ユータが舌打ちをしつつ、その見知った顔の男の名を呟く。

「ククク・・・、ここで待てば必ずや会えると思っていたぞ、小僧」
初老の男、ラグサスはニヤリと口元に笑みを浮かべる。

ラグサスは砂漠のバザーにてエルフの少女リースを巡ってユータと敵対、剣を交えた間柄であった。

「待ち伏せ・・・ですか・・・」

ラグサス達の様子を見てクリフトが小声で呟く。

クリフトの言うとおり待ち伏せなのであるが、それでもなぜか、ラグサス以外の二人の男は面白くなさそうな顔をしていた。

まるで、ラグサスのくだらない遊びに付き合わされているかのよう・・・。

ラグサスはそんな二人の様子にも気に留めることなくユータに向かって声を投げた。

「察しの良い小僧のことだ、我ら三人、どういう関係が分かっているのだろう?」

「!?!」

ラグサスの言葉に、ユータの顔から見る見るうちに血の気が引いていく。

「ま、まさか・・・」

「ククク、その顔だ! その顔が見たかった!」

ユータの様子を見てラグサスはいやらしい笑みを浮かべた。

「・・・くだらん・・・」

そんなラグサスの様子に男の一人が吐き捨てるように呟く。

「まあ、そう言うな・・・、せっかくなんだ名乗りを上げておこうではないか。その小僧はともかく、そっちの小娘たちは我らのことを知らんだろうしな」

「・・・」

ラグサスの嬉々とした言葉に男二人はそれぞれにやれやれとばかりに首を振った。

「俺はデスピサロ様に仕える、デスパレス七魔帝が一角、デスナイト甲殻騎士のラグサス」

ラグサスの名乗りに対して、二人の男がため息を吐いていた。

「・・・バカバカしい、なぜ人間達にわざわざ名乗りを上げる必要がある・・・」

アンドレアル

「・・・竜騎兵殿、自分で名乗りを上げられないのなら代わりに俺が小娘たちに教えてやってもよいのだぞ・・・」

アンドレアル

ラグサスのおちよくった口調に竜騎兵と呼ばれた男は再びため息を吐いた。

「ちつ・・・、私はデスピサロ様の臣下、デスパレス七魔帝が一角、アンドレアル竜騎兵のレグルス」

ヘルバトラ

「・・・同じく、七魔帝が一角、魔人のガイザー」

ラグサスのその様子に諦めた男二人はそれぞれ名乗りを上げた。

だが、教えられた当の本人たち、アリーナやクリフトは首をかしげるばかりであった。

「・・・デスピサロって・・・誰？」

「!!!？」

アリーナのその一言にラグサスは驚愕した。きょうがく

「・・・」

アリーナの一言があたかも分かっていたかのように、レグルスとガイザーは首を振った。

「とんだ茶番だな・・・」

レグルスはぼそつと呟くと腕を組み靴を鳴らした。

するとレグルスを中心とした地面に、人一人分入れる大きさの円陣の魔法陣が描かれる。

魔法陣が光を放った次の瞬間には、レグルスの姿が虚空へとかき消えた。

「俺も帰るぞ、甲殻騎士^{デスナイト}・・・殿^{どの}、主^{ぬし}にはまだ仕事があるんだろう？ ばやばやしてると闇神官の奴から管^{くだ}を巻かれるぞ」
「！」

ガイザーが両手をパンツと叩くとレグルスの時と同じように地面に円陣の魔法陣が描かれた。

そして、ガイザーの姿もまた虚空へとかき消える。

「・・・おのれ小娘、我らが主^{あるじ}、デスピサロ様のことを知らぬとは・
・・」

「知らないものは知らないんだから、仕方ないじゃない」
アリーナの発言はもったもなことであった。

どうやら、ラグサスの言うことには何かが足りてないようである。
「覚えておけよ小娘！ デスピサロ様は^{やじ}いずれこの世界の覇者となるのだ！！」

そう言うラグサスもまた一度手を叩き、足もとに瞬時に例の丸い魔法陣を描いた。

そして、その姿は虚空へと消えた。

「・・・何なのよあいつら・・・、ああ、もう、頭痛いわ」
名乗るだけで大した説明もせずに虚空へと消えたラグサス達にアリーナは頭を抱えて悪態をついた。

「ユータ、あなた何か知ってるんでしょ？」

「・・・ああ、まあな」

「説明してよ、ちつとも分かんないじゃない」

「・・・後で・・・この塔を出てからな」

「・・・約束よ」

ユータに説明を求めたアリーナだったが、結局今この場での説明は受けられなかった。

それでもとりあえずは障害がなくなったので、当初の目的を目指すことになった。

さえずりの塔・最上階

特に意味もないラグサスとの会話に終止符を打ったアリーナ達は、ついにさえずりの塔の最上階にある空中庭園へとやってきていた。手入れの行き届いた、とてもきれいな花畑は思わず見惚れてしまふに十分な景色であった。

そんな中、リースが庭園の奥で座り込んでいる女性を見つけた。それはリースが探し求めていた女性であった。

「お姉様！！ もう二度と会えないかと思いました」

「リース・・・よかったわ、無事で・・・」

リースの姉と思われるエルフの女性は、リースのことをぎゅっと抱きしめた。

「さ、帰りましょう、リース」

リースの姉は、そつと誘おうとするがリースが首を振る。

「あの、帰る前にお姉様に会ってほしい人がいるの・・・」

「えっ？」

リースはそう言って階段の方を見つめた。

そこにはアリーナ、クリフト、ユータの3人が立っていた。

「！ 人間！！」

「お姉様！ 待ってください」

エルフの女性は驚いて逃げようとするが、リースがそれを引きとめた。

「リース、どうして止めるの!？」

そんなリースにアリーナはそつと近づくと笑顔を見せる。

「リース、お姉さんに会えたのね、よかったね」

「アリーナさん、あ、ありがとうございます、お、おかげさま、でおねえ、さまに・・・ぐす」

リースは涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら、アリーナに頭を下げる。

「もう、リース、泣かないでよ、私まで涙がでてきちゃう」

「ご、ごめん、なさい・・・ぐす」

アリーナはリースの手を優しく握り締めた。

そんな二人の様子を見ていたエルフの女性が何も言わずに、一つの小瓶を取り出してアリーナに差し出した。

その女性の様子にアリーナは首をかしげる。

「これはエルフ族の秘薬『さえずりの蜜』です、これを差し上げますからリースのことを返してもらえませんか？」

エルフの女性のその言葉にアリーナは激しい怒りを覚えた。

「私は!!! そんなもののためにここまで来たんじゃない!!!」

アリーナの激しい剣幕にリースとエルフの女性が呆然となる。

「私は・・・、リースのことが、心配だったから、ただ、それだけ・・・」

そこまで言ったところでアリーナもまた堰^{せき}を切ったように大粒の涙を流した。

アリーナの涙を流す姿を見たリースは声を上げて泣き出した。

「ごめんなさい、アリーナさん、お姉様のこと、私が、代わりに、謝るから、許してあげて・・・」

「!!!」

「!!!」

リースの流した涙が地面に着く瞬間、それが小さな青い宝石へと変化した。

それを見たユータとクリフトは思わずその目を疑った。

「ユ、ユータさん、見ましたよね・・・」

「あ、ああ」

「宝石になりましたよね・・・」

「ああ、なつたな」

ユータとクリフトの二人はリースの涙が宝石に変わるその現場を目撃して呆然とした表情で呟いていた。

「エルフの涙が宝石になるっていうあの噂、まんざら嘘でもないのかもな・・・」

宝石に目を奪われたユータは思わず一歩リースの方へ足を踏み出そうとするが、それをクリフトに制される。

「！」

クリフトはユータの目を見ながら首を振っていた。

ユータもふと我に返り、視線を地面へと移した。

「すまない、クリフト・・・」

「いいえ、人間ですから、欲に目が眩んでしまうのは致し方ないことです」

「・・・」

クリフトの言葉にユータは気まずそうに頭をかいていた。

アリーナとリースの様子をずっと見ていたエルフの女性は申し訳なさそうに頭を下げた。

「・・・アリーナさん、ごめんなさい、私は人間に対して疑心暗鬼ぎしんあんきになっていたようです」

「・・・お姉様」

「このさえずりの蜜は、リースのことをここまで連れてきてくださったお礼です。どうぞ、受け取ってください」

「・・・ありがとう」

エルフの女性が差し出した『さえずりの蜜』の入った小瓶をアリーナは涙を拭きながら今度こそしっかりと受け取った。

「アリーナさん、クリフトさん、ユータさん、私、絶対皆さんのことと忘れません」

「リース、私も忘れない……。もう二度と会うことはないかもしれないけど、私とリースは友達だからね」

「アリーナさん……。」

最後にしっかりと抱き合う、アリーナとリースの二人。

それは、ほんのわずかな時間の中であっても、切っても切れない友情の糸を結んだという証だった。

その後、エルフの女性とリースの二人は手を振りながら、虚空の中へと消えていった。

「リース……。」

アリーナは涙をすべて拭き取るとクリフトとユータの方へと振り返った。

その手には、しっかりとさえずりの蜜が握られている。

「よし、リースを無事にお姉さんの元に送り届けたわ」

アリーナは寂しさを吹き飛ばすかのように元気いっぱい両腕を上げ、大声を上げた。

そんなアリーナの様子に、クリフトとユータは笑顔を見せるのだった。

「……。ねえユータ、カメラの翼って、羽の部分に行きたい場所の名前を書いて、放り投げればいいのよね？」

「ああ、そうだ」

さえずりの蜜をしまいつつ、代わりに道具袋からカメラの翼を取り出したアリーナは、使い方をユータに聞き直していた。

「よし、じゃ、バザーに戻る」

アリーナはそう言って、カメラの翼を天高く放り投げるが……。

コトッ！

何も起こることなくキメラの翼は地面へと落下すると小さな音を立てた。

「・・・あれ？」

アリーナはもう一度投げしてみるが、さっきと同じで何も起こらない。

「ど、どうして何も起きないの？」

「？」

アリーナに代わり、ユータがキメラの翼を拾い上げた。

「・・・！？　これ、キメラの翼じゃないぞ・・・」

「えー！？」

『キメラの翼』・・・とされていたものを拾い上げてしげしげと眺めていたユータは呟くように言った。

「よく出来てるけど、偽物だな」

「嘘！？」

「ちよつと道具袋の中、見せてみる」

アリーナの持っていた道具袋を受け取るとユータは中身を確認する。

「薬草や毒消し草は本物みたいだが・・・、聖水の小瓶・・・この中身はただの水だな」

「えゝ！！！」

「キメラの翼は、全部偽物」

「・・・」

ユータの鑑定にアリーナは呆然自失となる。

「どこで買ったんだこんなもん？」

「・・・バザーで・・・」

ユータの問いにアリーナは泣きそうな声で呟く。

「あはははははー！！」

アリーナの答えにユータは大声で笑い転げた。

「何だそりゃ、つまりアリーナは盗品じゃなくて偽物を掴まされた

んじゃないか！」

「そんなに笑わないでよ！！」

ただただ笑い転げるユータに、アリーナが真っ赤な顔して叫ぶ。
笑い転げるユータや恥ずかしそうにそっぽを向いてるアリーナの様子にクリフトは首をかしげた。

「え、えーと、それはつまりどういうことなんでしょう・・・」

いまいち状況の理解に苦しむクリフトにユータがポンッと肩を叩く。

「それはつまり、歩いて塔を下りなきゃいけない・・・ってことだ」

「・・・えゝ！！！？　ってことはなに、また、あの吹き抜けの部屋を通らないといけないってことですか！？」

「ま、平たく言うとそういうことだな」

「・・・ということは、またあの魔物達に追いかけられるんですね」

「・・・あ、そうか、バタフライの巣か・・・」

ユータとクリフトの二人はもっとも気がついてはいけない事実に関が付き、完全に石のように固まってしまったのだった。

「あ、そうだクリフト、塔を出るだけなら、もっと簡単な方法があるぞ」

「えっ？　何ですかユータさん？」

「そっから飛び下りればいいんだよ、地上まで一直線だ！」

「・・・えっ・・・」

「でもまあ、それは天国への片道切符でもあるんだろうけどな」

「・・・死ぬんじゃないですか！！！！」

登頂！ さえずりの塔（後書き）

意外と早く4話が書き上がりました。

文字数確認したらだいたい2話の時の半分くらいの量でした。

だいぶ物語を簡潔に作れるようになったかも・・・。

さえずりの塔の物語はいかがだったでしょうか？

楽しんでいただけましたか？

最後のオチはアリーナちゃんが持つて行きました。

エルフの女の子リースちゃんとのちよつとした感動（？）の話が台無しです。

今回はエルフのリースちゃんがいいとこ持つてつてしまいましたね。
このままでは主役のアリーナちゃんがちつとも活躍しないまま完結しそうです。

というか、ホントに細々とした活躍しかないまま終わりそうです。

リースちゃんの放ったライデインがクリフト君の鉄の槍に伝わって感電とか面白そうだなと思いましたが、シリアスな物語が壊滅しそうですねのでやめました。

いつか、ギャグだけで物語を追いかけるような小説も書いてみたい・・・。

そして、初老のおじ様ラゲサスさん、結局出ましたね。

ついでに正体も明かしてしまいました。

あの人、意外とおしゃべりです。隠し事が苦手です。

でも、大事なことをよく言い忘れます。もう最悪です。
皆さんもすっかりあの人に大事な秘密を話さないように・・・でな
いと大変なことになりますよ！！？

アリーナちゃんの章は次で最終回・・・の予定です。
まだほぼ白紙なのでどうなるかは分かりません。あくまで予定です。

死霊の王と狂気の剣（前書き）

この物語はSQUARE ENIX様より発売されたゲーム、ドラゴンクエスト4を題材としておりますが、ゲームのストーリーをメインとしつつも、作者のオリジナル要素をいくつか加えていますので、ゲームの内容とはまったく異なる展開になる可能性があることを予めご了承ください。

死霊の王と狂気の剣

2章 運命を背負いし高嶺の花

最終話、死霊の王と狂気の剣

前回までのあらすじ

砂漠のバザー（闇市）でエルフの少女リースを保護したサントハイム王女のアリーナ、新米神官のクリフト、青年剣士のユータの三人。

アリーナ達はリースのことを助けるべく、リースの姉がいると思われる古びた塔《さえずりの塔》を目指して旅をしていた。

さえずりの塔へ辿り着いたアリーナ達は、塔の内部でドラゴンバタフライという魔物の大群に足止めをされたがリースの活躍で何とか突破、無事にリースを姉の元へと送り届けることに成功した。

—— さえずりの塔・入り口前 ——

無事にリースを姉が待っている、さえずりの塔の最上階《空中庭園》へと送り届けたアリーナ、クリフト、ユータの三人は、アリーナが引き起こしたキメラの翼のハプニングを何とか乗り越えて、さえずりの塔を脱出していた。

「な、何とか出られたわね・・・」

アリーナにしては珍しく、安堵のため息を漏らしていた。

「・・・」

「いやあ、危なかったね」

顔面蒼白で言葉にならないクリフトとは対照的に、危なかったと言いつつもユータは照れ笑いを浮かべている。

「危なかったね・・・じゃないわよ！！ 何考えてんのよ！！」
照れ笑いを浮かべるユータにアリーナが喰ってかかる。

ことの発端は、あの3階のドラゴンバタフライ達との戦闘であった。

上階へと向かう時にはリースの活躍で事なきを得たが、階下へ向かう時にはリースがいなかったのでドラゴンバタフライの群れによって大きく足止めされてしまったのだ。

氷の魔法【ヒヤド】で、何十匹とドラゴンバタフライ達を氷漬けにして階下へ落としても、無尽蔵の如く新しいドラゴンバタフライが階下より湧き続けることに業を煮やした（ブチキレた）ユータは、ついに大爆発の魔法【イオラ】を発動したのである。

しかも二回も・・・。

一回目は周辺を飛んでいるドラゴンバタフライ達に、そして二回目は、ドラゴンバタフライの巣があると思われる付近に向かって・・・。

この二回目の大爆発の魔法【イオラ】がいけなかった。

一回目の大爆発の魔法【イオラ】ですら塔が受けた衝撃は大きかったにもかかわらず、ユータは間髪入れずに二回目の大爆発の魔法【イオラ】を使ったため、ついに塔はその衝撃に耐えられず、2階及び3階部分が完全崩壊したのである。

ユータのせいで3階から1階へと転落するハメになったアリーナとクリフトだったが、奇跡的に三人とも大した怪我もなく無事に塔の外へと出ることができたわけだが、そんな大それたことをしたにも関わらず、ちっとも反省の色が見えないユータにアリーナが喰ってかかったのだった。

「まあ、みんな生きてたし、結果オーライさ」

「・・・あんなね」

アリーナがユータに向かってさらに詰め寄るが、ユータは素知らぬ顔でクリフトに近寄る。

「悪いな、クリフト、どうしてもこうする必要があったんだ」

「えっ？」

ユータは小さな笑みを浮かべる。

「みんな、そのアリーナ姫のせいだな」

「ちよっと！　どういう意味よ、それ！！」

アリーナは再び喰ってかかりそうになるが、ユータにそれを制して言葉を続けた。

「アリーナ、お前さんは1階の扉を壊しちゃっただろ」

「それがどうしたっていのよ！！」

「あのままだったら、人間達は好きなだけ登り放題」

「！！」

ユータの言葉にアリーナは息を飲む。

どうやら、アリーナにもユータの言っていることに気がついたようだ。

「いつかまた、リースのようなことが起きる・・・」

「・・・」

アリーナはリースのためにと頑張ってやったことが、結果、リースに迷惑をかけていたことに気が付き悲しい顔で頭を下げた。

「・・・で、でもですよユータさん・・・」

「ん？」

真面目な顔で語るユータにクリフトが首をかしげる。

「だからと言って、何も3階であんな魔法を使う必要はないと思いますけど・・・」

「・・・」

クリフトの疑問に、ユータは笑顔を向ける。

「だってあの馬鹿ドラゴンバタフライどもにム力ついたんだもん」

「・・・言ってること滅茶苦茶めいちゃくくちやです・・・」

ユータの一言にクリフトはがっくりと肩を落とした。

「まあクリフト、命に別状はないし、良しとしましょ」

「ア、アリーナ様までさつきと言ってること違います・・・」

リースのことを引き合いに出されたアリーナはそれ以上ユータに向かつて文句を言うことができなくなり、場を収めようと取り繕つくろう。そんなユータとアリーナの二人にクリフトはうなだれ続けた。

「これやるから元気出せ！」

ユータは自分の道具袋からさらに小さな袋を取り出し、クリフトに手渡した。

「・・・？」

手渡された袋を開けてみると、そこにはあるアイテムが入っていた。

「・・・これって・・・」

「キメラの翼、もちろん本物のな」

ユータがクリフトに渡したアイテム、それは『キメラの翼』であった。

「・・・ユータさん持ってたんじゃないですか・・・」

「・・・そうだな、持ってたらしい」

ユータはクリフトから視線を外しつつ、ニヤけた顔で言った。

「・・・ひどいです、ユータさん」

そう言いながら、クリフトは行き先を書きだした。

「アリーナ様、バザーでいいんですよね」

「いいわよ」

クリフトは丁寧に行き先を『サントハイム王国、サントハイム領、砂漠のバザー』と書きこむ。

そこまで丁寧に行き先を書く必要はない気もするが、クリフトの几帳面さがうかがえた。

クリフトがキメラの翼を天に向かつて放り投げる。

その瞬間、アリーナ達三人の姿が虚空の中へとかき消えた。

—— 砂漠のバザー ——

キメラの翼を使い、一瞬にして砂漠のバザーへと瞬間移動したアリーナ達は一旦疲れをとるためテントで作られた簡易の宿屋に立ち寄っていた。

「じゃ、アリーナ様すみませんが、私疲れたので先に休みます・・・」

高所恐怖症であるにもかかわらず、無理矢理さえずりの塔の最上階まで登り、拳句の果てに3階から落とされるという目に遭わされたクリフトは精神がすでに限界を迎えていたらしく、宿屋に入ると倒れこむように眠ってしまった。

「ね、ユータ」

クリフトの様子を見ていたアリーナがユータに向かって声をかける。

「・・・」

しかし、ユータは何も答えることなく鞘に収めたままの剣を机の上に置き、ぼんやりとそれを眺めている。

その様子は心ここに非^{あら}ずといった感じだった。

「ユータ！ 聞いているの？」

「！」

アリーナの声に、ハッと我に返ったユータは呼んだ声の主^{ぬし}の方へと顔を向ける。

「何か変よ、大丈夫？」

「・・・大丈夫だ、何でもない・・・」

大丈夫だというが、ユータの目は暗く沈んでいた。

アリーナはそんなユータの表情に口を閉ざし首をかしげる。

「・・・ちよつと出てくる」

ユータは剣を取ると宿屋を出ようと立ち上がった。

「え、ちよつと、私、聞きたいこと・・・、待ちなさいって！」

アリーナもまた、ユータの後を追って宿屋を飛び出した。

早足で歩くユータに駆け寄るとアリーナはそつとユータの顔を横から覗いた。

ユータの目は、とても険しく、今まで見たことのないような殺気を秘めたような目だった。

「・・・」

ユータの様子に何も声をかけられなくなったアリーナは、とにかく見失わないようにとユータの背中を追いかけた。

しばらく後をついて行くと、ユータはバザーにいくつかある中でも、とくに目ぼしい売り物もない一つの武器屋で立ち止まった。

「・・・しけた顔^{ツラ}しやがって、まだ生きてたようだな、ユータ」

この店の主らしき男^{あるじ}が、ユータに向かって声をかけてきた。どうやら、ユータはこの店の主人と面識があるようだった。

「・・・預けた剣を引き取りにきた・・・」

ユータの話具合からして、この店は武器屋として武器を売るほかに預かり所も兼ねているようだ。

「おいおい、お前さんから預かった剣なんて、この前渡した鋼鉄^{はがね}の剣・・・!!」

店の主人はユータの言葉にしばらくパタパタと手を振っていたが、突然、石のように硬直した。

「・・・お前さん、まさか・・・、あの剣・・・使う気か!?!」

「使う、今の俺には、どうしてもあの剣が必要だ・・・」

店主の血の気があつという間に引いて行く様子が見て取れる。

店主は数歩後ずさると、背を向け奥から一つの長方形の箱を取り出した。

箱の中には一振りの剣が収められていた。

「！！」

その剣を見た瞬間、アリーナの背中に悪寒が走った。

あの剣に触^{さわ}ってはいけない……。

アリーナは直感的にそう感じていた。

あまりにも禍々しく、見ているだけで息苦しくなるそれは狂気の剣と呼ぶにふさわしい。

「……確かにこの剣は、お前さんから預^もかった物^{もん}だけだよ、ホントに使う気なのかよ……」

青ざめた表情のまま店主が絞り出すように声を出す。

「……」

ユータは何も言わずに、禍々しいその剣を手を取った。

そして代わりに、持っていた剣（鋼鉄の剣）を店主に手渡す。

まるで、預かり料の代金だと言わんばかりに……。

ユータは禍々しい剣を手にとると、鞘から引き抜こうとする。

「！ や、やめてくれ！！ こんなところで抜くのなんて！」

店主は両手を慌てたように振りながら、ユータに向かって叫ぶ。

「！！」

ユータはハッと我に返ったように視線を剣から離すと、その剣を腰へと差した。

「……」

アリーナはその剣の放つ狂気ともいえる力に^お圧されて、ユータに声をかけたくても、その声が出なかった。

「アリーナ……」

「！！」

突然ユータに声をかけられ、アリーナは息をのんだ。

「塔での一件、ラグサス達のことは忘れる・・・」

「・・・」

その言葉にアリーナは約束が違うと反論したかったが、かの剣の発する圧力で声にならない。

「ラグサス達は、何が何でも俺が・・・」

「・・・」

「フィナには・・・絶対に手を出させん・・・」

「・・・」

なんとかユータに声をかけようと、必死に声を絞り出そうとするが、まったく声にならず、アリーナは苦悶の表情を浮かべる。

「フィナは・・・伝説の勇者は、この俺が必ず守る・・・、たとえばこの命に代えることになったとしても・・・」

「・・・」

「アリーナ、ここでお別れだ、俺はラグサスと決着をつけに行く・・・」

「！！」

ユータは最後にそう言うと、アリーナに背を向け去っていく。

アリーナは引き止めようとするが、金縛りにあつたように身体が硬直してしまっていて動くことができなかった。

声も出せず、追いかけることもできない・・・。

アリーナはユータの姿をその場で見送りざる得なかった。

しばらくしてようやく金縛りから脱することができたアリーナは、クリフトがいる宿屋へと戻ってきていた。

アリーナはクリフトの隣で横になると天井を見上げる。

「・・・ユータの言ってた、フィナって何だろう？ 女の子の名前みたいけど・・・」

アリーナがクリフトを起こさないように小声で呟く。

「伝説の勇者って何？ ラグサス達は何者なの？ ユータは何をしようとしているの？」

次々と頭の中に疑問が浮かぶが、何一つ解決できず、アリーナはその目を閉じた。

「ユータはラグサスと決着をつけるって言ってた……、ユータには……、ラグサスの居場所が……分かる……の……？」

最後にその疑問が頭を過つたが、それとほぼ同時眠気に襲われたアリーナはそのままウトウトと深い眠りへ落ちて行った。

翌日

「ユータさん、行ってしまったんですか……」

「うん……」

アリーナとクリフトの二人は、昼間行われている闇市ではない普通のバザーを見て回っていた。

闇市の時とは違い、店頭に並んでいる品物もそれほど安値のものではなく、割引価格もせいぜい20%〜30%OFFといったところであった。

クリフトは偽物のキメラの翼を売りつけた商人に、文句の一つも言おうと思っていたが、さすがにあのときの商人はもうバザーにその姿はなかった。

いつもなら、アリーナが「あの商人見つけたらただじゃおかないんだから」とか言いそうだが、今日のアリーナはひどく沈んでいた。クリフトはそんなアリーナの様子がとても心配であったが、一人にしておくわけにはいかず、珍しくクリフトがアリーナを連れ回す形でバザーの中を回っていた。

「ねえ……クリフト……」

「！」

手を引いて前を歩いていたクリフトにアリーナが声をかけた。
その声に張りはなかったが、アリーナのことを気にしていたクリフトはすぐに後ろへと振り返った。

「ユータは何をしようとしてるのかな？」

「？」

「昨日ね、私、すごく気持ちの悪い剣を見たの……」

「剣……」

「ユータはまるで何かに取りつかれたような目でその剣を手にとったわ……」

アリーナの顔に血の気はなく、ひどく何かに怯^{おび}えているような、そんな様子であった。

「ラグサス達は何者なの？ ユータはどうしてあいつらを追っているの？ 伝説の勇者って何なの？」

「！」

低い声で呟くアリーナの言葉の中にクリフトは引っかかりを感じた。

「……伝説の勇者」

クリフトは伝説の勇者という言葉に首をかしげる。

クリフトはどこかでそれに関する記述が書かれた書物を見た覚えがあるような気がする。

「あれは……確か……」

クリフトはアリーナの様子を心配しつつも、懸命に記憶の糸を手繰り寄せる。

伝説の勇者……それに関する書物の見た場所を……。

「あ！ ブライ様の部屋だ……」

記憶の糸を辿っていたクリフトはおもむろにそう呟いていた。

クリフトはグッとアリーナの肩を掴む。

「！？」

アリーナが驚いたように不安そうな瞳のままクリフトを見つめた。

「アリーナ様、一旦、サントハイム城へ戻りましょう」

「えっ？」

「アリーナ様のおっしゃっていた、伝説の勇者について何か分かるかもしれません」

「分かる？ ホントに？」

不安そうな声で問うアリーナにクリフトは笑顔でうなずく。

「戻る戻る、すぐ戻る」

そう言っただけでアリーナはクリフトの手を引き、バザーを後にしようとするが、それをクリフトに止められた。

「アリーナ様、歩いてでは時間がかかりすぎます、道具屋でカメラの翼を買いましょう」

「！ うん・・・」

クリフトの言うことに素直にうなずくと、アリーナはさっそく道具屋を探そうとあたりを見回す。

そんなアリーナの様子にクリフトはようやく安堵の表情を浮かべた。

暗く落ち込んだようなアリーナの様子を見ているよりも、多少わがままでも元気に走り回っているアリーナの姿の方がクリフトは好きだったからだ。

クリフトは道具屋を見つけて走って行く、アリーナの背中を追いかけた。

—— サントハイム城・城門前 ——

砂漠のバザーの道具屋でカメラの翼を購入したアリーナとクリフトは、すぐさまそれを使い、サントハイム城の城門前へと瞬間移動してきていた。

「・・・お父様や城の皆、怒ってるかな？」

「・・・そう、かもしれませんね」

城の門前にやってきたアリーナはちょっと不安そうに呟く。
そんなアリーナの様子にクリフトも不安な面持ちで呟いた。

何も伝えることなく、黙って城を抜け出して音信不通となっていたのだから、帰れば当然怒られるであろうことは言うまでもないだろう。

「と、とにかく、このままここにいても埒が明きません、怒られる覚悟はできているのですから、中へ入りましょう」

クリフトはそつとアリーナを促し、城門脇の使用人の勝手口から城内へと入っていった。

サントハイム城・城内1階

「・・・あれ？」

城内へと入ったクリフトは、奇妙な違和感を感じた。

何かがいつもと違うような気がする・・・。

城の内装が変わった様子はない、中庭の花壇の花の種類もとくに変わってはいない。

だが、何かが変だと、頭の中で警鐘が鳴り続ける。

「クリフト・・・何で誰もいないの？」

「！」

アリーナがポツリと呟いた言葉にクリフトは我に返った。

「・・・」

アリーナとクリフトは、手分けして城内のあちこちの部屋を見て回るが、やはり誰かいるような気配はない。

そして、一通り城内を見て回ったアリーナとクリフトは玉座のあ

る謁見の間につながる階段前へとやってきた。

「この様子では、2階にも誰もいないでしょうね・・・」
階段の先を見上げながらクリフトが呟くように言った。

「・・・！」

しかし、アリーナは2階に何かを感じて階段を駆け上がる。

「！？ アリーナ様！！」

アリーナの様子に驚いたクリフトは声をかけつつ、その後を追いかけた。

サントハイム城・城内2階・謁見の間

「！！」

階段を駆け上がったその先に二人の男が玉座を前に左右に対峙していた。

その男二人は、アリーナ、そしてクリフトのよく知った人物であった。

「ユータ・・・、ラグサス・・・」

「なんでユータさんがここ・・・！？」

ユータの姿を見ていたクリフトだったが、ユータのその腰に差ししていた剣に目を向けた瞬間、言葉に詰まった。

「・・・な、なんて剣を持ってるんですか・・・」

砂漠のバザーでかの剣を見た時のアリーナのようにクリフトは青ざめた表情で呟く。

「クリフトも感じるよね？ あ、剣の、なんて言うか、こう嫌な感じが・・・」

アリーナもまた顔を青くしつつ呟く。

「ククク、小娘達、この城はお前たちのような者が来ていいような場所ではないぞ・・・」

アリーナやクリフトの姿に気がついたラグサスがいやらしいような顔で含み笑う。

「それはこっちのセリフよ!!」

アリーナはユータの持つている剣の圧力をはねのけるかのように強い口調で言つてのける。

「この城は私の城!! 私はサントハイムの王女アリーナよ!!」

「!??」

声高らかに名乗りを上げるアリーナを見て、ラグサスは一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに平静を取り戻すと、今度は逆大声で笑い始めた。

「ククク、ハハハハハハ・・・」

「!??」

「そうか、お前がサントハイムの王女であつたのか、道理で見つからぬはずだ・・・クツクツク」

「ど、どういう意味よ!!」

「ククク、この城に住む者たちは皆、我等が魔族の城、デスパレスへと招待してやったぞ!!」

「!?? 魔族の城!? 魔族の城ってどういうことよ!??」

いやらしい顔で得意げに言うラグサスに向かって、アリーナが叫び声を上げる。

「・・・??」

ラグサスはそんなアリーナの様子に腕を組んで顔をユータの方へと向けた。

ユータはラグサスの方へと目を向けたまま、一言も発することなく微動だにすらせずその場所に佇んでいる。

スキあらば攻撃を仕掛けると言わんばかりに殺気を放ちながら・・・。

「小僧は何も伝えなかったのか・・・。小娘がデスピサロ様の名前すら知らなかった理由がよく分かったわ・・・」

ラグサスがため息交じりの声で呟く。

「小娘！！ 改めて名乗ってやろう、俺は魔族の王デスピサロ様に仕える上級魔族、デスパレス七魔帝が一角、甲殻騎士^{デスナイト}のラグサス！！」

「・・・魔族の王デスピサロ・・・！？ 上級魔族・・・ラグサス・・・」

「ククク、驚いているようだな・・・」

「ちょっと待つてよ、あんたの姿はどう見ても人間にしか・・・」

「・・・？ ククク、気付かなんだか・・・？ もちろんこの姿は借り物だよ、この姿でなければ、人間達の前には出られぬからな・・・」

ラグサスが笑いながら、身につけていたフードをはぎ取った。

そのフードが一瞬、ラグサスの姿を覆い隠すが、フードが地面へと落ちた時には、人間の姿をしたラグサスの姿はどこにもなく、かわりに鎧を纏^{まと}った一匹の全身骸骨の姿をした魔物が現れた。

「！！！」

「ククク、これが我が本当の姿・・・。気に入って、もらえたかね・・・クククク・・・」

骸骨の魔物、ラグサスのその髑髏^{どくろ}の目の奥が紫色にあやしく光る。

「・・・我は甲殻騎士^{デスナイト}のラグサス・・・死霊の王なり・・・」

ラグサスは自身の骨の身体から、一本、骨を抜き取るとその骨に力を込める。

すると、その骨は見る見るうちに長くなり、一本の剣を形作る。

ラグサスはその剣を手にも、二、三回振ってから、戦闘態勢を構えて見せた。

「・・・」

ユータもまた、ラグサスが剣を手にとったのを見て、腰に差ししていた剣を鞘から引き抜いた。

ユータの手にする剣から、えも知れぬ妖気があたりを包み込む。

「ククク、まさか、人間がそのような剣を使おうとはな・・・」

ユータの剣を見たラグサスは嬉しそうに声を上げた。

「小僧の剣から強力な魔力を感じ取っていた故、何かの魔法が込められた剣かと思っていたが・・・、まさかまさか『皆殺しの剣』とはな・・・」

「！ 皆殺し！？」

ラグサスの言葉にアリーナは驚いた表情で呟く。

「ふむ、三人まとめて相手をしてもよかったのだが、小僧に小娘らを殺されては楽しみが減ってしまうな・・・」

ラグサスはユータ、アリーナ、クリフトの三人にそれぞれ目を移しながら呟くように言った。

「小娘にそっちの小僧、お前たちの実力を期待しているぞ」

「！？」

ラグサスの言葉の意味が理解できなかったアリーナとクリフトは怪訝そうな顔をするが、アリーナはすぐに後ろから何者かの気配を感じ、振り返った。

そこには何もいなかったが、階段の下から何やら数人の人の足音が聞こえる。

「！？ 下には誰もいなかったはず！！」

「！？」

アリーナの声にクリフトも振り返った。

階段下から聞こえる足音は徐々に近づき、そこから数匹の骸骨の姿をした魔物『骸骨剣士』が現れた。

「！！」

アリーナとクリフトは、階段より現れた魔物に驚きつつも、すぐ戦闘態勢を構える。

「小娘やそっちの小僧はしばらくそやつらと遊んでいてくれ、くれぐれも死なぬようにな・・・、我を落胆させるなよ小娘・・・クックク」

ラグサスは最後に含み笑うと剣を構え、ユータに向かって斬りかかっていった。

ギン！！

ラグサスとユータの剣がぶつかり合うたびに激しい音をまき散らす。

互いに一步も引かず、ひたすら剣を振るい合う。

（ククク、この小僧、完全に剣の呪いに心を蝕まれておる、楽しいではないか・・・ククク）

ユータの様子にラグサスは心躍こころおどろっていた。

「・・・」

一方のユータは何も語らず、ただひたすらに剣を振るっていた。ユータの瞳に光はなく、死人の目のようにひどくよどんでいる。その姿はもはや人ではなく、一つの殺人機械キラマシンのようであった。

そんなラグサスとユータの戦いに目を奪われつつも、アリーナはすぐに気持ちを切り替え、階段より現れた骸骨剣士達に向かって攻撃を仕掛けた。

「でえい！！！」

気合いの掛け声一つ、アリーナは骸骨剣士の一匹に回し蹴りを繰り出した！

パキッ！！

骨が折れる嫌な音とともに、回し蹴りを受けた骸骨剣士が近くの柱に激突し、パラパラと崩れ落ちる。

「まずは一匹！！」

アリーナはさらに手近にいる骸骨剣士に攻撃を仕掛ける。

一方のクリフトも鉄の槍を振るって善戦していた。

「このっ！！！」

槍の長さを利用して、接近されないように注意しながら的確に骸骨剣士の骨の身体に攻撃を当てていく。

ある程度ダメージを与えたところで、クリフトは骸骨剣士を槍で横に薙ぎ払うと、骸骨剣士の骨の身体はバラバラに崩れ落ちた。

アリーナ、そしてクリフトの二人はしっかりと攻撃を当て、1匹ずつ確実に骸骨剣士達を仕留めていった。

ギンツ！！

「ククク、呪いの力で我を越えるか・・・」

「・・・」

ひたすら剣を振るい合うラグサスとユータだったが、徐々にラグサスが押され始めていた。

「だが、まだまだ・・・」

ラグサスは一旦跳び下がり、右手に持っていた剣を左手に持ち替える。

ユータが追い撃ちをかけるように接近し、攻撃を仕掛けていく。

ラグサスは慌てることなく、ユータの攻撃を剣で弾くと、右の掌に魔力を集めた。

「ベギラマ！」

ラグサスが火炎の魔法【ベギラマ】を解き放つ。

至近距離から放たれた魔力の玉は、ユータの身体に当たると炎の渦となってその身体を飲み込む。

「！！」

しかし、ユータが剣を一振りするだけで炎の渦の奔流は消え、代わりにユータの剣から巨大な炎が巻き上がる。

「・・・そうか、主は魔法戦士であつたな・・・、少しも魔法を使わんから忘れておつたわ」

ラグサスは再び自身の骨の身体から、一本、骨を抜き取るとその骨に力を込める。

「またも、その骨は見る見るうちに長くなり、一本の剣を形作る。右手と左手のそれぞれに剣一本、二刀流の構えを見せると、ユータに斬りかかっていった。」

ラグサスとユータの戦いにクリフトは手を止めて呆然としていた。「あれは、ユータさんが見せたあれは・・・私があのカメレオンマシンの戦いで起きたあの現象と同じもの・・・魔法戦士とは一体・

・・・」

「グガア！！」

「！！」

クリフトが見せた隙に、骸骨剣士が襲いかかる。

「！クリフト！」

パキッ！

クリフトは骸骨剣士の攻撃に避ける間もなかったが、クリフトの援護に来たアリーナの手によって粉碎された。

「クリフト！油断しちゃダメよ！」

「すみません、アリーナ様」

アリーナの援護を受けて態勢を整えたクリフトは鉄の槍を構えなおす。

「それにしてもキリがないわね、こいつら・・・」

「・・・」

アリーナ達はすでに十数体もの骸骨剣士達を打ち倒してきたが、倒しても倒しても階下より新しい骸骨剣士が現れるため、手を焼いていた。

「あの古塔のときと一緒に参ったわね・・・」

「・・・」

確かに、階下より無尽蔵の如く現れる様子は、あのドラゴンバタフライ達との戦いと同じであったが、一つ決定的な違いがあることをクリフトは見抜いていた。

さえずりの塔で戦った、ドラゴンバタフライ達は無制限に階下から現れ続けたのに対して、この骸骨剣士達は4匹以上にはならないのである。

仮に1匹倒して、残りが3匹になると新しい骸骨剣士が1匹階下より現れる。

2匹倒したなら、2匹新しい骸骨剣士が階下より現れる。つまり、何も倒さなければ4匹のままそれ以上には増えないのだ。これが、ドラゴンバタフライ達との戦いの決定的な違いであった。

「・・・アリーナ様、私に一つこの状況をなんとかする方法があります」

「えっ？」

「少し時間をください」

「・・・分かったわ」

クリフトには一つこの状況を打破する術すべがあった。このことを伝えると、アリーナは快く囿こもになることを引き受けた。

アリーナは骸骨剣士達それぞれに、一回ずつ攻撃をして骸骨剣士達の気を引き寄せる。

（クリフト・・・早めに頼むわよ・・・、さすがに4匹じゃ相手の動きが読みづらいわ）

アリーナは心の中でそう呟くと攻撃を捨て回避に専念する。

アリーナが囿こもとなっている間にクリフトは精神を集中し、呪文を詠唱する。

「風の精よ、我が呼びかけに応え、我が前に立ち塞がりし者達を、

幻惑なる霞かすみの中へ閉じ込めたまえ・・・マヌーサ！」

クリフトの持っていた鉄の槍の切っ先から現れた魔力の玉を骸骨剣士達に向かつて飛ばした。

魔力の玉は寸分の狂いもなく、骸骨剣士の一匹に命中。

骸骨剣士に当たった魔力の玉は弾けるとそこから幻惑の霧が発生。骸骨剣士達だけではなく、アリーナをも幻惑の霧に包み込んだ。

（・・・？ 何これ？）

アリーナは周りを取り囲んでいたはずの骸骨剣士達が霧の中へ消えたことを見て思わずあたりを見渡した。

前後左右、どこを見ても骸骨剣士の姿はない。

濃い霧が発生していて視界が効かないのだ。

時折、近くに骸骨剣士の気配を感じるが、視線を向けた時には気配が消え去ってしまうという繰り返しであった。

アリーナは完全にクリフトの幻惑の呪文【マヌーサ】の術中にハマってしまっていた。

「アリーナ様、聞こえますね」

アリーナはふと耳を澄ますとクリフトの声が聞こえてきた。

「！！？」

周りに視線を走らせるが、クリフトの声は前後左右のあちらこちらから聞こえ、アリーナはこの状況に困惑した。

「目を閉じて、私の声のする方に歩いてきてください」

「えっと、でも、魔物達が・・・」

「骸骨達のことには気にせず、よろしいですね・・・」

「う、うん・・・」

アリーナはクリフトの言葉に戸惑いながらも、言われたとおり目を閉じるとクリフトの声がすると思う方向に向かつて足を進めた。

たまに骸骨剣士達の気配を感じることもあったが、気にせずに歩き続けた。

少し歩いたところで、突然誰かに腕を掴まれたアリーナはパツと目を見開いた。

「！クリフト・・・」

アリーナの腕をつかんだのはクリフトであった。

「アリーナ様、大丈夫ですか？」

「う、うん・・・」

アリーナの返事にクリフトは小さくうなずくと、アリーナの腕から手を離して、手持ちの道具袋へと視線を移した。

クリフトは道具袋に手を入れて何かを取り出そうとしている。

「・・・クリフト、さっきのは何だったの？」

「マヌーサの呪文を使っただけです」

「マヌーサ？」

「視界の一切を奪い去り、人や魔物の気配をも拡散させる、幻惑の魔法です・・・」

アリーナの問いに、クリフトは道具袋を覗き込んだまま説明する。そして、クリフトは道具袋に入っていた『聖水』を取り出した。

「アリーナ様まで魔法にかけてしまったのは謝ります」

「・・・別にケガとかしたわけじゃないから、それはいいけど」

クリフトの謝罪にアリーナは首を振って答え、骸骨剣士達の方へと視線を移した。

骸骨剣士達は、それぞれに誰もいない方向へ向かって、頻りに剣を振っている。

「骸骨達と戦っていてもキリがありません、私はここで時折骸骨達に幻惑の魔法をかけ直して足止めをしますので、アリーナ様はユータさんを助けに行ってください」

「うん、分かったわ！」

「あ、ちよつと待ってください」

「？」

クリフトのその言葉にアリーナは勇んで飛び出そうとしたが、それをクリフトに止められる。

クリフトは持っていた聖水をアリーナの身体にかけると、そのアリーナの両肩に手を乗せて呪文を唱えた。

「神々の御名おんなの元に、この者に宿りし呪の力を取り除きたまえ・・・、シャナク！」

クリフトは解呪の魔法【シャナク】を使った。

アリーナの身体が一瞬だけ淡く光る。

「・・・これは？」

「正規神官のみに使用が許されている解呪の魔法です、私にはまだこの魔法は扱いきれませんが、聖水の力を利用して無理矢理効果を発動させました」

「解呪つて、私は呪われてないはずだけど？」

「・・・ユータさんの持つている剣は、おそらく強力な呪いが込められた悪魔の剣です。この魔法をかけておかなければ、おそらくアリーナ様も呪いの力に押されて身動きが取れなくなってしまうでしょう」

「！！！」

クリフトの説明に思い当たる節があったアリーナは、ピクツと肩を震わせた。

（・・・バザーのあの時、私は金縛りになってたっけ・・・）

バザーで別れたユータの背中を見続けることしかできなかった自分のことを思い出していた。

「正規神官のそれに比べれば大した効果はありません、決してあの剣には触らないでください、いいですね？」

「・・・うん」

クリフトの助言にアリーナは素直にうなずくと激闘を繰り広げているラグサスとユータの方へ視線を動かした。

ギンッ！！

ラグサスとユータは激しい剣撃の応酬を繰り返していた。

互いに一切の魔法に頼らないその姿は、究極の位置にまで登り詰めた剣豪のようであった。

「・・・」

二刀流となったラグサスに臆することなくユータは攻撃をしかけ続ける。

臆するというより、すでに怖いという感情が剣の呪いによって消え去ってしまっているのかもしれない。

「ムウ・・・結構粘るな、この小僧・・・」

ラグサスはユータの攻撃を避けるため、一歩後ろへと後退しようとしたそのとき！

「！！！」

ラグサスの背中が後ろの壁にぶつかった。

ユータの猛攻を避けるたびに後退していたラグサスは、気がついた時には壁際へと追い詰められていた。

バギンッ！！

ユータの剣がラグサスの左腕を肩口からざっくりと斬り落とした。

「チィッ！！」

ラグサスは残った右手に持っていた剣の柄でユータの下腹部を殴りつけた。

バゴンッ！！

ユータの身体が後ろへ大きく吹き飛ばされる。

（今だわ！！）

それを見ていたアリーナは、ラグサスに向かって一気に詰めより攻撃をしかける。

「！！」

アリーナが一気に距離を詰めてくることに気がついたラグサスであつたが、動じることなくユータの方へと視線を向けた。

「せいのー!!」

アリーナがラグサスの骨の下腹部を力いっぱい殴りつける。

パキッ!!

「! くあああああ!!」

悲鳴を上げたのはアリーナの方であつた。

激痛が走つた右腕を押さえ、クリフトのいる方へ大きく跳び下がりその場にしゃがみこむ。

「!」

アリーナの悲鳴を聞きつけたクリフトはすぐさま近寄ると回復魔法【ホイミ】を使った。

「ククク・・・我の二つ名を聞いておらんかつたのか? 我は甲殻デスナイト騎士ぞ・・・! ああ、そうか、甲殻騎士とは名乗つたが甲殻騎士とは名乗つておらんかつたな」

「くつ、甲殻騎士・・・」

「その硬さは、小娘がさつき試した通りぞ・・・ククク」

「・・・」

回復魔法によつて徐々に痛みが引いていくことを感じながら、アリーナはラグサスの含み笑うその姿に奥歯を噛みしめた。

「さて、一対一での勝負にちよつかいをかけた、小娘から殺してやるう」

「!」

ラグサスは剣を構えなおし、ゆっくりとアリーナに向かって歩みを進める。

「・・・このサントハイム王家の血筋は代々不思議な力を持っているという・・・」

「!??」

ラグサスは歩きながら昔話を語るような口調で話を始めた。

「その血筋を受け継ぐ小娘・・・、お前が伝説の勇者である可能性は高い・・・」

「伝説の勇者・・・？　ちよつと！　伝説の勇者って何よ！！」

「・・・」

アリーナの叫び声にユータが剣を杖代わりに立ち上がり、ラグサスへ狙いを定める。

「伝説の勇者・・・、それは我らが魔族の神、地獄の帝王様を葬り去るという力を持った人間だという」

「地獄の帝王・・・？」

「くだらぬ・・・、人間如きにそのような力があるとは到底思えんが、可能性は摘み取らねばな・・・」

アリーナに近づくラグサスを遮るかのようにクリフトが間に割って入った。

クリフトは鉄の槍を手に、ラグサスとの決死の戦いをする覚悟を決める。

「・・・神官の小僧、お前が私を倒せるのか？」

「私は、サントハイムの神官・・・アリーナ様をお守りすることが私の使命・・・」

クリフトは鉄の槍をラグサスに向かって突き刺そうと繰り出した。ラグサスの骨の身体に鉄の槍は確かに当たったが、そこには何一つ傷がついてはいなかった。

クリフトは負けじと二度三度と突きを繰り返すが結果は同じだった。

「・・・神官の小僧、後でゆつくり遊んでやろう」

ラグサスはクリフトの持っていた鉄の槍を右手の剣で打ち払う。

「うわっ！」

クリフトはラグサスの攻撃による衝撃に耐えきれず、真横に大きく吹き飛ぶと地面を転がった。

「さて、勇者の小娘・・・覚悟はよいな」

ラグサスは剣の切っ先をアリーナへと向ける。

アリーナはそんなラグサスを睨みつけながら歯を喰いしばった。

「・・・」

だが、そんなラグサスの隙をユータが見逃すはずもなく、剣を両手で掴むと上段構えで一気に跳びかかった。

「ククク、そう来ると思っていたぞ、小僧・・・」

ユータの動きを予想していたらしく、ラグサスは含み笑うと右手の剣を捨て、掌をユータに向けた。

床へと捨てた剣は小さな音とともに、元の骨へと形を戻す。

「先のベギラマは剣の魔力と変わってしまったようだ、今度はそうはいかぬぞ・・・」

ユータに向けた掌の先に魔力の玉が出現。

「ベギラゴン！！？」

ラグサスは炎の魔法【ギラ】系の中でも最上位に位置する轟炎の魔法【ベギラゴン】を放ったが、放つ直前にアリーナに足払いをかけられた。

転ぶことこそなかったが、ユータに向けたはずの掌が右方向へとずれてしまう。

ラグサスの放った魔力の玉はユータにぶつかることなくその脇を抜け、壁にぶつかりと巨大な炎を巻き上げた。

「くっ、小娘！！」

ラグサスは邪魔をしたアリーナに一瞥する。

だが、次の瞬間には・・・！！

「グガアッ！！」

ユータの剣がラグサスの右肩から左腹部へと深々と突き刺さっていた。

「こ、小僧！！」

ラグサスはほとんど上げることができなくなった右手でユータの身体を力の限り一発殴りつけた。

殴りつけられたユータは剣を手放し、後ろへ大きく吹き飛ぶ。
剣の呪いから無理矢理解放されたユータは、放心状態となり、その場で倒れたまま完全に動きを止めた。

呪われた悪魔の剣『皆殺しの剣』はラグサスの骨の身体に引っ掛かり、抜けなくなってしまうていた。

「く・・・」

ラグサスは右手に力を込め、突き刺さった剣を引き抜こうとするが、その剣はまったく動かない。

「おのれ・・・、回復魔法を使える手下どもを連れてきておくべきであつたか・・・」

回復魔法【ホイミ】系の呪文で体力や怪我を回復させながらであれば、剣を引き抜くことも容易なのであるうが、あいにくとこの場には回復魔法を使える者はクリフト以外いなかった。

「とにかく、この小娘だけでも始末せねば・・・」

ラグサスは右の掌をアリーナに向ける。

しかし、アリーナは素早く起き上がるとラグサスと距離を取った。

「・・・く・・・」

ラグサスは魔力を掌に集め、アリーナに向かって放ち続けるが、それらは距離がある分、簡単に避けられてしまう。

深々と突き刺さった剣のために力の限界が近づいていたラグサスには究極の選択を迫られていた。

自らの身体が消滅するまで戦い続けるか、それとも一度身を引き再起をかけるか・・・。

それは死ぬか生きるかの二者択一の選択であつた。

一方のアリーナもまた反撃に転ずるかどうかの選択を迫られていた。

甲殻騎士（いづかきし）と呼ばれるラグサスの身体にはクリフトの持っていた鉄の槍すら刃が通ることはなかった。

鉄の槍であれば、アリーナの手持ちの武器『聖なるナイフ』程度では、ラグサスの硬い身体に刃が通ることはないだろう。
であるならば、攻撃する方法は自ずと一つに絞られてくる。

「やってやるわ、このまま逃がしてなるものですか！」

アリーナは奮起すると、素早く反撃に転じた。

一気にラグサスとの距離を詰める。

「くっ」

ラグサスもアリーナの接近に気が付き魔法で対応するが、それらの魔力の玉はことごとくアリーナに見切られてしまう。

ラグサスの目の前まで迫ったアリーナは、ラグサスの身体に突き刺さったままの悪魔の剣『皆殺しの剣』を掴むと力を込めてその身体から引き抜いた！

「グアー！！」

小さな悲鳴を上げるラグサスに、容赦なくアリーナはその剣をラグサスの左肩口から右脇腹へと斜めに振り下ろした。

だが、ラグサスの硬い身体の前に、今度は剣の方が悲鳴を上げた。悪魔の剣『皆殺しの剣』はラグサスの左胸まできたところで刃にひびが入り、粉々に砕け散った。

「・・・」

ほんのわずかな間だけであったが、剣を握りしめたアリーナも、剣の呪いによってその心が蝕まれていた。

剣が砕け散ることによって呪いから解放されたわけだが、ユータと同じように放心状態となってラグサスのすぐ真横に倒れ込んだ。

「・・・バカな、我は、上級・・・魔族ぞ・・・、人間にごときに敗れると・・・いうのか・・・」

ラグサスの髑髏の目の奥に光っていた紫色の光が徐々に薄れていく。

ラグサスもまた、両膝を地面に着くとそのままうつぶせに倒れ込んだ。

それが、デスナイト 甲殻騎士と呼ばれた上級魔族の最期であった。

ラグサスの力で動き回っていた骸骨剣士達もその場に崩れ落ち、骨の塊となる。

「ア、アリーナ様・・・」

ラグサスの最期を見届けたクリフトはアリーナに駆け寄ると、再び『聖水』を道具袋から取り出し、それを使ってアリーナに解呪の魔法【シャナク】を施す。

「・・・駄目だ、私の力では剣の呪いを抜はいきれない・・・」

解呪の魔法【シャナク】を使ったクリフトであったが、呪いの力の方が圧倒的に強く、魔法の効果はほとんど得られなかった。

「とにかく、サランの町へ・・・」

クリフトはアリーナ、そしてユータの二人に肩を貸し、重い身体を引きずるようにサントハイム城のすぐそばにある城下町、サランを目指した。

—— サントハイム城下町・サラン ——

「・・・これはひどい・・・」

サランへと辿り着いたクリフトは何人かの住人に助けを求め、なんとか、町の教会へとアリーナとユータの二人を運び入れた。

教会にいた年配の神父はユータの容体を見て思わず顔をしかめた。アリーナのかかっていた呪いもやっかいなものではあったが、クリフトが事前に施しておいた解呪の魔法【シャナク】のおかげで、それほど急を要するような状態ではなかった。

問題はユータの方であつた。

長い間、剣の呪いに心を蝕むしばまれていたユータはそのまま命を落としてもおかしくない危険な状態であつた。

神父はやれるだけやってみようと、教会で働いているシスターや見習いの神官達に大規模な解呪の魔法を使う準備をするよう指示を出す。

魔法を行使する場所は、教会奥にある人一人入れる程度の小さな泉と決めた。

ユータを泉の中に入れると神父、シスター、見習い神官達はその泉の周りをぐるりと取り囲む。

そして精神を集中し、解呪の魔法【シャナク】の呪文を唱えた。

ユータのかかっている呪いを解く儀式の準備が行われている間に、先にアリーナにかかっていた呪いが神父の使った解呪の魔法【シャナク】により解かれていた。

アリーナは教会にある一室のベッドの上で小さな寝息を立てて静かに眠っている。

そのアリーナの様子をクリフトはベッド脇の椅子に腰掛け見守っていた。

クリフトも神官なので、ユータにかかっている呪いを解く手伝いをするべきと思い、教会の神父にその旨を進言するが、疲れ切った身体では大した力にならず、逆に呪いの力に取り込まれてしまい、足を引っ張る可能性の方が高いので神父にその提案を却下されてしまっていた。

何もできず、ただこうして見守ることしかできないクリフトはくつと唇を噛みしめた。

「今の私にできることはないのだろうか？」

クリフトはアリーナの寝顔を見つめながら、そつと呟く。

「そう言えば、伝説の勇者のことが書かれた書物・・・、まだ確認してなかったっけか・・・」

クリフトは今一度サントハイム城へ行ってみようと思い、アリーナを起こさないようにそつと席を立つ。

音をたてないように気をつけながら扉を開けるとアリーナの方へ目を向けた。

アリーナはぐっすりと眠りについているようだった。

眠っていることを確認するとクリフトは静かに扉を閉めて、教会の入口へと向かった。

教会の外へとやって来たクリフトは天を仰ぐ。

空はすでに日が暮れて満天の星々がキラキラと輝いていた。

サントハイム城に向かうため、クリフトは足早に町を後にした。

サントハイム城・1階・広間

サントハイム城へと辿り着いたクリフトは、正面入り口脇の勝手口から城内へと入っていた。

先ほど、アリーナとユータの二人を連れて城を出る際に、正面の大扉の鍵を内側から開けておいたのだから、正面から堂々と入ればよかったのだが、いつもの癖でつい勝手口の方へと足が進んでしまっていた。

「・・・それにしても、なんて言うか・・・お化けでも出そう・・・」

窓から月の光や星の光が入り込んでいてロウソクの明かりがないと歩けないというほど暗くはない。

しかし、薄暗い上に人の気配が全くしない城というのはある意味お化け屋敷のようで不気味な感じが漂っていた。

「あ、そう言えば、鉄の槍を謁見の間に置きっぱなしだったっけ・・」

クリフトはアリーナとユータの二人を抱えてサランの町へ向かうことで手いっぱいだったため、荷物となった鉄の槍を謁見の間に放置していたことを思い出した。

まずは、何かあった時のためと鉄の槍を取りに2階の謁見の間に向かうことにした。

—— サントハイム城・2階・謁見の間 ——

「！」

謁見の間に向かうため階段を上っていたクリフトは、人の話し声と思しき声が聞こえてきたことに気が付き足を止めた。

その話し声はどうやら謁見の間からするようである。

クリフトは身を屈めつつ、話し声に耳を澄ませた。

「・・・どうする・・・^{どの}殿・・・」

「^{どの}殿はいらない・・・、どうにもならな・・・・・サスは人間に敗れた」

「・・・」

話し声から察するに男二人のようではあるが、断片的に聞こえるその話では内容がいまいち掴めなかったクリフトは気配を殺しつつ階段を登った。

音をたてないようにゆっくりと階段を登ったクリフトは頭一つ分上階へ出せるところまでやってきていた。

ここまで来ると、男二人の話し声ははっきりと聞き取れる。
クリフトは再び、息をひそめて耳を澄ませた。

「ラゲサスは油断をしたから人間に敗れた、それだけのことだろう」
「ピサロ様はその答えであつても納得するかもしれん・・・だが、
シューザイル・・・闇神官の奴がそれで納得すると思うか？」
「・・・」

「あいつは俺達がデスナイト甲殻騎士の奴と行動していることを知っている、
きつと原因は何だと根掘り葉掘りと聞いてくるぞ」

「闇神官シューザイルか・・・」
エビルプリースト

「俺は知ってんだぜ、アンドレアル竜騎兵よ」

「？」

「ついこの間、バトランドの小国でエビルプリースト闇神官の部下が死んだな、確か、
ティラミスとか言つたか、あいつを始末したのはお前なんだろう？」

「・・・何のことだ？」

「白切る気か？」

「・・・」

「ティラミスの奴は俺達七魔帝の面子に比べりや大した力はない、
だが、人間如きが易々と倒せるような相手でもない」

「・・・」

「あの日、七魔帝の中でバトランドの偵察に行つていたのはアンドレアル竜騎兵、
お前だけだ」

「・・・私はバトランドの偵察に行つていたわけではない、ガーデ
ンブルグに行つていたのだ、あそこには勇者が使つていたとされる
盾があるからな」

「バトランドもガーデンブルグも大差はなかるう、すぐ隣の国だし
な」

「・・・」

「バトランドの一件はグリード・・・封魔騎士の奴がアンドレアル竜騎兵は口ザ
リーヒルにいたと口裏を合わせてくれたようだから、角立つことな

く丸く収まったが、今回はそういうわけにはいくまいぞ」

「・・・」

「デスナイト 甲殻騎士の奴が勝手にやって、勝手にくたばったことであつたとしても、きつとあいつはなんらかの因縁をつけてくる」

「・・・その時はお前が助けてくれるんだろう、ガイザー？」

「はあ！？ 俺が！？ 冗談じゃねえ、俺がエビルプリースト闇神官の奴を嫌つてるのを知ってんだろ、あんな奴と顔を突き合わせるなんざ死んでもごめんだ」

「・・・ラグサスの死について話をするタイミングと機会は私が作る」

「・・・」

「話をするタイミングは・・・、ピサ口様とシューザイルの二人がデスパレスにいる時がよろう、その時私とともにラグサスの件を報告する」

「その時、口裏を合わせろってか？」

「合わせる必要はない、ありのまま事実を伝えればいい、ラグサスが勝手に戦い、勝手に負けた、それだけだと・・・、そもそも私はラグサスではなくガイザー、お前と行動していたのだから」

「・・・なるほどな、確かにアンドレアル竜騎兵は俺と行動していた、それは事実だしな」

「さて・・・、そろそろ行くでしょう、この国にもう用はない」

「？ デスナイト 甲殻騎士の奴が言つてた、この国の王女はどうするんだ？ 伝説の勇者だつて可能性があるんだろ？」

「それはない」

「・・・何で分かるんだよ？」

「伝説の勇者は熟練すれば武器を取っても魔法を使わせても我ら上級の魔族にすら引けを取らない強さを持つという、だが、この国の王女にはそもそも魔力がかけられない」

「お前、今、熟練すればって言つたじゃねえか・・・、今は使えなくても修練すれば使えるようになるんじゃないか？」

「・・・修練したところで、魔力がないのでは結局使えんさ・・・。
修練して強力な魔法が使えるようになるのは、ほんのごく僅かでも
魔力を持ち合わせている者のみ」

「・・・」

「修練して魔力を得られるようなら、人間達は全員魔法が使えるよ
うになつてゐるだろうよ」

「・・・てことは、魔力のないこの姫さんは魔法が使えるえ・・・。
つまり伝説の勇者であるわけがないってわけか・・・」

「そうだ」

「ははははは・・・、じゃあ、デスナイト甲殻騎士の奴は無駄死にしたってわ
けだな」

「そういうことになるだろうな」

「ははははは・・・あの勘違い野郎、傑作じゃねえか、笑える」

「だからこの国にもう用はない」

「よし、じゃ、デスナイト甲殻騎士の件はお前にまかせたぜ、アンドレアル竜騎兵・・・」
「・・・」

アンドレアル（・・・竜騎兵って確か、あの古塔にいたレグルスとかつていう・・・
ラグサスの・・・仲間・・・）

息をひそめてレグルスとガイザーの話を盗み聞いていたクリフト
は、その場に硬直していた。

「・・・」

二人の話し声が聞こえなくなってもしばらくクリフトはその場か
ら動けなかった。

おそらく転移の魔法【ルーラ】を使って移動したのだと思うが、
それを確認する勇気が出なかったのだ。

「・・・」

クリフトは恐る恐る頭を上階へと出し、二人がいないことを確認
する。

そして、鉄の槍を取りに2階へと足を進めた。

無事、謁見の間に放置してあった鉄の槍を取り戻したクリフトは逃げるように1階の広間へと戻ってきていた。

「・・・早く目的を済ませて、アリーナ様の元へ戻ろう・・・」
レグルスとガイザー、奇しくもラグサスと同じ上級魔族の二人の話の場に居合わせてしまったクリフトは肝を冷やしてしまっていた。幸い、二人に気づかれることはなかったが、もし見つかったら命はなかったであろう・・・。

「ブ、ブライ様の部屋は・・・」
クリフトは気を落ち着かせるように呟くが、声が上ずっていることが自分でもよく分かった。

「・・・」
クリフトは大きく首を左右に振って、気を落ち着かせようと努めた。

最後に大きく深呼吸すると、ブライの部屋へと歩き出した。

しばらく城内を歩き回ったクリフトはようやくブライの部屋へと辿り着いた。

いつもの城内とは勝手が違い、月明かりだけを頼りに進んでいたため、クリフトはずいぶん遠回りをしたような気がした。

「と、とにかく、早いとこ見つけないと」

クリフトはブライの部屋に入ると、手探りに本棚を物色した。

ブライの部屋はちょっとした図書室のようであった。

所狭しと並べられた本棚には、魔道書の類たぐいのものから、歴史書、神話の伝承が書かれた書物に至るまでサントハイム王国に必要な情報がぎっしりと詰め込まれていた。

「伝説の勇者・・・、伝説だから、神話の伝承かな？」

クリフトは窓から入る月明かりを頼りに神話の伝承の書物が収められた本棚を探す。

「神話、神話と・・・」

神話の伝承が収められている本棚を探していたクリフトは、呆然とした表情で立ち止まった。

「・・・」

クリフトの目の前には確かに神話と書かれた札が本棚の一番上の段の左端から出ていたのだが、五段に分けられていたその本棚の本は上から下までぎっしりと詰め込まれていた。

「・・・まさか、こ、これ全部、神話の伝承？」

クリフトは軽い目眩めまいを覚えた。

とてもではないが、すべての本を持ち出すことは出来そうもない。とにかく、伝説の勇者に関わりそうな文献を探そうと、手当たりしだいに本を手にとっていった。

「違う・・・、こっちも違うな・・・あゝもう、どれが勇者に関わる本なんだ？」

—— サントハイム城下町・サラン ——

「・・・リフト、クリフトってば」

「う、うゝん」

サントハイム城にあるブライの部屋で伝説の勇者に関わる書物を探していたクリフトであったが、途中で強い睡魔に襲われたため、やむなく作業を中断してサランの町に戻ってきていた。

サランの町へと戻ったクリフトは、教会の客室にあった長椅子で横になるとそのまま深い眠りに落ちていたのだが、聞き覚えのある声に重い目蓋まぶたを押し開けた。

「目、覚めた？」

「あ、アリーナ様、おはようござ・・・！！！」

クリフトに声をかけて起こそうとしていたのはアリーナであった。最初のうちはとくに気にすることなく返事をしていたクリフトだったが、突然パツと身体を起こすとアリーナの方へ顔を向けた。

「アリーナ様、お身体の具合はもうよろしいのですか？」

昨日の出来事を思い出したクリフトは、アリーナに向かってそう問いかけていた。

そんな心配性なクリフトにアリーナは笑顔を見せる。

「ええ、もう大丈夫よ」

「・・・それはよかった」

アリーナの様子にクリフトは安堵のため息を吐く。

「ユータも一命は取り留めたらしいわ」

「！！！」

「だいぶ容態も安定してて、話をすることも問題なくできそうだから、ちよつといろいろ聞いておこうかと思うんだけど、一緒に行かない？」

「！ 行きます！！！」

ユータのことを引き合いに出されたクリフトは、アリーナの誘いにすぐさま応じて飛び起きると部屋を出た。

そして、アリーナとクリフトの二人は教会で働くシスターの一人に案内されながらユータのいる部屋へと向かった。

「お邪魔します」

ユータのいる客室へとやって来たアリーナとクリフトは軽く扉を叩いて入室した。

小さな部屋の中央にはベッドが置かれ、ユータがそのベッドの上で横になっていたが、アリーナとクリフトの入室に気がついたユータは身体を起こした。

「寝ててもいいわよ」

「・・・」

アリーナがそつとユータに声をかけたが、ユータは首を軽く振って答えた。

アリーナとクリフトはベッドの近くにあった椅子にそれぞれ腰かけるとユータの方へ顔を向けた。

「・・・関わってしまったな、お前達・・・」

「あの魔族のこと？」

ユータの言葉にアリーナが問いかける。

ユータはその問いかけに無言でうなずいた。

「・・・ねえユータ、あの魔族・・・ラグサスは、この私が伝説の勇者かもって言ってたわ」

「・・・」

「私って、ホントにその勇者っていうのかな？」

「・・・そう・・・かもな」

「！」

アリーナの呟きにユータは少し視線を外すが、すぐにアリーナの方へ目を向け直すと、その言葉を肯定した。

ユータの言葉に異論があったクリフトは声を上げようと身を乗り出すが、アリーナにそれを止められる。

「うそね・・・」

「・・・」

ユータの目を見たアリーナはそつと呟いた。

その言葉にユータは何も答えない。

クリフトもまた、驚いた顔でアリーナの方へ目を向けた。

「あの時、バザーのあの時、ユータは・・・『フィナは、伝説の勇者は必ず守る』って言ったわ」

「・・・」

「その、フィナって名前の人が勇者なんじゃないの？」

「・・・」

アリーナの問いかけにユータは何も答えない、押し黙ったままアリーナを見つめる。

アリーナの目が真剣であることはユータにも見て取れていた。

そして、アリーナとクリフトが信頼のできる人物であることもユータには分かっている。

しかし、それでもユータには伝説の勇者についての話をすることはできなかった。

「アリーナ、その問いには答えられん、お前が伝説の勇者であると勘違いしてくれたのなら、俺はそれでもよかった」

「ちよつと、それどういう意味よ!!」

「・・・アリーナ様」

「・・・」

ユータの返答にアリーナが声を上げるが、それをクリフトが席を立てて遮った。

アリーナはクリフトに邪魔しないでと声を上げようとしたが、クリフトの目を見た瞬間その言葉を飲み込んでしまった。

クリフトは睨みつけるような鋭い目をしていた。その眼差しはユータに向けられている。

「ク、クリフト？」

クリフトのその鋭い眼差しにアリーナが不安な表情で呟く。

「ユータさんはさつき、『お前が伝説の勇者であると勘違いしてくれただのなら、俺はそれでもよかった』と言いましたね」

「・・・」

「ユータさん、あなたはアリーナ様に、そのフィナッて人の身代わりをさせようとしたんじゃないですか!？」

「身代・・・わり・・・?」

クリフトの強い口調での問いかけに対して、アリーナがぽつりと呟き、ユータの方へ顔を向けた。

「ユータさん、それは酷いんじゃないですか?」

「・・・」

クリフトの言葉にユータは何も答えない・・・いや、答えられなかった。

クリフトの言うことは間違いなくユータが考えていたことであつたからだ。

すなわち、アリーナを身代わりに仕立てて本物の勇者を魔族達の間から欺くための策略。

もちろん、最初からアリーナを身代わりにするつもりなどなかった。

アリーナの言っていた『ラグサスは、この私が伝説の勇者かもつて言つてたわ』という言葉聞いて、身代わりを仕立てることを思いついたのだ。

しかし、アリーナが勇者であるというユータの肯定を当のアリーナ自身にあつさり否定されてしまった。

また、この身代わりの件でクリフトが怒るのも無理からぬことであることも分かつている。

勇者を狙う者達は人間が容易く倒せるような魔物ではない。

魔族、しかも魔族の王に直接指示を受けているような上級のそれである。

勇者の身代わりになどさせられたら、命がいくつあつても足りないだろう。

だが、そんな中アリーナがまたしてもとんでもないことを言い出した。

「私、勇者の身代わりやつてもいいわよ」

「えっ！！？」

「はっ？」

アリーナの突然の言葉にクリフトは素っ頓狂な声を上げ、ユータは実に間の抜けた声を上げた。

「ちよっ、アリーナ様！！ 何言ってるのか分かってるんですか！？」

「分かってるわよ、強い魔族に狙われるってことでしょ」

「・・・分かってるなら何で・・・」

「いいじゃない、面白そうで」

「・・・」

アリーナの『面白そう』という言葉聞いて、かつてブライがやったようにクリフトもまた、がつくりと肩を落とし頭を下げてうなだれた。

「それに、どのみち私たちは魔族の城へ行かなきゃいけないのよ」

「えっ？」

「お父様・・・、サントハイム城にいた人たちを魔族の手から取り返さないと・・・」

「！ そう・・・でしたね・・・」

アリーナの呟きにクリフトはラグサスから聞いた言葉を思い出していた。

城に住む者たちは皆、魔族の城、デスパレスへと招待してやったというあの言葉を・・・。

クリフトは再び椅子に腰を下ろすと聞き手に戻る。

「で、私がユータに聞きたいのはね、伝説の勇者のこともそうだけど、それより、あの魔族のことについて知りたいのよ」

「・・・魔族、ラグサス達のことか・・・？」

「うん」

「・・・分かった、勇者のことは教えられんが、魔族のことについては知っていることはすべて話そう、何が知りたい？」

「んとな、まずは、魔族の城がある場所」

「・・・知らん」

「・・・」

知っていることはすべて話すと言っていたユータにアリーナはいきなり出鼻をくじかれた。

アリーナはがつくりと肩を落として頭を下げるが、ユータは気にすることなく言葉を続けた。

「・・・ただ、魔族の国が《ラドログレアータ》と呼ばれる小大陸しょうたいりくにあると聞いたことがある」

「らどろぐれあーた？」

「聞いたことのない大陸名ですね」

ユータの言葉に気を取り直したアリーナは頭を上げてから首をかしげる。

クリフトもまた顎あごに手を当てて首をひねる。

「南の方にある大陸の一つらしいんだが、俺は南方大陸には行ったことがないんで分からない・・・」

「そうですか・・・」

「すまん・・・。ほかに聞きたいことはないか？」

「えーと、あのラグサス達、七魔帝とか言ってたっけ？ 七魔帝っていうくらいだから強い魔族は7人なんだろうけど、名前とかって分かる？」

アリーナの問いかけにユータは首をかしげる。

「そうだな・・・あの古塔であつた、甲殻騎士ラグサス、竜騎兵レグルス、魔人ガイザーの3人を除けば、知ってるのは後3人ってとこだな」

「誰々（だれだれ）??」

「確か、獣王ゲリュオンと暗黒魔道士イライザ・・・それに、封魔騎士グリードだったかな？」
キングレオ ダークマージ ナイト デスナイト アンドレアル ヒサロ

キングレオ
「獣王ゲリユオン、暗黒魔道士イライザ、封魔騎士グリード・・・」
ユータの言葉にアリーナが復唱する。

そんな中、ユータの話を聞いて、右手の指を折ったり伸ばしたりを繰り返していたクリフトがおもむろに声を上げた。

「それで、7人ですよ」

「??」

「実は、私、アリーナ様やユータさんをこのサランの町に連れて来た後、一人でサントハイム城に行ってみたんです。で、二階の謁見の間にいた、あのレグルスとガイザーって魔族の話を盗み聞いてしまったんですけど、その話の中に確か・・・闇神官シューザイルって名前が出たんです」

エビルフリスト
「闇神官シューザイル・・・」

「あの二人の話しぶりから察しても、まず間違いなく七魔帝の者だと思っんですが・・・」

クリフトの話を聞いていたユータはうなずくように首を振っていた。

「クリフトの聞いた話が本当なら、たぶんそれで合ってるんだろう・・・」

「そう言えばクリフト」

「？」

「あのラグサスって奴、どうなった？ やっぱり逃げられた？」

「??? ああ、そうか、アリーナ様もユータさんも呪いで倒れてたんですよ・・・。倒しましたよ、アリーナ様が・・・」

「倒した!? 本当か!？」

「・・・」

クリフトの返答に、問いかけたアリーナではなくユータが飛び付いて来た。

クリフトは思わず言葉を飲み込みそうになるが、何とか持ち直し言葉を続けた。

「えっと、はい、倒しましたよ、アリーナ様が」

「そうか・・・、倒せたか、あの魔族を・・・」

クリフトの返事にユータは安心したように呟いた。

「やった、私があ魔族をやっつけたのね！」

アリーナが嬉しそうに両腕を上げるが、クリフトが不満の声を漏らした。

「やった、じゃありません・・・、あの剣に触^{さわ}つてはいけないと言ったのに、どうして掴^{つか}んだりするんですか！！」

「えゝ、だってゝ、あれ使わないと倒せそうもなかったじゃない」

「そういう問題ではありません！！ 幸い剣が砕けて呪いから解放されましたが、もし砕けなかったらどうなっていたか・・・」

「・・・前にユータが言つてたじゃない、結果オーライよ」

「・・・そうですか・・・ 大変な思いをしたのは私だけですか・・・」

笑顔で言うアリーナにクリフトは涙を流しながらがっくりとうなだれた。

「さて、聞きたいことは聞いたし、そろそろ行こっか」

ユータからだいたい聞くべきことは聞いたと判断したアリーナはそう言つて腰かけていた椅子から立ち上がった。

うなだれながらもクリフトもまたそれに続いて立ち上がる。

「あ、そう言えば、南の大陸へはどう行けばいいのかしら？」

部屋を出る直前に、まだ聞いていないことがあったことに気がついたアリーナはユータの方へ振り返りながら言った。

「・・・ここから東にあるブランカ王国にコナンベリーって港町がある、そこから南の大陸への連絡船が出ていたはずだ」

「ブランカ王国のコナンベリーね？」

「ああ、前はエンドール王国からも南方大陸の一つであるバロビリアデイク^{だいたいく}大陸に連絡船が出ていたらしいんだが、ここ最近はめっきり出なくなつたから、やはりコナンベリーまで行くしかないだろうな」

「エンドール王国なら知ってるけど、どうして船が出なくなったのかしら？」

アリーナが頬を人差し指でさすりながら呟くように尋ねるが、ユータは首を左右に振って答える。

「・・・詳しくは知らないが、バロビリアデイク王国の前国王が病死してから連絡船の出入港が厳しく制限されるようになったらしいな」

「そっか・・・」

「だから、エンドールからの連絡船に乗り、ブランカ経由でコナンベリーの港へ行つて、そこから南方大陸への連絡船に乗るのが早いはずだ」

「分かった、ありがとう」

ユータの説明に納得したのか、アリーナは笑顔で礼を述べるとクリフトとともに部屋を退出した。

二人が去った後、ユータはそつと近くの窓から外を眺める。

「ブランカ王国か・・・」

空を流れゆく雲を見つめながら、遠き故郷を思い出していた。

ユータの故郷はブランカ王国の北の山奥にある名もない隠れ里のような小さな村だった。

村に住む者たち以外との交流などまったくなく、そこだけ時間が止まってしまっているようなとても穏やかな村。

ユータはその村で父親と母親、それに妹の四人で暮らしていた。村にいてとくにつまらないと思ったことはなかった。

元々、外との交流がないから、村の中での出来事にしか興味が湧かなかったからなのかもしれない。

しかし、このユータの故郷の村は決して村人以外の者には知られ

てはならないある一つの重大な秘密を持っていた。

ユータも二十歳^{はたち}になるまで聞かされることのなかった、村の者達が隠していた秘密……。

それは、ユータの妹（正確には義理の妹）のフィナが神より与えられた使命を果たすために生を受けた『伝説の勇者である』ということだった。

ユータの妹であるフィナこそが、魔族達が血眼^{ちまなこ}になって捜している伝説の勇者のそれなのである。

その秘密を父親から聞かされた時、なぜフィナがそんな重い使命を背負っているんだと喰ってかかったことがあった。

父親に文句を言っただと変わることもない事実だが、それでも何かに気持ちをぶつけないと収まらないほどの衝撃だった。

そして、ユータはその後すぐに何も告げることなく村を出た。

フィナが勇者である以上、いつか起こる魔族達との戦いはきつと避けられない。

それならば、自分の役目はただ一つ、フィナの前に立ちふさがるのであろう魔族達を一匹でも多く打ち倒すことであると心に決めて……。

「……フィナ、元気にしているだろうか？」

ユータは窓の外を流れる白い雲に、遠き日の妹の姿を映し出していた。

黄緑色の短い髪の毛をサラサラと風に乗せて走り回る姿……。

だが、そんな可愛らしい笑顔を見せていたフィナの姿が突然消え、かわりに恐怖で怯えたような顔をしたフィナの姿が雲に映った。

次の瞬間には、フィナの身体が真っ赤に染まり倒れていく……。

「！」

ユータは思わず窓から目をそむけた。

ユータが見た幻影……。

それは、いつかフィナの身に起こるであろう可能性を示唆するものであった。

魔族が村を襲い、勇者であるフィナを殺してしまうという可能性……。

「……もつと、もつと強くならなくては……」

ユータは両手で掛け布団を強く握り締めた……。

一方、ユータの部屋を後にしたアリーナとクリフトは、サランの町の入口までやってきていた。

ちよつと先にはサントハイム城の姿が見て取れる。

しばらく城には戻れないのだからと、アリーナとクリフトはしっかりとサントハイム城の姿を見つめる。

「行くわよクリフト、お父様達を助けに……！」

「はい、アリーナ様！」

かくして、アリーナとクリフトの二人はサントハイム城の人々を助けるため、魔族の国があると言われる大陸《ラドログレアータ》を目指し旅立ったのだった。

死霊の王と狂気の剣（後書き）

やっと最終話が書き終わりました。

また、長くなりました。

ちなみに2話の時より文字数多いっぱいです。

死霊と狂気の物語はいかがだったでしょうか？

楽しんでいただけましたか？

今回は特に勇者へ続く物語の核心部分を盛り込んでみました。

これでオリキャラのユータ君の立ち位置が明確になったかと思えます。

アリーナちゃんに華を持たせようとしたら、ラグサスさんを倒さざる得ないような流れになってしまいました。

ホントは、ラグサスさんはまだ倒しちゃうはずじゃなかったんだけどな・・・。

しかも、結局なんだかんだでアリーナちゃんよりユータ君が華を持つてったような気がするし・・・。

ホント、何なんだか・・・（TTT）

本当はラグサスさんだけは、ドラクエ6に出てくる腕4本の魔物【魔王の使い】にしようかなと思ったんですよ。

ところが、ラグサスさんの立ち回りを書いてたら【スターウォーズ・エピソード3】に出てくるグリーバス將軍を思い出したのでやめました。

あの將軍も腕4本でライトサーベルを振り回してますね。

すでにキャラがモロかぶりしている感は否めませんが・・・。

一応、上級魔族達、デスパレス七魔帝の名前もこれですべて判明したかと思えます。

レグルス君がなぜか仲間割れの行動をとっていますが、そのあたりもいずれちよこつと触れる程度に書こうかと思っています。

ここまで書いて気がついたんですが、ブライ様が完全にその姿を消してるんですよ……。

どうしようかな？

勇者を含めて導かれし者達は合計8人。

ライアン、アリーナ、クリフト、ブライ、トルネコ、マーニャ、ミネア、勇者の計8人……。

この際、ブライ様を永遠に消して、ユータ君をその枠に収めるのも手かと思ったりして。

でもそれやったらドラクエ4じゃ、なくなっちゃうな……さすがにまずいか……。

ただ、ブライ様の立ち位置がかなり嬉しいことになってるのは間違いないですね。

テンペの村でまだ休養していることにすれば、勇者の章ではアリーナちゃん達と合流させて動かすこともできるし、逆に城へと戻ったのなら魔族に捕らえられてデスパレスに連れて行かれたことにすることもできると……。

どうしよっかな？

ちなみに次はトルネコさんの章を書く予定です。
オリキャラのユータ君もトルネコさんの章で再登場？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3471g/>

運命を背負いし高嶺の花

2010年10月8日10時31分発行